UFO目撃体験特集号

UFO contactee

GAP-JAPAN NEWSLETTER

UFO・超能力・宇宙哲学

コンタクティー

SUMMER 1988

101

宇宙的家族のUFO目撃の日々

円盤の窓から手を振る"異星人"

長野県に出現したUFOの大群

頻繁なUFO目撃と超能力体験

〈連載第4回〉

UFO-宇宙からの完全な証拠

CONTENTS

〈巻頭言〉物証と心証 1
宇宙的家族のUFO目撃の日々 坂本茂子 2
精神的指導者に対する警告 ジョージ・アダムスキー 9
円盤の窓から手を振る"異星人" 齋藤庄一 10
長野県に出現したUFOの大群 博田文喜 17
頻繁なUFO目撃と超能力体験 佐々木八郎 20
科学――SCIENCE 26
GAP短信 29
UFO-宇宙からの完全な証拠〈連載第4回〉 ダニエル・ロス 30
〈投稿欄〉ユーコン広場 41
〈予告〉エジプト・イタリアの旅 43
本誌バックナンバー掲載記事目録 44
〈予告〉仙台・山形／秋田・青森／旭川・札幌／各合同支部大会 45
〈広告〉アダムスキー全集／英文版ユーコン 46
全国月例研究会案内 47

レイアウト・デザイン　久保田八郎／表紙写真　グレードワン

◀金星人からジョージ・アダムスキーに伝えられた金星のシンボルマーク。2個の図形の内、左側は宇宙の父性原理(陽)、右側は母性原理(陰)を意味する。円は宇宙をあらわしている。

GAPについて

ＧＡＰは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がＵＦＯの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本ＧＡＰの目的はＵＦＯとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1．この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

〈巻頭言〉

物証と心証

三十五年に及ぶUFO研究で痛感するのは、人間は如何に他人の体験を信じたがらないかという点だ。これは地球人が物的証拠のみで事実を確認する習性を有するからで、物証に頼りたがるのはあらゆる感覚器官のなかで目という視覚器官を最優先させて、テレパシックな感覚を応用しないからだ。

むかしGAP会員で東京出身のH君という人がいた。三十年代中期、まだ高校生だった同君が、島根県の田舎町で細々とGAP活動を続けていた編者の陋屋を訪れたことがある。西日本周遊旅行の途中立ち寄ったという。単身で旅をするだけあってしっかりした少年だったが、卒業後音信はと絶えた。

二十数年後に、突然同君から電話があり、世にも不思議な話を聞かされた。なんと十数年間一睡もせずに生きてきたのだという。唐突な話なので戸惑ったが、編者宅へ来るように告げると数日後にやってきた。すでに不惑を超えた同君はかなり体力が弱っているものの、むかしの面影を残していた。

冷静に訥々と語る驚くべき話を聞いているうちに、これは真実であるという強烈な印象がやってきた。一秒間たりとも眠らなかった十数年間の不眠状態をどこの病院で説明しても全く相手にされず、果ては気違い、ウソつきの烙印を押されるばかりで、同君の方から医師を見放したという。眠らないこと自体、さほど苦痛ではないが、百パーセント他人から信用されず、イカサマ扱いされるのが残念でしょうがなく、何とか信じてもらいたいの一念でやってきたという。

この話は七、八年前本誌に書いたので記憶している方もあるだろう。普通の人間は一週間以上不眠状態を続けることは不可能とされている。ローマ軍の捕虜となったマケドニア王は強制的不眠のために死んだ。十数年間の不眠記録はギネスブックどころではなく、医学上の謎中の謎、神秘中の神秘だろう。よろめきながら出て行ったH君からの消息はない。不信感を買ったと思って失望したのかもしれない。

事実は小説よりも奇なりという陳腐な諺を持ち出すまでもなく、世の中には信じ難いような不思議な話がいっぱいある。それでも人々に不信感が起こるのは〝物的証拠〟という妖怪のためだ。しかも感情的になって否定する人にはこの妖怪の魔力すら通用せず、反撃のための反撃を続けたりする。

戦後四十三年間、世界で無数のUFO目撃やコンタクト体験者が出現した。そして懐疑論者の攻撃で消滅したのもある一方、強力な支持を受けて生き残っているのもある。物的証拠という次元を超えて、体験者の人柄、思想その他の判定材料により事実であるとの判断が下された結果だ。裁判用語ではこれを「心証」という。これは裁判官が訴訟事件の審理において、事実認定について心の中に得た確信または認識を意味する。この心証を排除して絶対的に物証のみを判断材料とすれば裁判はお手上げになるだろう。

もっと重要なのは、心証よりもむしろ一人物の言明に対して不信の自由もある一方、「信じてもよい」自由もあるという点だ。その〝自由〟という見地からすれば信ずる者と不信者間に争いがあってはならない。懐疑論者が信ずる人を誹謗するのは論外である。他人の自由を侵害することになるからだ。

アダムスキーの体験について物証がないという理由で否定する人がいる。しかしアダムスキー没後二十四年にしていまなおアダムスキー型円盤と呼ばれるUFOが国内外で目撃撮影され続ける事実を否定論者は何と説明するだろう。これ以上の物証はあるまいに――。

これらのUFOが我々の太陽系内の惑星群から来るというア氏の主張を否定する人の根拠は、惑星探査機により太陽系の地球以外の惑星に生物は存在しないことが〝判明した〟ことにあるという。だが実は米ソ両政府も科学機関も「太陽系の地球以外の全惑星に生物は存在しない」と公式声明を出した事実はない。NASAその他から断片的に流れる情報によって多数の民衆がそのように思い込んでいるにすぎないのだ。

本誌93号から五回に渡って連載した春川正一氏（仮名）の「私は別な惑星へ行ってきた！」にしても物証がないという理由でひどい流言蜚語や攻撃があった。これが発生するのは、おおむね本人に接したことがなく、したがって人柄や人格を全く知らず、他人の無定見な噂話だけを自己の判断材料にしているにすぎないからだ。真実を知るためには何はおいても本人と面接して話を聞くか、または本人をよく知る人たちの意見や感想等を求めて客観的な判断材料を集めることが肝要である。こうしたことを全く実行しないであたまから否定してかかるのは研究家的態度に程遠いし科学的でもない。

実は春川氏には重要な証拠物件がある。かねてから氏は別な惑星で人工的に作られた或る〝物〟を編者に預けていたのだ。目下某大学で鑑定中だが、驚異的な物だとの結果が出つつある。いずれ正式な研究報告を待って発表することになるかもしれない。最初から勝負はついていたのだ。

しかし多年のUFO研究で腹の底から痛感するのは、物証もさることながらテレパシックな感知力の重要性である。これこそ心証の根幹だ。（久）

A Cosmic Family's UFO Sightings

宇宙的家族のUFO目撃の日々

●坂本茂子〈日本GAP会員〉

アダムスキーの『宇宙からの訪問者』との出会い以来、急速に宇宙的カルマが発現、環境が大変化し、UFO目撃がふえてきた一主婦の愛と歓喜の物語。

なぜか本を買わなかった

私がジョージ・アダムスキーの名前を聞いたのは中学か高校の頃でした。それ以来、彼が宇宙から来た人と会い、その円盤に同乗したということを書いた本をぜひとも読みたいものだと長いあいだ思っていましたが、当時、書店の数も多くない秋田では見つけることができず、そのまま東京の大学へ進み、そこで出会った主人と二十五歳で結婚し、茨城県の水戸市へ移り住みました。

それから二人で話し合い、それまでお互いに心中に秘めていたあこがれのアメリカ行きを実現させようと、二年間働いて、二十七歳のとき、夫婦で約二年間の留学生活に出かけました。

もちろん会社もやめ、とりそろえた家具もほとんど売って旅費にあてました。

アダムスキーの本を初めて手に取ったのはその準備に追われているある日の午後のことでした。飛び上がらんばかりに喜んだ私でしたが、なぜかその本を手に取ったまま長い時間、そこに立ちつくしていたのです。そして結局本を元にもどし、買わずに帰りました。

それから約十年後の一九八五年八月、私はやっと念願の『宇宙からの訪問者』(アダムスキー全集第1巻)を手にしたのです。

以来、生活の内面はあっというまに変化し、私たちの今生における人生の目標も定まってきつつあるこの頃です。

不思議な夢と、秋田市へ移住したくなった奇妙な衝動

この広い宇宙に住んでいるのは地球人だけであるという考えは、小さい頃から私には受け入れがたいものでした。それじゃあんまり寂しすぎるというのが幼い頃の私の考えで、よそにもきっと友達がいて、彼らは円盤というものに乗って、いつかはきっと来てくれるだろうと思っていました。

アダムスキーの本を手にしてから二年あまり、特に去年(昭和六十二年)夏の日本GAPの海外旅行以来、私の前には、小さい頃から思い描いていた、彼らの乗った乗り物がひんぱんに現れるようになりました。それは私だけにとどまらず、身近な人たちも次々と目撃していったのです。

今から考えると、その始まりと思える出来事は六年程前のある晩に起こりました。眠っているあいだに突然、私は自分の名前を聞かれたのです。

見ると円盤の中に男の人が乗っていて私に話しかけています。そのうしろには両側に一人ずつ立っていて、こちらを見ています。

名前を名乗ると、彼は「自分たちの存在を信じているか」と尋ねました。

私はもう今までずーっと溜っていたものを吐き出すように、「信じます。もちろん!」と叫んだのです。

そのあといろいろな事を聞かれたようなのですが、覚えていなくて、目覚めたときの私の格好は、両手をピンと伸ばし、その指先を頭上できっちり合わせてアンテナのように突き出しているという不自然なものでした。

そのあと少しすると、引っ越ししなくてはと強く思い始め、私たちはあっというまに秋田市の今の場所へ家を建てて移り住みました。

主人に言わせると、あの頃の私は異常だったというのです。急に引っ越しすると騒ぎだして、彼がどんなに反対しても聞かず、とうとう実現してしまいました。

二階の窓から太平山が見えます。なぜかその山が気になりだしましたが、理由はわかりません。しばらくして落ち着くと、新しくできたばかりの市立図書館へ通いだしました。

朝、居間に坐っていると落ち着かなくなって、結局図書館へ足が向くのです。車で三十分近くかかります。

何度目かのとき、佐藤春雄さん(秋田市在住日本GAP会員)が献本した本誌(UFOコンタクティー)を見つけました。そのとき初めて日本GAPの事、久保田八郎氏の事を知り、日本には熱心にこの問題と取り組んでいる多くの人がいる事を知りました。そしてやっとアダムスキー全集を手に入れ

ることができたのです。

ある夜の不思議な体験

『宇宙からの訪問者』を読み始めると同時に、いろいろなことが起こってきました。読み進むうちに、これは初めて読む本ではないという気持がまず起こってきたのです。ですけれど、読んでいるあいだ、私の内部はとても静かで幸せでした。

そしてある晩、いつものようにベッドの上に座って、読んでいた本をかたわらに置き、さて眠りましょうとスタンドの電気を消したとたん、足もとに尼さんが現れたのです。小柄でふっくらした中年のその人はニコニコ笑って私を見ていました。目をつぶったとき、いろいろ見えることはありましたが、こんなにパッチリあいているのに、あんまりはっきり見えるので、一瞬、息をつめました。でも恐怖感は全くありません。

あまりに素敵な笑顔なので、つい私も微笑(ほほえ)んでしまいます。日本人ではありませんが、アメリカ人の表情とも違うように思いました。ずいぶん長いあいだ私たちは見つめあっていたと思います。一生忘れたくないと思って強く見ました。

すると「ああよかった。こんなにニコニコした幸せな表情をした人で本当によかった」という気持が湧き起こり、その瞬間、尼さんは忽然(こつぜん)と消えてしまったのです。暗闇の中でしばらく動けませんでした。

主人に話しましたが、その頃の彼はこういった事柄が受け入れられず、自分自身を現代科学の理論で武装していたので、アダムスキーの事を話してもわかってもらえませんでした。

ですから私は自分の部屋でひっそりと本を読み、UFOコンタクティー誌は時間ができると図書館に通って読み続けました。でも本来おしゃべりな私ですから、ことあるごとに彼には少しずついろんな事を話し続けました。

思いもよらぬ夫の変化

そうこうしているうちに昭和六十一年冬、Uコン誌95号で、夏の日本GAP海外研修旅行でアメリカ・カリフォルニア州のデザートセンターやパロマー・ガーデンズへ行き、アリス・ポマロイ夫人に会う予定だという記事を見たのです。

「行かなくちゃ！」

私の心はもう決まっていましたが、こればかりは主人の理解なしでは無理だと思いつつ胸に秘めておりました。ミラクルワード、ミラクルイメージで何でも実現できるといっても、これはどうだろうかと、いつになく消極的に思い悩んでいるうちに年もあらたまり、96号が発行されて、春川正一氏の記事『私は別な惑星へ行ってきた！』も佳境に入り、図書館で93号からのコピーをお願いして、いつも側に置いていました。

あるとき主人に話しました。

「今年の夏、行きたい所があるんだけど」

彼の返事は思ってもみないものでした。

「行ってくるといいよ」

旅行費用を聞かれて、五十七万八千円と答えますと、いきなりウームと唸(うな)ってしばらく黙っています。

「そうよねえ、ちょっと大金だしね」

「いや、実は定期預金があるんだけど、額面がちょうど五十七万円なんだ。利子を入れると、ちょうどぴったりだよ。きっと、このお金はその旅行のためのもののような気がする。きっとそうだ」

私はポカンとしてしまいました。何かが始まったのです。それからはすぐに旅行の申し込みをして、同時に日本GAP入会の申し込みもしました。

旅行の事をあれこれ話しているうちに「オレも行きたくなったなあ」と主人が言いだすのです。

十年ぶりのアメリカが懐かしく、会いたい人も沢山いるし、八歳になる息子をみんなに会わせたいし、それならいっそ家族づれでということになりました。

八月五日から十六日までの旅行日程でしたが、彼の仕事の都合もありますので、まず私が一人でGAPの旅行に参加し、十四日にニューヨークで皆さんとお別れして、日本からちょうどその日出発する主人と息子と合流し、そのあと二週間にわたってジョージア州アトランタを皮切りに友人宅を訪ね歩くというプランになり、旅行社の田中さんにお願いしたところ、すべての切符の手配を引き受けて下さって、私たちの旅行は実現することになったのです。

この話を聞いた母がGAPの旅行だけ自分も一緒に行きたいと言いだし、

◀左から筆者・坂本茂子(38)、夫・貢一(38)、健(8)。昨年八月米カリフォルニア州のレストランにて。（撮影　ジム・バンス）

▲米ロサンゼルスにおける日本GAP旅行団。前列左より5人目が筆者・坂本茂子さん。その左は母堂。左端は編者・久保田八郎日本GAP会長（昭和62年8月，第10回日本GAP海外研修旅行「アメリカ・メキシコの旅」より。撮影＝編者。フジプロフェショナル6×9，セルフタイマー使用）

結局、八月の前半は母やGAPの皆さんと、後半は主人と息子と三人でたっぷり一カ月のこの上ない素敵な夏休みをアメリカとメキシコで過ごすことができました。

旅行の事を話しだして以来の主人の変わりようは大変なもので、それまで私一人でひっそりと読んでいたアダムスキー全集を片っ端から読みあさり、春川氏の記事も繰り返し繰り返し読んでいました。

彼の中に眠っていた宇宙的意識が一度に吹き出してくるのを見るのは、この上もなく嬉しいことでした。

円盤の写真に語りかける

GAPの旅行では思いがけずロス夫妻、ポマロイ夫人の通訳をさせて頂き、その上、ほとんど毎日のようにUFOを目撃することができました。

実は93号で春川氏の記事を読んでから、それがきっかけとなって始めた多くの方と同じように、私も夜空へ想念放射を始めたのですが、どうしても長続きしません。太平山の見える空を眺めて毎晩「来て下さい、来て下さい」とやるのですが、ほんの少したつと、「あの人たち（UFOに乗っている異星人）だって忙しいだろうに――」と思ったり、「いろんな所で、みんなでこっちに来て、あっちに来てと言っているんだから、ずいぶん大変だろうなあ」などと思ってしまい、結局、「まあ、いいや、UFOがいるのはわかっているんだし、見なくてもいい。それじゃおやすみなさい」と言って眠ってしまいます。

ですけれど、スペース・ブラザーズ（友好的な異星人）がいくらテレパシックでも人間ですから、心の中でボンヤリ思っているのではなくて、何か私に無理なくできる積極的な想念伝達法は他にないものかと考えました。人にはそれぞれ違う方法があると思ったのです。

ふと『宇宙からの訪問者』を手に取り、金星のスカウトシップ（円盤）の大きな写真をじっと見ていました。フランジ（外縁）のあたりを指でそっとなでると、その感触が伝わってくるようで、ひどく古い懐かしいものを見ている気持がします。

そのとき急に中に乗っている人の存在が感じられたのです！　以来、毎晩かならず写真を見ていろんな事を話しかけました。旅行が決まってからは、「もうすぐ行くから待っててね。こちらへわざわざ来て下さらなくてもいいから、私がそちらへ行ったとき、きっと会いましょうね」と、毎晩欠かさず写真にむかって語り続けました。

ですから私は旅行の間中、空を見続けたのです。自分にこんなに忍耐力があったのかと、びっくりするほど何時間も見続けました。そして結局彼らは

何度も何度もその姿を（UFOを）私に見せてくれたのです。

アメリカでの度重なるUFO目撃

ところが、この旅行に引き続いて起こった目撃は予想していなかっただけに、本当に驚いてしまいました。

八月十四日、テネシー州メンフィスの空港で無事主人と息子と合流した私は、それまでの旅行の事を一つも洩らさず全部話してくれという主人に、言葉では限りあるもどかしさを感じつつ、どんなに素晴らしかったかを話しました。連日UFOを目撃できたことを話すと、彼は自分のことのように喜んでくれました。そんな主人を見て、三人で見ることができたらどんなに素敵だろうと思ったものです。

ジョージア州アトランタの空港で待っていてくれたアンダーソン夫妻と涙、涙の再会を果たし、彼らの車で空港を出たのは午後十時をすぎていました。

暗い空には低い所に星が一個輝いていました。少しすると主人が「あ、動いた！」と言うので、見上げると、さっきは確かに静止していたはずの光が急速に後方へ去って行くのが見えました。それはまるで私たちが無事に出会ってアンダーソン家へむかうのを確認してから、「さようなら」と言って去って行くかのようでした。

その後、テネシー州ナッシュビルの友人宅へ寄り、そこからワシントン州のグランドビューという小さな町で牧場をやっているジョーンズ家へ向かうとき、シアトルから19人乗りの小型飛行機に乗りました。

その飛行機は大きいものとばかり思っていた私は一瞬ゴクリとつばをのみ込んだものです。最後部座席に三人並んで座ったのですが、操縦席とのあいだに扉はなく、前の操縦席がまる見えなのです。飛行機は予想どおり（？）よく揺れました。

レイニア山にさしかかったとき、主人が「なんか、おかしいぞ」と言うので、見ると、不自然にきちんと同じ形をした雲みたいな物が三つポッカリと浮かんでいるのです。すぐにそれが円盤だと感じた私は、「わあー、いる！」と言って見ていると、三つあった雲がスーッと二つになったのです。

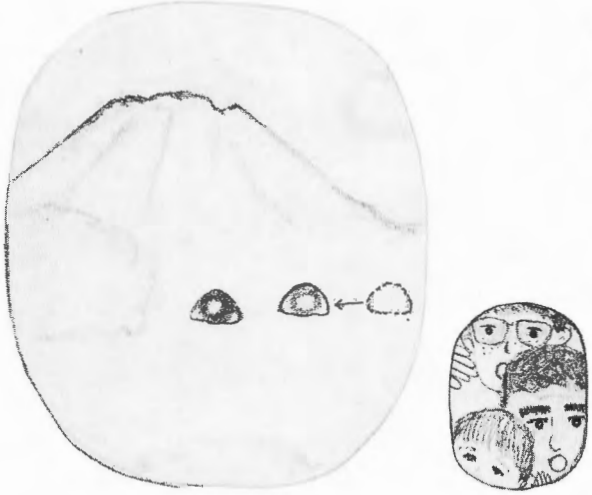
「うーん、これは――」と思っているまにそれは真ん中から次第に色が変わってきて、赤味を帯びてきます。特に左側のはほとんど赤くなっています。

金星のスカウトシップ（円盤）だと直感した私は双眼鏡を握りしめて必死で焦点を合わせようとしました。なにしろ十九人乗りですから窓は小さく、一人が顔を窓に近づけると全部ふさがってしまいます。

それを親子三人でよってたかってパニック状態でのぞき込んでいますし、ジェットコースターよりは少しましといった揺れ方で飛んでいるのですから、双眼鏡が役に立つはずもなく、そのうち大切な時間が過ぎて、レイニア山を過ぎると、もう見えなくなってしまいました。

このワシントン州にあるレイニア山は一九四七年にケネス・アーノルドが九個の空を飛ぶ物体を目撃して、「まるでコーヒー台皿をさかさにしたような物が飛んでいた」と報告して以来、フ

▲筆者が語りかけた金星のスカウトシップ（円盤）。1952年12月13日，ジョージ・アダムスキーがパロマー山で撮影。



◀筆者が描いた図

ライング・ソーサー（空飛ぶ台皿）といわれるようになった場所で、これが日本では「空飛ぶ円盤」と訳されたと聞いています。

私たちはすっかり興奮して、もうどんなに揺れても気になりませんでした。

牧場で馬に乗ったり農場の仕事を手伝ったりして楽しく過ごし、次はカリフォルニアへ行ってしばらく滞在して、秋田へ帰ってきたのは八月三十一日でした。

衝動で飛び出たら超小型円盤が――

それから二、三日後の夕方六時頃、お風呂に入った私は湯船につかったとたん、いてもたってもいられなくなり、そそくさとパジャマに着替えて、あっけにとられている主人たちのそばを通り、フラフラと外へ出て、いつのまにか空を見上げていました。

突然バリバリというものすごく大きな音がして、自衛隊のヘリコプターが屋根すれすれの低空飛行で頭上を通過して行きます。

「なんだ、ヘリコプターか。でもこういう場合にはUFOがよくあとをくっついて飛んで来るというわよね」

と、独り言を言いながら後方の空を見ると、小さな丸い光がものすごいスピードでこちらへやってきます。横にフラフラ揺れているので間違いないと思って玄関へかけ込み、

「来た、来た、来たわよー。早く早く」

と叫ぶと、二人がはじかれたように外へ飛び出してきて、「あーっ！」と言いながら三人でわが家の真上を飛んで行くUFOを見ていました。

そんなに遠くには感じませんが、小さく見えましたから、あれは超小型円盤だったのではないかと思います。それ以後、窓からちょくちょく見るようになりました。

今度は母船が垂直に出現

十月のある日、主人と近くの自然公園となっている山に出かけました。山の手前で前方がキラキラッと光ったので、「あの辺にUFOがいるかもしれないね」と話し合い、なんだかとても嬉しい気持で山あいに入って行きました。その日はナベッコ遠足だったのです。秋晴れの空は青く、気持のよい日でした。

助手席の私が大きな雲の下からチョコンと変な物が突き出ているのを見つけて目で追っていると、それはスーッと雲の下へ出てきました。

「母船だわ！」

「えーっ！」

運転している主人はあっちもこっちも見なくてはならず、必死ですが、もう両側は山にふさがれて何も見えなくなり、引き返そうと言いだしました。

私は「もし私たちに見せるために現れたのなら、このままっすぐに行けば、きっと真正面に見えるはずよ」と言って、そのまま少し行きますと、正面の山が切れて視界が開け、そこにくっきりと白いフォースフィールドに囲まれた葉巻型母船が垂直に浮かんでいるではありませんか！

雲は横に流れて行きますが、それは真下へ静かに移動し、やがて山陰に隠れて見えなくなりました。

主人も超小型UFOを発見

そして十月二十三日。この日はずいぶん前から目撃できる予感がありましたが、夜七時すぎに先に二階へ上がって行ったのは主人のほうでした。

テレビを見ていた私たちは、

「おーい、来てるぞー！」という彼の声に二階へかけ上がり、この頃同じパターンで繰り返し現れる、両端が赤と青に光る丸い小さな光体を見ていました。

超小型円盤と思われるその光体は、いつも太平山の方向に現れ、下からスーッと上昇してピタリと止まり、あとは何時間でも静止しているのです。

たまに右から左へ水平に移動し、そのあと直角に上昇したりすることもあります。この日は結局もう少し大きい光体が四度現れて、行ったり来たりしていました。

一緒に仕事をしているイトコの佐々木順一、孝子夫婦が、雲間に光る葉巻型母船から二個の光体が発進して行くのを森吉山のあたりで見たのは十一月に入ってからのことでした。彼らも最近たびたび目撃するようです。

そして今年（昭和六十三年）一月二十一日、私たちの家を訪れた主人の父は生まれて初めて『宇宙からの訪問者』を手に取った日の翌日午前三時、光る葉巻型の母船を窓のすぐ外に見たのです！ この件はあとで詳しくお話ししましょう。

幸せな生活のためにアダムスキー哲学を学ぶ

宇宙から来る彼らの乗り物を、いつ、どこで、だれが見ても少しも不思議なことではありませんし、この手の目撃例は枚挙にいとまがないでしょう。

でも私に起こるこういった出来事はすべてアダムスキーの『宇宙からの訪問者』がカギになっているように思います。

オーラ透視、過去世透視、未来予知といったものもまさにそうでした。それらは私の準備ができたとき、そのとき、そのときに合わせて役立つように少しずつ静かにやってきます。そして私はそれをゆっくりと受けとめて、その意味を知ることができるのです。

準備のできていないときに能力だけ目覚めて、偶然かいま見た過去世が、もし残忍で人々をおとしいれるような

自分だったら一体どうしたらよいのでしょうか。

自分も含めて身近な人に起こる苛酷な未来を知ってしまったときはどうなるのでしょうか。それらは決して人を幸せにしません。

アダムスキーの本を通じて宇宙哲学を学ぶことも、本来私たちにそなわっているはずの能力に目覚めることも、その先にあるのは笑顔に満たされた幸せな生活です。そのために学んでいるのです。そして感じたこと、気づいたことからは目をそらさず、まっすぐにそちらへ向かって歩いて行きたいと思うのです。

最初の一歩を踏み出すのに大きな勇気を必要とすることもあるでしょうが、私は一人ぼっちではありません。自分が一人ぼっちだと感ずるとき、私は取り残されたのではなく、一人だけ勝手な方向へ行ってしまい、みんなを置き去りにしているのです。自分一人だけの進歩は今の私にとって意味のないことです。

まず家庭を〝小さな金星〟に

あんなに読みたかったアダムスキーの本を初めて手にとったのに、ただ立ちつくしていたときの自分の姿をよく覚えています。あそこで本を手に入れていれば、私はしっかりとエゴを発達させて、ひたすら一人で突っ走り、孤独を感じて、戻ろうにも戻りきれない所まで行ってしまったかもしれません。

それを知らせてくれた宇宙の友人に感謝し、それを素直に受けとめたもう一人の私の存在を喜びます。

これからはオーソンがアダムスキーを通じて私たちに教えてくれた金星での生活を、この地球上でほんの少しでも実践し、金星に転生するまでこのままでも仕方がないだろうなんて考えず、家族が手をつないで、まずこの小さな家を私たちの〝小さな金星〟にしてゆきたいと思っています。久保田八郎氏が翻訳して下さった沢山の本の中に、そのお手本がぎっしりつまっていますし、GAPには一緒に手をたずさえてゆける兄弟姉妹が沢山集まっています。

今でも毎晩、円盤写真を通して想念を送っています。旅行から帰って以来のテーマは、

「私たちの準備ができたら迎えにきて下さいね。そして、いつか三人を円盤に乗せて下さいね」というもので、そのあと目をつぶり、私たち親子三人の笑顔を心のスクリーンに写して、それをスカウトシップの中に送り届けます。

私たちの髪に白いものが混じり、息子の背丈が私たちを超える頃には乗せてもらえるでしょうか。それはひとえに私たちにかかっています。

イメージ・パワーで飛行機が着陸

現在八歳になる息子の健は、幼稚園の頃から毎年長期の休み（春、夏、冬休み）は欠かさず主人の両親の所（茨城県）へ行き、おじいちゃん、おばあちゃんと三人ですごすことにしています。

そのたびに私がついて行って送り迎えをするのですが、今回は主人の父が「自分が秋田まで孫を送って行くから」と言うので、喜んでお願いしました。

そのとき、おじいちゃんには一日でも長く秋田の私たちの家に滞在して欲しいと強く思いましたので、二度ほどその事で電話をいれて、「おじいちゃんの好きな物を沢山作ってご馳走するから、すぐ帰るなんて言わないで、何日も秋田にいてね」と頼みました。

最初の予定では一月十八日に秋田市に着いて二十日に帰るつもりだったのですが、それを一日延ばしました。

父は園芸が趣味で、冬は温室の温度管理などで手が離せず、母にまかせて来ますので、あまり秋田市に長くいられないのです。

一月十八日、父の来秋の日、朝からひどい吹雪で飛行機が心配でしたが、主人と二人で「きっと吹雪がやんで、無事に降りられるよ」とずっと考えていました。

午後、空港へ迎えに行くと、飛行機の着陸は一時間ほど遅れるということで、その上、着陸できないかもしれないということでしたが、その間ずっと、飛行機が着陸してしまった光景や、父と健が笑いながら駆け寄って来る光景などを強くイメージしながら、「必ず安全に降りてくる」と唱え続けていました。

なかなか飛行機が来ないので、まわりにいる人たちはもうほとんど諦めかけていて、翌日の事をあれこれと相談したりする人たちさえいましたが、そのような悲観的想念に負けないように「負けない、負けない。頑張る、頑張る。パワーアップ！」と唱え続けて、さらに「あっ、飛行機が降りて、健とおじいちゃんが手を振って出てきた！」というイメージを、絶望的な吹雪が窓ガラス一面に吹きつけるロビーで、心の中で描き続けました。

すると、むこうのほうでどよめきが起こり、飛行機がゆっくりと滑走路を動いてくるのが見えたのです。

私は降りて来た息子にむかって、「お母さんはずーっとミラクルイメージとミラクルワードで頑張っていたのよ」と言うと、彼も「ボクだって飛行機の中で必ず着陸できると考えていたよ。ママとパパもそう考えていたかなと思っていたから」と言うのです。

あとで主人に聞くと彼も家で仕事をしながら、二人が安全に着陸することをイメージしながら頑張っていたそうで、あとで、みんなで「やったね！」と大喜びしました。

父が夜空に浮かぶ母船を目撃

父は健が昼間学校へ行っているあいだ、少し退屈そうな様子でしたが、そのうち居間に置いてあったUFO contactee誌を手に取ってパラパラとめくって見ているようでした。

今まで私たちは父にUFOや宇宙の事を話す機会がありませんでしたが、二十日は主人も仕事が休みでしたので、将来の事も含めて父と三人でいろいろな話をしました。

その折、初めてアダムスキーやUFO、宇宙の事などを一生懸命に話しました。アダムスキー撮影の金星のスカウトシップや母船の鮮明な写真に父は強く興味を示しました。父は写真も趣味の一つなのです。うちには六インチ反射望遠鏡がありますが、それにカメラを取り付ければ同じような写真が撮れるかもしれないと話しあいました。

その夜八時頃、二階の寝室にひきあげた父はUFO contactee誌を手にしていました。ベッドの中で読んだようです。少しして主人が『宇宙からの訪問者』を持って父の部屋をのぞき、そこへ置いてきました。父はそれもしばらく読んでいたようです。

次の日の朝、息子が学校へ出かけたあと、父と二人でコーヒーを飲みながら本を読んでいたとき、思いがけない事を父が話し出しました。

今朝三時頃、ふと目覚めてから窓のほうが気になるので、カーテンをあけて空を見ると、細長く光る葉巻型の母船が滞空していて、キラキラ光る窓と思われる丸い光が五つ並んでいるのを見たというのです。

空中のあの辺には夜間に何か明かりがつくのだろうかと聞かれましたが、隣の部屋の同じ空に面した窓から私は毎晩空を見ていますので、よく知っていますが、そんな物は全くありませんし、その日だけ突然、空中に明かりが横一列に五個もつくなんて考えられないことです。これは明らかに母船を目撃したとしか思えません。

初めてアダムスキーの本を読んだ日に母船を見るなんて、本当に素晴らしいことが起こったとしか言いようがありません。その物体はいつまでも動かないために、そのうちベッドへもどって眠ってしまったそうです。

その日の午後、茨城に帰る父は、途中まで読んだ『宇宙からの訪問者』がやめられなくなったと言って持って行きました。私は空港へ送りに行った帰りに、すぐ書店に寄って、もう一冊を注文しました。

息子を送って秋田に来ると言いだしたのは父のほうで、そのとき私はとにかく一日でも長く私たちと一緒にいて欲しいと思っていたのです。最初の予定どおりに二十日に帰っていれば、父とゆっくり話すチャンスもなく、母船を目撃することもなかったでしょう。私たちを包んでいてくれる大いなる宇宙の意識を感じないではいられない出来事でした。

私たちは一日一日を大切に、そして楽しく暮らすように心がけています。私たちに起こるすべての出来事は大切な学習であり、無駄なものは何一つないことを私たちは知っています。

空を見ると嬉しくなります。パブロフの犬みたいに、空を見ると笑ってしまいます。あの空に私たちの友人がいるのです。なんて素敵なことでしょう。

＊　＊　＊

筆者付記

以上の内容はセンセーショナルなものではありませんので、どれぐらいお役に立つものかと思います。これを書く前にしばらく空を見ていろいろ考え、平凡でも事実をありのままに、誇張を避けて書こうと思い、このような内容になりました。過去世やオーラ透視能力が現れる過程や、その結果見えたものについては省略しました。

四回程の過去世がわかってきましたが、まだまだそれらの持つ深い意味を知るには時間がかかると思います。

でも私が過去世でホピ・インディアンであったことと、アメリカ人の将校らしい時代があったことを考えれば、私がアメリカという国とアメリカ人に対して断ち切れないカルマを持っていることを知りました。オーラも気分のよいときには両手の先から鮮(あざや)かなエメラルドグリーンのオーラが沢山出てくるのが見えます。

しかし能力が出てきたからといってただ喜んでいるのではなく、それをどうやって自分たちの〝小さな金星〟を作るために生かすのが大切であるかをいつも思います。

私たちも一生懸命努力しますから、そのうちきっと私たちの〝小さな金星〟へいらして下さい。久保田先生は私たちのお父さんなのですから来てくれなくてはだめです。

そして、もっと時間がかかるかもしれませんが、転生する前に金星に住みたいと思っている人たちがみんなで集まって暮らせる場所ができたらと、まじめに考えています。

そこにはいつも笑顔が溢れていて、病気の心配もなく、みんなで持っているものをわかちあいます。先生もそばにいて、若い人たちにアダムスキーや宇宙哲学のことを沢山話して下さい。私たちみんなの想念がととのえばスペース・ブラザーズも遊びに来てくれるでしょう。私たちが真の進歩をとげてそういう日がくることを、あの人たちは待っていてくれるのだと思います。

私の家族は毎日こんなことを考え、話しあいながら暮らしています。

オーソンがパロマー・ガーデンズを訪れてアダムスキーと起居をともにしたように、彼らもきっと来るでしょう。

A Challenge to Spiritual Leaders By G. Adamski

精神的指導者に対する警告

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎 訳

宇宙から来る訪問者たち（訳注＝別な惑星からいわゆるUFOと呼ばれる宇宙船で地球へ来る人々）の真相を明らかにする件で、どこの国であろうが私はいかなる政府または軍部にも期待していない。政府や軍部がこの問題を明白にすれば両者とも大多数の民衆から疑問視されて、問題のすべてが現在と同様に議論の的になり続けるだろう。それは多数の人の心の中に敵意に満ちた解釈を植えつける傾向をもたらすかもしれない。現在でもそうなのだ。

小事ならぬこの大きな問題に対して一つだけ解答がある。というのはこのUFOの謎は現実に見られるように普遍的な諸原理と関連のある普遍的な面を帯びているからだ。生命のあらゆる面がこれに関連している。私たちは、人工の乗り物（UFO）に乗って宇宙空間を飛ぶという単なる劇的な考え方よりも、もっと多くの事に関心を持つべきだ。宇宙空間を飛ぶというのは全体像の中のごく小さな部分にすぎないのである。

ひとたびこの事が認識されるならば、これらの乗り物（UFO）の飛来は、今まで希望にすぎなかった人類の究極の運命に対して方向づけをすることになるのだ。そればかりでなく、この事は地球人の意識をもっと宇宙的な概念にまで広げることになる。そして人間を現在の制限された無知からはるか上位に脱却させるだろう。宇宙と人間との関係という点を人間に考えさせるならば、長い時代を通じてこの地球上の人間に悲痛をもたらしてきたつまらぬ不和などを人間は忘れるだろう。

別な惑星群から来るこれら宇宙船群（UFO）の実体は宇宙の領域に属するものである。したがって全人類にその真相を最もうまく伝えて、宇宙から来る訪問者たちとわれわれとの友好的な関係を確立できる者は、少なくともこの一つの目的で結合した世界の大宗教（複数）であるように思われるのだ。

こうした結合は当然のことながらさらに大きな結合をもたらすので、教義や信条の差を必要以上に議論する価値はもはやないように見えるだろう。私としては、このUFO現象のすべては長くつちかわれてきた夢や希望の達成として認められた上、それによって人間が自分と宇宙自体との関係を理解する点にまで到達していると信ずるものである。

教会は創造主と人間の関係の理解力を人間に与える責任を負ってきたのであるから、UFO問題の真実やそれを取り巻く真相を公言することは教会の義務であると思われる。そうなると教会は全民衆に敵対的な態度を起こさせずに畏敬の念を起こさせるだろう。

これが達成されれば教会は人間の理解ある状態を確立し、それによって確実なUFO飛来が行なわれるようになり、もっと進化したブラザーズ（友好的な異星人）が、われわれがまだほとんど知っていない宇宙の有益な知識を与えてくれるだろう。そうなるとスペース・ブラザーズは友人や教師としてわれわれの家庭や都市で歓迎されるだろう。

以上の可能性を具体化させるための顕著な論証をあらゆる大宗教の教義に見ることができる。たとえば最大の宗教の一つであるカトリックは、この世界で生まれた人体は彼らが天国と呼んでいる場所へ地球人の姿で運ばれることがある例を認めている。これはイエスの復活で述べられていることだが、もっと近頃は聖母マリアがこんなふうにして地球を離れたことを認めている。さらに〝燃える戦車（円盤）〟に乗って運ばれたエリヤもいたし、他にも似たような多くの例がある。

主の祈り自体も天国と呼ばれる世界または場所を認める言葉である。「天に行なわれるとおり、地にも行なわれますように」というのは、もし父の意志が天で行なわれているように地でも行なわれ得るならば、それは人間がこの世界から生きたままで空中のどこかの涅槃の世界へ運ばれることを認めている。同じ理由で、人間が生きた姿で別な惑星から地球へ来ることもできるという承認が成り立つのである。

主の祈りは天に行なわれるとおり、地にも行なわれますようにと言っているのだから、天空の人間すなわち男女が彼らのより幸せな住家（惑星）から地球へやってきて、彼らの世界でやってきたように地球でもわれわれ自身の天国を築くために啓発してくれなければ、どのようにしてこれが達成できるだろう。

いまあらゆる指が、人類に真実をもたらす責任ある源泉として、宗教の名称は何であろうと大宗教（複数）の方に向けられている。イエス自身は次のように言ったではないか。「父の家（宇宙）には多くの館（人間の住む惑星）がある」

もし大宗教がこの問題で連合しなければ、彼らは今後地球の人類に何が起ころうともその罪を背負う必要がある。われわれは最後の岐路に立っているのだ。二つの物事のうち一つが発生するかもしれない。これらの別な惑星からの〝訪問者〟の援助によってわれわれはかつてない最大唯一の恒久的な文明人になり続けるか――世界の人々が一体化するだろうから恒久的となる――、または指導的な科学者がみな知っているように、われわれが核騒動によって互いに完全に絶滅するかだ。

こうして地球へ来る別な惑星のブラザーズの実体に関する〝真相〟を承認する必要は一般人が考えるよりもはるかに重大である。世界中の人々が問題を理解するためには受容的な人々と広範囲な報道が必須条件である。これまで書かれてきたような予言が何らかの形で実現するだろう。すなわち天国がこの地球に確立されるか、それとも地球住民の完全な絶滅が必然的な結果となるかだ。選択は人間自身にかかっているが、最大の責任は世界中の精神的指導者の肩にかかっているのである。

A Flying Saucer and a Space Man Seen from Tokyo Tower

円盤の窓から手を振る〝異星人〟

●齋藤庄一〈日本GAP会員〉イラスト 高梨和明

中学生の頃、東京タワー展望台の双眼鏡で見た驚くべき光景は、目撃者の宇宙的カルマの発現と特殊な人生行路を意味していたのか。

東京タワーへ行きたくなる

忘れもしない十三年前の一つの出来事が新たなる自分の出発点でした。

私は当時十四歳、中学三年生でした。四月七日のことです。始業式が校庭で行なわれたので、ときどき空を見上げていると円盤が飛んでいるのがわかりました。小さい銀色の丸い円盤がフワフワと飛んでいました。

この日はまたテレビ東京の『ビックリッコ大集合！』の番組に出るため、その打ち合わせをする日でした。

始業式が終わって浜松町駅からバスで東京タワー隣の東京12チャンネルのスタジオにむかいました。

途中バスの外を見ていると、先程始業式のときに見たと思われる円盤が、バスの前後を行ったり来たりしているのを見つけました。

テレビ局でディレクターと打ち合わせを行ないましたが、今回は第一回目の放送で、テレビ局の屋上から東京湾方面にむかって円盤を呼ぶという企画でした。

そのときは円盤探知器を発明、発売した東映のプロデューサーや円盤研究家の方々、調布UFOサークルの人たちが出席しました。

結果は東京湾上空に円盤が出現し、テレビを通して各家庭に放送されました。

話を元に戻しますが、打ち合わせ終了後、玄関を出て空を見上げると、東京タワーが目の前にあります。

せっかく東京タワーの近くまで来たのだから登ったほうがよいという印象と、何かで体を引っぱってゆかれる感じがするままに、東京タワーへむかって行きました。胸躍る感じが高まり、頭が締めつけられて、軽い頭痛が伴いました。

実は高所恐怖症で高い場所へ行くのは苦手で、正直なところ心臓がドキドキしてきました。

アダムスキー型円盤が出現！

しかし内部の印象に素直に従って登って行きました。大展望台に着き、外を見ながらひと回りすると、この場所ではないと感じて、ふと前を見ると、特別展望台入口があります。これだと直感し、さらに上にある特別展望台へむかいました。

ふだんだったら、いくら登るといっても高さ百五十メートルあるといわれる大展望台までしか登らないのに、この日に限って、もう一段上の高さ二百五十メートルの所にある特別展望台まで登りました。

足がすくわれるみたいで、膝がガクガクしてきます。空は晴れていて、雲も少ない良い天気で、風は少しあり、大展望台が揺れていました。

時間は午後四時半頃です。着いたとき、「ここだ」という印象に従って、ひと回りしながら外を眺めていました。

私は空が好きで、いつも空を見上げては円盤を探していましたが、その日も例にもれず空を見上げていました。

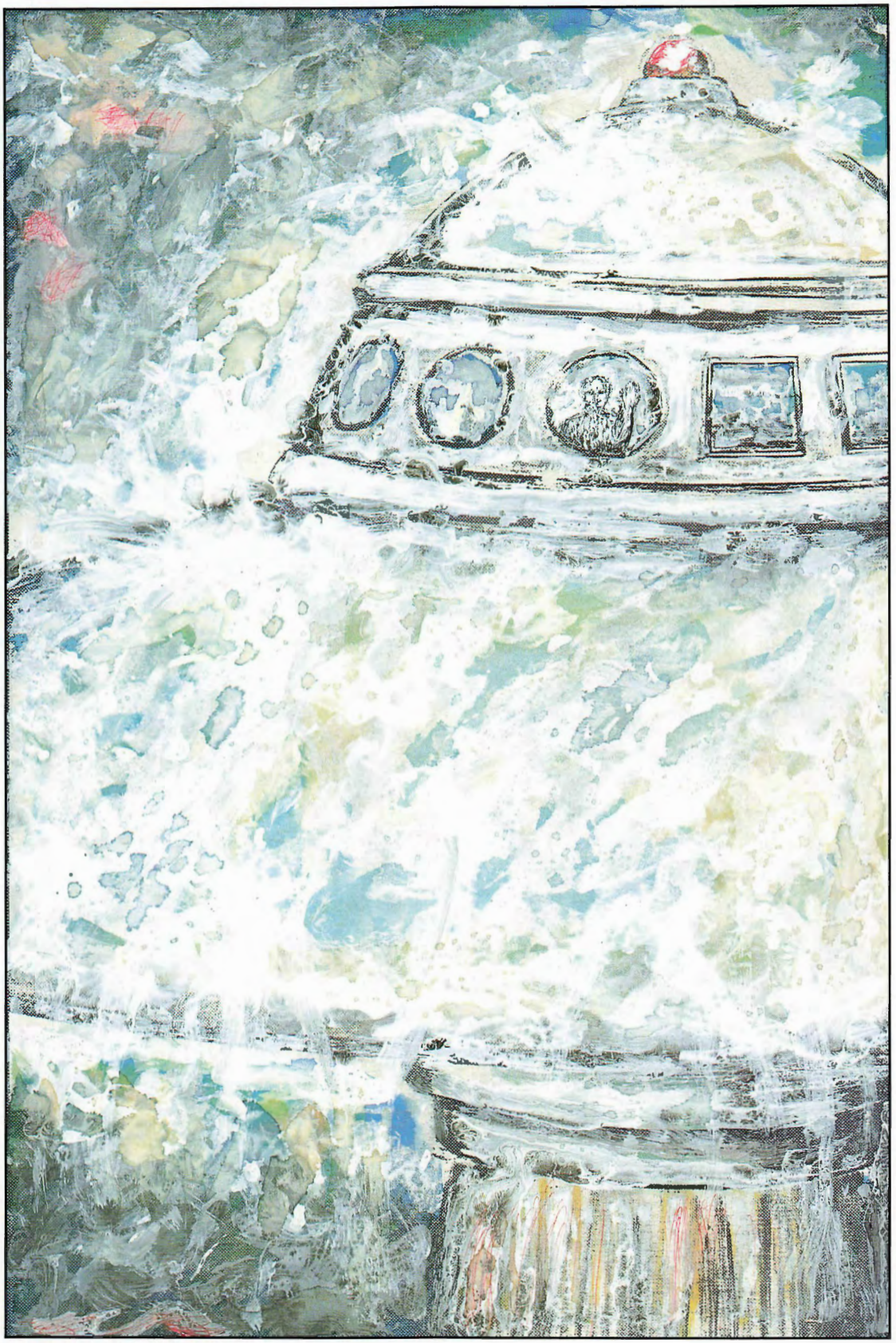
朝からずっと現れたり消えたりしている円盤が、ここではっきり見えるのではないかという、いくぶん期待するところもありました。

そのうち大展望台に据えつけてある大型の双眼鏡に気がつきました。それをのぞいたほうがよいという、どこかからの〝誘い〟みたいなものを感じて、早速十円硬貨二枚を入れて南南東の方向を見ました。

その方向には東京湾が開け、船の形をした船の科学館がありました。

その異様な形をした船の科学館に焦点を合わせて、その上空に双眼鏡をむけた途端、一機の円盤が目に映りました！ 映ったというより視野に入ってきたという感じです。

形はアダムスキー型、そう、あのアダムスキー氏の写した円盤そのものでした。目測すると見かけ上二センチぐらいの大きさです。全体が強く光ったり弱く光ったりして、点滅をくり返していました。このときほど驚いたことはありません。体全体に電気が走り抜



▲昭和50年4月7日に東京タワー展望台より円盤を目撃した当時の筆者(中学3年生)。

け、心にドーンという衝撃を受けました。

今までにこんなにはっきりと円盤を見たことはありませんでしたので、思わず声を出しそうになりました。友達がいれば大声を出して呼んだことでしょう。でも自分一人でしたので、ぐっと声を押し殺していました。

心臓がドキドキして、ドクンドクンと脈打っているのがわかります。そして心音だけが自分の内部でこだましていました。

顔がまっ青になり、血の気が引いていくのがわかりました。私はじっと我慢して、夢中になって円盤を見つめました。

激しい円盤の動き

円盤は全く自由に上下左右に動いていました。ジグザグに動くというか、木の葉が落ちるような動きを示しています。双眼鏡を動かすのが大変なくらいの動きで、東京湾の上空から羽田空港の方向いっぱいを動き回るという状態でした。

ずいぶん距離が遠く、おそらく東京タワーから五キロぐらい離れていて、上空一・五キロぐらいの所を飛んでいたのですが、そんなに離れているにもかかわらず、そんなにまで双眼鏡を動かさないと捉らえられないというのだから、動きの激しいことは大変なものです。

といっても双眼鏡を使わないと肉眼では捉らえられないので、一生懸命になって円盤の動きに合わせて双眼鏡を動かしていました。

円盤の頂上にある丸い物は赤く、窓のある所は青緑色に薄く光っています。そして半分上の方は半透明で、全体が白い霧状のモヤモヤしたもので包まれています。これがフォース・フィールドと呼ばれるものでしょう。円盤は柔らかい光を発していました。

中央下には何かジェット噴出しているような帯状のものが下方に出ていました。

円盤の窓から〝人間〟が合図

目を凝らして一心に双眼鏡で円盤を見続けていますと、アダムスキー型円盤に見られるような位置にちゃんと窓のあるのも確認できました。

しかしその窓の形がアダムスキー氏の言うのとは違っているのにびっくりしました。こちらから見て左の方に並んでいる窓は丸い形でしたが、右側に並んでいる窓は四角でした。四角い窓とはいったい何でしょう。

さらに見続けると、丸い窓の所にどうも〝人〟がいるらしいことに気づきました。その人は窓の所に立っていましたが、何かをしているというようなこともありません。

そのうち、その人は左手を上げ、掌をこちらにむけて、顔の頬の位置ぐらいの所に置き、どうやら私に合図をしている様子でした。

けれども、こちらからそれに応えて宇宙人のしているように手を上げることはしませんでした。双眼鏡で見ているだけで精一杯だったからです。

円盤に乗っている人は何か話しかけているようでしたが、何を話しかけているのか、さっぱりわかりません。

その当時の経験では、宇宙人らしい人を見たりすると、頭が重くなったり、左右が締めつけられたり、後頭部が痛くなったりするのですが、このときはそのような状態にならなかったのが不思議でした。むしろ安らぎ、喜び、爽快感を覚えました。

ところが残念なことに、その〝人〟が男性か女性かはわかりません。もちろん表情などわかるはずもありません。大型双眼鏡を使っているとはいえ、あまりに遠かったので、はっきりとは見えなかったのです。

とりあえず私は持っていたカメラを取り出し(ミノルタハイマチックF、ニッコールレンズ38㎜)、初めは左の接眼レンズにカメラのレンズをくっつけてシャッターを切りました。

カメラは距離を∞にし、自動露出な

のでシャッタースピードの心配はいりません。双眼鏡の左側の接眼レンズの所で三回、右側の接眼レンズの所で二回、それぞれシャッターを押しましたが、結局、宇宙人の乗っていた円盤は撮れませんでした。

見ていた時間を推測してみますと、わずか数十秒ぐらいだったようですが、あまりにも驚いた事件なので、そのときは数十分にも感じられました。

双眼鏡から目を離すと、ほっと一息つきました。エレベーターで下り、帰り始めると、事の重大さに自分の体がじわっと引き締まる思いがしました。

頭の中に信号音(?)が響く

ところでこの円盤を見るにあたって朝から感じるところがありました。学校の始業式のときから頭の中に信号音らしいものが伝わっていたのです。プッ、プッ、プッという音が一定間隔で聞こえてきました。その音は耳に聞こえるというのではなく、頭の中で鳴っている感じがしていましたので、これは円盤からの信号であり、テレパシーなのかもしれないと思いました。というのもこういうときはきまって円盤が出ていましたから「今日は出るぞ！」と予測はしていました。

帰り道、電車内で有楽町に着いたとき、頭が急に痛くなり、座り込むほどでした。直感的に「だれかがテレパシーを送っているのかなあ」と思い、あたりを見回すと、宇宙人らしい人がいるのに気づきました。

その方は男性でしたが、日本人風で背は高く、ほっそりしていて、顔は色白で、皮膚はツルッとしてとても艶があり、髪は短く切りそろえてありました。

パリッとしたスーツを着て立っていましたが、普通の人と違っている点は、目のところから頭にかけてぼんやりとモヤみたいなものがかかっていたことです。その宇宙人らしい方は、何かをしているという様子ではありませんでした。

その場所から離れると頭痛が徐々に薄れていきました。宇宙人らしい方は私に何かを伝えていたのかもしれませんが、その内容については全くわかりません。東京タワーで見た円盤に乗っていた〝人〟と関連があるかどうかもわかりません。

体型は地球人と同じ

この日に目撃した円盤に乗っていた宇宙人についての推測ですが、私の考えを述べてみたいと思います。

円盤から姿を見せてくれた宇宙人は地球人と同じ姿形をしていました。円盤の大きさからすると充分に地球人が入れるぐらいですから、身長は百七十ないし百八十センチぐらいあったと思います。

顔ははっきり見えませんでしたが、地球人と違いはないようです。アダムスキー氏が会見した〝オーソン氏〟のように、高い波動を持ち、精神的にも素晴らしい方ではなかったかと感じました。

宇宙人はどうして私にはっきりと円盤を見せてくれたのだろうか。この事件をきっかけに〝宇宙と自分との一体感〟を感じるようになりました。

テレパシーで空中に呼びかける

私がまだ母の背中におんぶされていた頃は、目黒の白金台町に住んでいました。家のまわりにはお寺や自然教育園などがあり、とても落ち着いた場所です。母が外に出て私をあやしていたとき、母の目の前をオレンジ色のパンのような物がゆっくりと横切って行ったそうです。

その後十三歳ぐらいまでは円盤を目撃した記憶はありません。

私は天体観測が好きで、あるとき夜空の星だと思っていた物が急に移動して驚いたことがありました。

十四歳の頃、西日暮里駅の上にある〝すわ台〟という所で、夜間、空にむかってテレパシーによる呼びかけを行なったものです。最初はなかなか円盤が現れませんでしたが、必ず来ると信じて真剣に呼び続けました。一時間で

◀東京タワー。上部円形の特別展望台から筆者が円盤を見た。（撮影　久保田八郎）

も二時間でも来るまで諦めずに続けました。

「宇宙の星の兄弟の皆様、私の呼びかけが届きましたら、はっきりとわかるようにその姿をあらわして下さい。お願いします」

と、宇宙に思いを馳せ、夢を求めて力強く呼びかけました。

そして円盤が目の前に現れたときは本当に心の底からジワジワと感動が湧いてきました。「こんな私でも円盤を見ることができるのだ」と、私の存在を確認してくれた宇宙人がいた喜びに包まれ、決して独りではないと強く感じました。

円盤を見る回数を重ねていくと、円盤を見れるときのフィーリングを感じ始めました。最初は胸騒ぎや、ひらめきを感じたり、頭の中に「プッ」という信号音や「ピーッ」という長い音、高周波音のようなものが入ってきました。そのような状態になると決まって円盤が現れるのです。

アダムスキーの著書に出会い、日本GAPを知る

当時は円盤関係の本は限られていて、今のように多くの書店に並んではいませんでした。私はお茶の水の書店に本を探しに出かけました。朝から休まず探し続けましたが、なかなか見つからず、最後に入った書店でとうとう数冊の本にめぐり合いました。

その本こそアダムスキー氏の『空飛ぶ円盤同乗記』と『空飛ぶ円盤実見記』、それに当時久保田先生が編集発行されていたUFO専門誌『コズモ』（後に『UFOと宇宙』に改題）で、それらを見たとき、「この本だ！」というひらめきを感じ、迷わず数冊を買って帰ったのです。

家に帰って読めば読むほどに引きつけられ、内部の意識が高まってゆくのを実感しました。そして本の訳者と『コズモ』誌の編集長の名前が同じなのに気づきました。

『コズモ』誌はUFOの雑誌としては当時唯一の存在であり、国内外の記事が豊富で、特に目撃報告や投稿欄に関心がゆきました。

そうしているうちに、ぜひコズモ出版社へ行ってみたくなり、地図で場所を確認し、電話を入れて出版社へ行ったのです。そして『コズモ』のバックナンバーを買い、編集者の方に私の東京タワー目撃以前の体験を話しました。

そのとき、かたわらで黙々と仕事をされていた方が久保田先生（当時社長）であることを編集者の方にお聞きして知りました。先生をお見かけした途端、初めてにもかかわらず以前にどこかでお会いしたような印象を受けたものです。

その後何回もコズモ出版社へ行き、編集者の方に話を聞いていただき、その方から日本GAPの存在を知り、会長が久保田先生であることをお聞きしました（編注＝コズモ出版社は後にユニバース出版社と改名、これより数年後に編者は退社してGAP活動に専念、さらに数年後、同出版社は解散した）。

私はGAPで勉強させていただきたいと思い、入会できないかどうか聞いてみました。当時は高校生以上でないと入会できないと聞き、残念に思いましたが、どうしても諦めきれず、再度編集者の方を通じて久保田先生に無理を承知でお願いしていただいた結果、ようやく入会を認めていただきました。そのときは感無量でして、会員番号は一〇四五番でした。

また私の東京タワーでの目撃報告を『UFOと宇宙』誌13号に六頁に渡って取り上げていただきました。

またテレビの『ビックリッ子大集合』で円盤を呼び、それが放送され、一九七五年四月十三日付の毎日新聞に載りました。

▲最近の筆者

常に円盤がつきまとう

一時期、私の身辺には必ず円盤がいたことがありました。それはドッジボールぐらいの大きさで、記録用の円盤ですが、どこに行くにもついて来るのです。しかも不思議なことに私にしか見えないのです。昼間は白銀色を黒くしたような色で、夜は薄い白色系の色で光っていました。

この円盤はおもに宇宙人のテレパシーなどで遠隔操作されていて、観察される本人の思考や周囲の状況を記録したり伝えたりできるようです。その一例として情報などを宇宙人の乗ってい

る円盤のスクリーンに瞬時にデータを表示することもできるようです。

またビー玉ぐらいの大きさの円盤が私の部屋の中に入って来て、目のまわりを飛んだり、夜寝るときに布団のまわりをホタルみたいに飛び回ったりしたこともありました。

円盤の写真も多く撮りました。たとえば羽田空港でジャンボジェット機の上に停止している円盤や、友達の頭上に停止中のモチ型の円盤の連続写真を三枚撮ってみたところ、位置が少しずつずれていました。

ただ残念なことに、そのすべて（ネガと元の写真）が私の手元から消滅してしまったのです。考えてみると、私の意識の変換か、必要がなくなったので、そのようになったのではないかと思います。

十二年後にまた東京タワーからUFOを目撃

東京タワーで円盤を目撃してから十二年後に、友達と去年の六月二十八日の午後七時半過ぎに東京タワーに登りました。

大展望台に行き、歩きながら夜景を眺めていると、強烈に光る発光体が二人にむかって接近して来ました。私はヘリコプターのライトかと思っていたところ、上下運動を繰り返しながら左へ移動していました。

と思うと、また接近してきました。高度を徐々に下げてビルの屋上付近に移動しています。私はビルの近くにヘリポートがあり、着陸するのかと思いましたが、どこにもヘリポートはありません。

するとその物体は道路の上を飛び、ビルの谷間でパッと消えてしまいました。二人でそれを見ながら、「おかしな動きをするね」と話し合っていました。ヘリコプターのライトにしては明るすぎるし、動きも一定ではありませんでした。

UFOを見るための心構え

円盤を見るために大切なことは、円盤を純粋に見たいという気持と和合心を持ち、良い感情を使って真剣な態度で宇宙に自分を投げかけることだと実感します。円盤を呼ぼうとしてテレパシーで呼びかけを行なうと、宇宙人にはすぐわかるようです。ただし円盤を見れるのは先の問題です。

まずは自分の熱意と気持を継続させることです。その間、宇宙人はあなたのすべてを見ています。それから初めて姿を見せるのです。特別な人だけに円盤が現れるのではなく、また見えるのでもありません。だれにでも見えるし、チャンスも平等にあるのです。自分自身を信じること、つまり自信を持つことです。

十数年前、初めて円盤を呼んで目撃した喜びと感動は今でも鮮明に覚えていますし、そのときの気持は今でも変わりありません。一人の人間が空に呼びかけると宇宙人はそれに応えてくれるのです。目に見えないパイプがかかっているかのようにして、要は宇宙人との心の交流をはかることだと思います。大切なのは心です。

プラスの想念で精一杯生きる

私は日常生活が基本であり、この中に学び取ることは無限にあると思います。一日一日、楽しいプラスの想念と感情で精一杯生きること。瞬間瞬間の積み重ねです。より好みせず、まずすべてを自分の中に受け入れて、自分にとって必要でない物を落としてゆけば、すべては生かされると思います。

私たちのまわりには様々な入口が用意されています。その内の一つの扉を叩いてあけたのが〝宇宙〟という扉だったのです。自分が求めることのできる一つの入口にすぎません。求めるべき物は自分のまわりに、そして自分自身にあるのです。

こころざしたときに原点に戻り、足元をよく見て一歩一歩確実に歩むことと、「初心忘れるべからず」とあるように、こころざしたときの気持を大切にすることです。

何かの目標を持ったらそれにむかって自分で具体的に計画を立て、目標達成までの過程を明確に持つことが大切だと思います。結果は過程の結果なのですから。

それにはまず自分が目標を達成して喜んでいるときのイメージを強烈に心の中に描き、それを持続させることが必要です。

そして常に自分の意識を確認して、いつもプラスの想念で「これでよいのか」と自分に問いかけて物事に取り組まなければならないと思います。

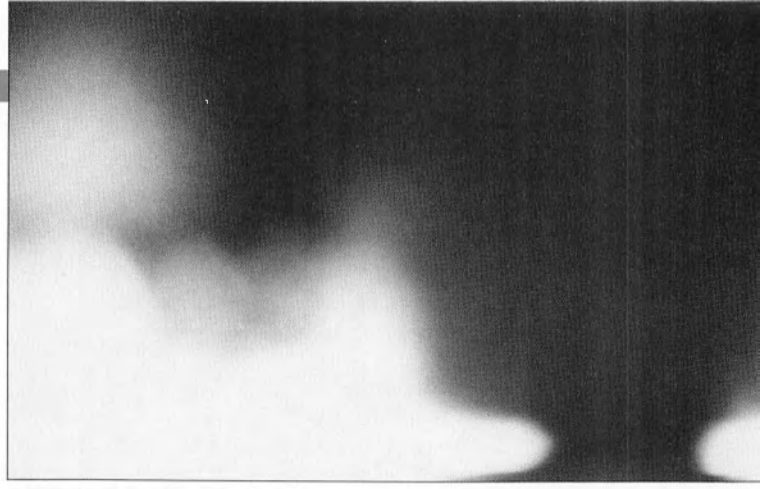
超能力の行使にはスイッチが必要

私も活動を開始した頃、テレパシー能力が目覚めてきました。自然に出始めたので何がどうなっているのかわからない状態でした。

たとえばスプーン曲げや、念写、念力などが出てきました。テレパシー的な印象も数多く受けました。しかし最初は能力のコントロールができないので、本人の意志とは関係なく出てしまうのです。

電車に乗ったとき、まわりにいる人達のオーラが見えたり、人の考えがわかったり、いろいろな想念を外部から受けたりして、自分がおかしくなったのではないかと真剣に考えたこともありました。

それから徐々にコントロールができるようになり、必要なときに必要なだけ使えるようになりました。能力のス



▲筆者が中学生の頃に行なった念写

イッチみたいなものをオンとオフにすることによって能力のコントロールが可能になるのだということがわかってきたのです。

私は意識して能力開発を行なったりはしませんでしたが、振り返ってみると、今の能力開発のテクニックを知らないあいだに実践していたようです。ただ一日一日を大切にして精一杯生きてゆきたいと思います。

目先の超能力開発だけではダメ

能力開発だけであれば短期間でも効果を生むことは可能です。問題なのは精神の向上も同時に自覚することだと思います。

たとえば核エネルギーを子供に与えても、どういう物でどう使えばよいかがわからねば危険きわまりない物になります。一歩間違えれば自分の命にもかかわることになり得るでしょう。

能力開発だけに目を奪われ、とらわれている人が少なくないように感じられます。忘れていけないことは、意識の開発と向上にも目を向けてバランスをとりながら能力を開発することです。

不思議な夢を見る

昭和六十年十二月二十七日の夜私は印象的な夢を見ました。私は円盤の中（たぶん母船ではないかと思います）にある一段高い場所の玉座のような風格のあるフカフカした椅子に座っているのです。

そこは柱が一本もない奥行きのある長い部屋で、照明は弱く、天井は真珠のように輝いています。そして私にスポットライトが上方から一本当たっていました。そして前方では扉が開き、光が見えました。

すると部屋全体が明るくなり、左右に宇宙人がズラーッと整列しているのに気づいた途端、扉の方から一人の宇宙人がお付きの人をつれて滑るように歩いて来るのです。

そして私の目の前で止まり、お付きの人が冠（かんむり）を渡すと、宇宙人が私の頭にかぶせてくれたのです。その冠は三つの輪が重なり合った形で光っていました。ゆるめの冠ですが、かぶせられた途端、キュッと締まりました。この様子はあたかも現実のように感じられ、目覚めたときに感覚がはっきりと残っていました。

このとき私は、昭和六十年を境に、宇宙人側の地球に対するスペース・プログラムの内容が変わったと感じました。これは地球にとっての一つの良い転換期ではないかと思います。

「これからは自分の力でやりなさい。あなたがたの星なのだから、あなたがたの力でやりなさい。あなたがたが理解できる範囲の問題については、あなたがたの責任で乗り越えてゆかなくてはならないのです」と言っているように感じました。

宇宙人の仲間入りができる可能性が、地球の人たちの中に精神的にも物理的にも見えてきたということです。

これからは地球もどんどんきびしい状態を迎えると思います。これは宇宙人に見放されたのではなく、深い〝宇宙愛〟は続くと感じます。これからは私たち自身の本当の力が問われる時代だと思うのです。

原点に返って考えよう

最後に、私たちは宇宙人を救世主や神のような存在に祭り上げることは注意する必要があると思います。宇宙人も人間、私たちも人間です。宇宙人を頼ってもすぐには助けてくれないし、答を求めてもズバリ答えてもくれません。ただヒントを与えてくれるだけです。まずは自分でできる限り考え、今何ができるかを考え抜いてから、それから実行に移すことです。

宇宙人問題については何事も現実逃避しないで、これを自分や人類にとってプラスの問題にすることです。自分自身を変えるのは自分だけです。宇宙人も昔は私たちと同じ道を歩んできたと思います。

今まで私たちに示してくれた姿勢のなかで、何を学び得て実践してゆかなくてはならないかを、今一度原点に返って考えてみる必要があるのではないでしょうか。

答は宇宙人がすでに示してくれていると感じます。この宇宙と地球と私たちの未来をみずからの手で築いてゆかなくてはならないと痛感します。自分の可能性を信じ、生きることの素晴らしさと美しい夢を持つ気持を忘れないことが大切だと思います。

A Large Group of UFOs Flying over the Skies of Nagano-Pref.

長野県に出現したUFOの大群

●博田文喜〈日本GAP長野支部代表〉

飛行機、鳥、昆虫、羽毛、風船などのどれでもない物体が大挙して出現し、ビデオにも撮影されたのに、目撃者は数名だけという不思議な事件。

長野県下で驚異的UFO目撃事件が発生したことを一月中旬、上田市在住の熱心なGAP会員・宮下しずえさんから届いた便りで知った。

それによるとテレビ朝日のニュースシャトルという番組で、長野県のある場所で（この時点では場所がどこかはわからなかった）UFOを目撃し、それをビデオカメラで撮影した人がおり、UFO特有の動きを示しているのが画面に写っているという。これは昨年（昭和六十二年）十一月二十二日（日曜）の出来事である。ちょうどこの日は長野市で日本GAP長野支部の第二回支部大会が開催されていた。

早速地元テレビ局に電話で照会したところ、この事件のビデオテープがそこへ持ち込まれている事実が判明。テレビ局を通じて撮影者へのインタビューを申し込んだら、折返し快くOKの返事を頂き、直接本人にお会いして一部始終を聞くことができた。

UFOの大群が出現して驚く

この方は長野県の南部、飯田市に近い下伊那郡喬木村在住の東原さん（三十一歳・公務員）である。この村に氏の実家があり、その前庭で数名の人とともに目撃した。

地形は典型的河岸段丘で、近くを天竜川が流れる高台に位置する。家の裏はすぐ山となるが、視界はすこぶるよい。

当日昼頃、奥さんから昼食に呼ばれた東原さんが母屋へ行こうとして離れの別棟を出たとき、ふと空を見たことからこの事件は始まった。同時目撃者は奥さん、お母さん、親類の男性・宮下さん、電話でかけつけた友人の中塚さんの四人。全部で五名である。

以下は筆者と東原さんとの一問一答。

——きっかけについては？

「離れにいたんですが、昼食だという声がしたので外に出たんです。そしてふと空を見ると、変な白い点が三つ飛んでいるというか、動いているのを見つけたんです」

——空を見上げたいと思ったんですか。

「いや、そうじゃないですね。全く偶然に見上げたら、三角形をかたちづくるような白い点が三個見えたんです。それで、これは変だな、UFOじゃないかと思って、慌ててビデオカメラを持ち出して撮ったんですよ。最初は双眼鏡を探したんですが、見つかりませんでした」

——その点状の物はどんな動きをしていましたか。

「ジェット機の編隊のように等間隔で飛ぶのではなく、なにか離れたり、くっついたりしているように見えたんです」

——物体の数はどれぐらいでしたか。

「それがどんどん来るんですよ。北の方からどんどん出て来て、まっすぐ南へ来るんですが、ちょうど真上ぐらいまで来ると、急に向きを東に変えて飛んで行くんです。ほとんど同じ飛び方で、コースも同じなんです。

終わりのほうになると、ちょっと違ってきましたね。真上ぐらいまで来ると突然光りだすんです。それがまっすぐ降りて来るように見えましたね。

テレビで放映したのは同じ種類の物体なんですが、まったく逆の北の方向へ一機だけ飛んで行ったんです」

ビデオ画面を見ると、どんどん降下を続ける光点が見える。そしてその光点が家の瓦屋根に隠れそうになる所で、東原さんが思わず「見えなくなる！」と言った瞬間、画面右上にスーッと移動し、二、三度ジグザグ飛行した後、尾根の峰伝いに飛んでから見えなくなってしまう。

右の場面は約二十分間撮影されたビデオの最後の方であるが、それまではあまりに多くのUFOが次々と飛んで来るので、最初は確かにUFOだと思った家族や友人などが「本当にUFOだろうか」と疑問を起こし始めたことへのUFO側の回答のようにも思える。

ここで東原さんと一緒に目撃した奥さんとお母さんに登場を願うことにする。まず奥さん。

「UFOはすぐ見えなくなるものと思っていましたので、初めて見たため、慌てて家の時計を見たところ、午後十二時三十分でした。

ところが次から次に現れるし、いくつも見られるのに驚きました。空にチカチカする物体が一杯見えました。

飛び方は、遠くに見えるときは、くっついたり離れたりしながら飛んでいるようでした。

色はほとんど白っぽいもので、なかにブルーのものとオレンジ色のものが見えました。あまりに多かったので、

長野県下伊那郡喬木村で撮影されたUFO

◀左の写真は約二十分間のビデオ画面中に出現するUFOを左上から断続的に撮ったもの。飛行機のように見えるのもあるが、主翼がなくて無音であるという目撃者たちの声が同時録音されている。

びっくりして数をかぞえる余裕はありませんでした。

次にお母さんの話。

「今、ユーフォーが出たというもんで、そーんな馬鹿な、と言って外に飛び出して見たら、本当な、見えましたの。いくつもな。かなり高い所だったようで。ちょっと目を離すと見失ってしまいますのな。それが、あっちにもいる、こっちにも出たというのでな、それがスーッと来て、ポッと変わりますのな、コースが。あー、不思議なーと思ってな」

▲自宅前に立つ東原さん。写真中に描き込まれた白線の矢印の方向にほとんどの小型UFOが飛んだ。母船と思われる物体はこの逆方向へ飛行した(撮影　筆者)。

ここで東原氏の話に戻ることにしよう。氏は考えながら話すのではなく、確信を持って語るのだが、それは次のとおりである。

「実はこれら多数のUFO以外にもう一種類のUFOを見ました。出現したときは、ちょうどスペースシャトルのように見えたのですが、通過してゆくあいだに形が変わるのです。

当日は非常に空が澄んでいて無風でした。物体の大きさはこの辺(対談を行なった松本市)でYS11機が松本空港から飛びたって行くときぐらいの大きさに見えましたが、音はしませんでした。そんなに大きく見えながら主翼らしいものが見えないんです。この物体については約三時間のあいだに五機を確認しました。

コースは先程の小型円盤の飛び去った東側から現れ、西の山に向かいました。この物体の飛んだコースはふだん絶対に飛行機の飛ぶコースではありません。しかも同じコースを短時間に次々と五機も飛ぶというのは異常です。民間機では考えられないことです。軍用機ならば飛ぶかもしれませんが、しかしこれはテレビ局で行なった調査でも、その場所を飛んだ民間、軍用機はなかったことがわかっています。もちろん運輸省、防衛庁等に照会してのことです」

不思議なことに、テレビ番組ではトップで扱い、シリーズで放映するといって二回目を放映後、次回はレーダー等裏付け調査報告の予定と言った後、現在まで放映されずじまいとなっている。またこのビデオテープはアメリカの放送局NBCから引き合いがあり、テレビ朝日を通じて引き渡してあるという。

いずれにしても白昼の出来事であり、ビデオに撮られていながら、あまり大きな話題にならなかったのは奇妙なことである。

「これがUFOだったら何かついに来たという感じだったんですが、ただその後は全然出てこないんで、ちょっと不思議なんです。当然、常にひんぱんに見えてもおかしくないんじゃないかと思ったんですが、それにあれだけの数ですから、当然沢山の人が見ているはずだし、どこかに着陸しても不思議はないですね。どうして降りてこないんでしょうね」

それ以来、東原氏や目撃した人たちは空を見上げる癖がついたようである。

撮影機種はビクタービデオムービーCRC-7、VHS-C、録画時間は約二十分。フィルターなし。ズーム六倍、オートフォーカス。

Frequent UFO Sightings and ESP Experiences

頻繁なUFO目撃と超能力体験

佐々木八郎〈日本GAP会員〉

たびかさなるUFO目撃と超能力による不思議な現象は〝宇宙的カルマ〟を意味するのか。アダムスキー哲学に生きる筆者が〝考えさせる〟秘話の一部を公開。

日本GAPに入会してから病気が治る

私が日本GAPを知ったのは、昭和五十四年の十月頃でした。ユニバース出版社から出ていた『UFOと宇宙』という久保田先生が出されていた雑誌が当時ありましたが、その中に日本GAPのことが書いてありました。たしか宇宙哲学や宇宙の法則について書いてあったと思います。私はそれにひかれてGAPに入会しました。

GAPを知る二年ぐらい前から急にUFOや宇宙について関心が強くなってゆきました。今から考えると、とても不思議な感じがします。それまであまり関心がなかったからです。もちろんUFOや宇宙人は存在すると思っていました。でも熱狂的な関心を持つようになった理由は私にもよくわかりません。でもアダムスキー哲学を読めば読むほど私にはぴったりでした。

さて、GAPに入ってからいくつかの変化がありました。その一つは偏頭痛が全く起こらなくなったことです。それまでは一週間に二、三回はひどい偏頭痛が起こっていたのです。それが完全に治ってしまいました。

またいつも肩がこっていたのですが、その肩こりもなくなりました。それから、上は八十ぐらいで下が六十ぐらいの低血圧も治りました。

こういう変化は当時『ニューズレター』といっていたGAP機関誌（後に『UFO contactee』と改題）やアダムスキーの本を読んだり東京月例会で久保田先生のお話を聞いたりした結果です。

最も大きな変化は私自身の心が騒がなくなったことです。以前は他人とよく言い争ったり怒ったり感情的になったりしたものですが、そういうことはほとんどなくなりました。

テレパシックなフィーリングを起こして初めてUFOを見る

UFOの目撃のことですが、そのなかでも特に印象的な体験についてお話ししたいと思います。

昭和五十五年七月頃だったでしょうか、私は当時新小岩（都内葛飾区）のアパートに住んでいました。ある夜、アダムスキーの『宇宙からの訪問者』を読んでいました。すると、なんとなく――としか言いようがないのですが――二階の玄関先へ出てみたくなったのです。そして外へ出てから南西の方角の空を見ましたら突然二つの光体が現れてこちらへむかって飛んできました。時刻は午後九時五十五分頃です。その二つの光体は並行に飛び、アパートの真上を通りすぎて、北東の空へ消えて行きました。

その光は普通の光と違って、全くまぶしくなく、リング状に発光しているオレンジ色でした。

二機は並行に飛んでいながら、交互にスピードを速くしたり遅くしたりして追いかけっこをしているようでした。そのとき私はスペース・ピープルがそのUFOに乗っていると思い、私のために現れてくれたのだなと感じました。そのUFOに乗っているスペース・ピープルの楽しい気分、スペース・プログラムの目的などが伝わってきました。

部屋の中で『宇宙からの訪問者』を読んでいたとき、この本の中に出てくるスペース・ピープルのように地球の人間も進化発達してゆけるはずだと考えていたのです。

初めてのUFO目撃は私の心を変化させました。このときの自分の心の変化はなかなかわからなくて、あとになって少しずつわかってきたのです。

二つの光体が消えてから戸をあけて家に入ろうとしたときに、また別なフィーリングが起こってきました。それは約一時間後にまた光体を見ることができるというフィーリングです。それは確信に近いものでしたが、なぜそのように感じたのか、そのときはわかり

ませんでした。

それから五十五分たって十時五十分頃、ふたたび二つの光体が北東の空に現れて、今度は消えた方向から出たのです。南の空を通って南西の空へ飛んで行きました。

このときもやはり二つの光体が追いかけっこをしていました。さっきのテレパシーで感じたとおりだなと思いました。そして同じスペース・ピープルがそのUFOに乗っているんだなと感じたわけです。

その目撃でUFOの実在、スペース・ピープルの存在、テレパシー現象などが感覚的に実証されたというふうに考えていました。

この初めてのUFOの目撃のときに超小型のUFOも飛んでいたと思います。というのはアパート二階の玄関の低い屋根をかすめるようにして、直径二十センチから三十センチぐらいの丸くて白い物が飛んで行ったからです。

（編注＝アダムスキーによれば別な惑星から来る大母船は数名乗りの円盤のほかに地上探査用の超小型円盤を発射して、地球人の想念その他の状況を調査し回収する高度な科学技術を持っているという）

▲昭和58年8月，筆者が京都の賀茂川を撮影したとき，左方の建物の上空に黒い物体が写っていた。撮影時には気づかなかった。

不思議な人物が話しかけてきた

話は変わりますが、同じ年の同じ月に不思議な人物が現れました。

ある日の夕方、薄暗くなってからアパートの横の路地に立ってぼんやりと星や空を眺めていました。こういうことが好きだったのです。

すると私のうしろから人が来ました。その人がいつ私のうしろへ来たのかわかりません。その人は背中に登山用のリュックサックのような物を背負っていました。全然知らない人です。そして私にむかって、

「今晩は。一緒にビールか何かを飲んでお話ししませんか」

とかなんとか言って丁寧に話しかけてきたのです。それで私は黙っていました。どうしてそんなことを言うのかわからないからです。そのとき心の中で、こういうときにテレパシーを応用したり相手のオーラが見えたりすれば相手の正体が見抜けるのになあと考えていました。

私が黙っていたせいか、その人は、

「さようなら、じゃまた」と言って離れて行きました。

同じ年の十二月頃のことです。東京駅から新小岩へ行く快速電車があります。その電車に乗っているときにある想念を受信しました。それは頭の中ではっきりと人の声になって聞こえました。女の人の声です。その内容は個人的な事のように見えるものでした。地球人の想念だったと思うのですが、はっきりとはわかりません。これは音声によるテレパシーの最初の受信でした。

円盤、光体、母船の連続出現

昭和五十六年の八月頃のことです。私の子供がUFOを見ました。外で遊んでいた私の子供二人が家の中に飛び込んできて叫ぶのです。

「お父さん、UFOだよ！　いま飛んで行った！」

よく聞いてみますと形は楕円形で、横に小さい窓が一列に並んでいたというのです。ジグザグに飛んだそうです。

翌年の八月のことです。北海道に雄冬という町があります。石狩平野の海側の小さな町で、漁業を中心にしています。（編注＝筆者は北海道出身）。

そこへ私は真夜中に釣りに行ったんです。休暇で帰郷したのです。もう少しで釣り場へ着くというときに、不思議な光を見ました。その光は大きさが十メートルないし二十メートルぐらいあって、英語のUの字かJの字の形をしていて、下に光を出しています。ずっと長い光です。

明け方に下から上へ飛ぶ光を見ました。そういう光体を見たのですが魚はあまり釣れませんでした。

またその翌年の六月のことです。縦と横の比率が大体に一対四か一対五ぐらいの母船を見ました。私の勤務先の小学校の校庭で最初に子供たちが見つけたのです。白っぽく銀色に光る物体でした。ちょうどそのとき全日空の飛行機も飛んでいました。その母船のスピードはすごく速くて飛行機のスピードの三倍以上はあったと思います。南の空から飛んできて、ずーっと小学校の上あたりに近寄ってから、向きを変えて北の方へ飛んで行きました。近寄ってきたといっても千メートルは離れていたと思います。

五色の光を放つUFO

またその次の年の昭和五十九年九月頃のことです。五色の光を出すUFOを見ました。これもやはり小学校の校庭でテニスをしているときに見たのです。南の方から光を出してクルクルと回転しながら近づいて来るのです。

三百メートルぐらいまで近づいて来たのですが、そのときテニスをしていた人たちは全員目撃しました。あとで私はみんなに「UFOが私に会いに来たのだ。宇宙人が会いに来てくれたのだ」と言いました。

そのUFOですが、下の方の形は高さと幅の比率が二対三ぐらいの五角柱か六角柱のような形で、その上に半球が乗っているような物体でした。

赤、黄、緑、だいだい色、青の五種類の光で、順々にクルクル回りながら光を出して接近し、向きを変えたあと、北の方へ飛んで行って見えなくなりました。このときの光もやはりまぶしい光ではなくて蛍光に近いものです。

そのときはスペース・ピープルの純粋な楽しい気分が伝わってきました。私もあれに乗りたいなあと思ったものです。一番最初に目撃したUFOに乗っていたグループの人たちだと思います。

夢で海外旅行を予知する

その翌年二月のある日のことです。明け方に夢を見たのです。地球だということはわかるのですが、国別はわかりません。その上空を私がUFOに乗って飛んでいる夢です。

そのUFOは透明な直方体のUFOで、弁当箱みたいな形をしていますが透き通っています。私のほかにも沢山の人が乗っていました。同じ形のUFOが三、四機飛んでいるのが見えたように思います。パイロットは男の人でした。そのときはこの夢が何を意味しているのかはわかりませんでした。

その年の八月に日本GAP海外研修旅行でイスラエル・エジプトの旅に参加しました。そのとき夢の意味がわかったのです。いったんイスラエルへ行って、それからエジプトへ行ったのですが、エジプトへ行くときに飛行機の中から外を見た光景と夢の中で見た光景が全く同じだったのです。

夢の中で見た男のパイロットというのは田中さんでした（編注＝田中正氏は旅行会社関係者。毎年日本GAPの海外研修旅行の世話をする方）。旅行から帰って二カ月たってからそのことがわかったのです。それまではどうしても思い出せませんでした。

今から考えますと、夢の中のUFOには久保田先生は乗っていませんでした。このときの旅行には先生は足のケガで参加されなかったんです。それでこれは夢による予知かなと思いました。

素晴らしいオーラの女性を見る

同じ年の四月か五月の頃です。オーラの長さが普通の人の人体の長さの少なくとも二倍は出ている人を見ました。ですから天井近くか、もっとあったかと思います。

場所は新小岩のある所で、その人は女性でした。体の中心から放射状に赤に近いだいだい色と黄金色がスジになって混ざっていて、素晴らしいオーラ

でした。

私は今のところスペース・ピープルのオーラがどんなものかは知りません。でもオーラについてはなんとなく見えるようになっていたのだと思います。あとから見ようとしても見えないことがあります。

なぜオーラが見えるようになったかははっきりわかりませんが、テレパシーとかオーラ透視とか遠隔透視などの練習は毎日やっていました。

テレパシーの送信どおりに動くUFO

同じ年の八月上旬頃のことです。私の住んでいるアパートの近くの路上を夜八時頃散歩していました。

すると道路から離れた所にある高層マンションの間を白い物体が飛んだのです。見かけ上三十センチから六十センチぐらいの白い小さな物体です。円盤の形をしていました。

直感的にUFOだなと思い、「ジグザグに動いて下さい！」と念じると、そのように動くのです。そこで「向きを変えて下さい！」という想念を送ると、またそのように動きます。そのあとは闇の中に消えて行きました。

八月の十四日がエジプト・イスラエルの旅の出発日だったのですが、「GAPの旅行をよろしくお願いします。スペース・ピープルの皆さん、有難うございます」という想念を送りましたら、とてもあたたかいフィーリングに包まれました。そこでまた感謝の想念を送りました。

GAP海外研修旅行中にもUFOを目撃

そのGAPの旅行ですが、この旅行中にもUFOを何度か見ました。エジプト・ギザの大ピラミッドの所で夜、光と音のショーが開催されたときに上空を飛んだのを見たのです。

イスラエルのガリラヤ湖を船で渡って見学して、湖のそばで休憩したのですが、そこでも遠く水平線近い所を二、三機のUFOが飛んでいるのを見ました。

イスラエルには以前から行きたいと思っていたんです。これはGAPに入会する前からのことです。どうして行きたいかと聞かれても自分にもわからないんですが――。

イスラエルの言葉についても知りたいと思いまして、いろいろ本を探したのですが、現代のイスラエル語について良い本がないんです。しかしまたイスラエルには行きたいと思っています。

静岡で撮影したUFO写真

翌年の五月に静岡支部大会に参加させて頂きました。大会翌日、清水港へ行くバスの中からカメラで景色を撮ったのですが、出来上がった写真を見る

▼昭和61年5月6日，静岡支部大会の翌日，筆者がバスの後部から撮った写真。右上方に黒い物体が3個見える。

と、三つほどボーッとした物体が写っていましたので久保田先生に見せましたところ、先生は春川氏に見せたそうです。その結果、UFO的な波動が出ているとのことで、それはUFOだったのです。バスの最後部でうしろを向いて撮った写真です。

もう一枚の写真もやはりバスのうしろを見て撮った写真ですが、これもやはりボーッとしたUFOらしい物体が写っていました。

奇妙な雲が出現

今度は同じ年の十一月頃のことです。墨田区の錦糸町の近くをバスに乗っていました。錦糸町の駅の近くになってから、バスの外の景色を見ますと、西の空に不思議な形をした雲があるのです。平行四辺形の雲です。それが横に五、六個、縦に五、六個並び、全体も平行四辺形のかたちをしています。

そのまわりはちょっと離れて一面の雲なのです。その縦横の隙間には青空が見えていました。月例会で久保田先生にお聞きしましたら、それはUFOが作ったものだろうということでした。何かのメッセージを意味しているらしいということです。でも意味はよくわかりません（編注＝UFOは空中ですごい形の雲を自由自在に作る能力を有し、それにより特定の地球人に何らかのメッセージを送ることがある）。

飛行機から地上に巨大な影を見る

翌月の十二月十三日のことです。北海道へ行く用事があって飛行機に乗ったんです。東北地方の上空を飛んでいるときに下界を見たら、地面に細長い棒のような大きな影が映っていました。まっすぐな影です。地形とくらべると非常に大きな物だったので、私はすぐに母船の影だと思ったのです。

そこでまた久保田先生にお聞きしたら、それは私の考えとは違って、母船の影ではなくて、UFOが作りだした影なのだそうで、春川氏がそう言ったということです。

まだ出現するUFOと奇妙な匂い

その翌年、つまり今年（昭和六十二年）の一月のことです。仕事が終わって午後八時三十分頃、同僚の車で一緒に帰ろうと道路に出ましたら、私の頭の上を北から南へ、つまりうしろから前へ白っぽい、見かけ上直径二十センチから三十センチぐらいの丸い物体、これは円盤か球型のものかはわかりませんが、飛んで行きました。

同じく今年の二月のことです。ある本を読んでいて、ある頁を開くと、急にコーヒーの香りがしてきたんです。不思議だなあと思って次の頁をめくりました。するとコーヒーが消えました。

そこでまた前の頁を開いたところ、またコーヒーの匂いがします。それでこの本を書いた人はこの頁の原稿を書いたときにコーヒーを飲んでいたのだなと思ったんです。

翌月の三月十五日のことです。久保田先生が何かを話しておられる夢を見ました。その夢を見る二、三日前に東京月例会司会者の篠さんから体験講演の依頼があったんです。それでこれは久保田先生のテレパシーだなと感じました。

それから三日後の三月十八日のことです。私の娘が六年生で、通っている小学校の体育館で卒業式の練習をやっていたそうです。すると体育館の窓のすぐ外にポツンとした白っぽい物が出てきて、動いて、一回消えて、また出てきて、動いて、それからまた消えたそうです。

白黒写真がカラー写真に見えた！

話は変わりますが、ユリ・ゲラーが日本へ来たときにスプーンやフォークなどの金属を曲げて見せましたが、私もそういう物を手に持つと、すごくクルクルとよく曲がったんです。なくなったので店で買ってきてやりましたが、あまり曲げるものですから、家人がスプーンやフォークを隠してしまいましたので、曲げるのはやめましたけれども、今でも少しは曲げる自信はあります。

話は昨年の十二月八日にもどりますが、私は写真やカメラが好きで、写真の本もよく見ます。白と黒だけのモノクロ写真がありますが、それを見ていましたら、ある頁で突然色がついて見えたんです。

おかしいなと思って、まばたきを二、三回パチパチとやりましたが、やはりカラー写真のままでした。そこで「モノクロ写真にもどれ！」と念じましたら、モノクロ写真にもどりました。

そういうことがあったものですから、ほかのモノクロ写真で試してみたんです。「カラー写真になれ！」と念ずると、写真が全部カラーで見えるんです。これはすごく不思議なことでした。

以上の他にまだいろいろ不思議な体験があるんですが、ここでは省略させて頂きます。私自身にも意味のよくわからない事がいくつかありますが、いずれわかってくるだろうと思っています。

よく心霊的な記事などがありますが、そういうのは人を怖がらせるだけです。〝宇宙の意識〟を信頼して宇宙的人間に限りなく発達してゆこうと考えています。

GAPの皆様、スペース・ピープル、ジョージ・アダムスキー、そしてアダムスキー哲学を多年私たちに教えて下さった久保田八郎先生にこの場をかりて心より感謝申し上げたいと思います。

（昭和六十二年四月、東京月例会における講演より）

あのS・ハルパーン博士があなたの頭脳・潜在脳力を全開!!

ついに日本での発売開始

こんなに頭が冴えちゃっていいのかな!?

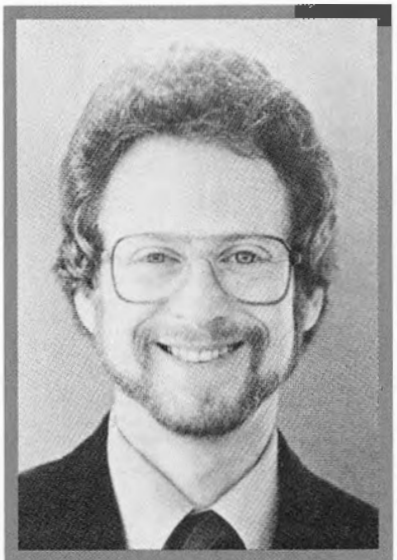
世界的に著名な心理学者であるとともに、潜在意識をゆり動かす独特の瞑想音楽の作曲・演奏家としても全米一の名声と実績を持つスティーヴン・ハルパーン博士。その博士が製作したすごいテープが遂に日本に登場した。あなたの知性・秘められた潜在脳力を100%発揮できるようにしてしまうという恐るべき力を持った"S・ハルパーン・サブリミナルテープ"がそれだ。

瞑想音楽に興味のある方ならよくご存知の、あのスティーヴン・ハルパーン博士があなたのためにすごいテープを制作しました。世界的に著名な心理学者であると同時に、潜在意識を覚醒させる独特の音楽の リエーターとしても博士の名は余りにも有名です

ハルパーン博士は、音楽の分野だけにとどまらず、潜在意識に効果的な刺激を与える言葉を、耳に聴こえない波長で音楽に同調させる"潜在意識刺激詞"テクノロジー・の分野でも全米にその名をとどろかせています この肯定的メッセージを耳に聴こえない波長に変換して潜在意識へ送り込む技術については30年ほど前から、その理論・技術化について専門家の間で研究が行なわれてきたのですが、非常にデリケートで高度な音響技術を要する、メッセージを効果的に潜在意識に伝達し刻印する手段が見つからない等々の理由で商品化するのは非常に困難なことだとされていました。

それをハルパーン博士の開発した高度な音響技術と潜在意識に効果的に刺激を与える特殊な音楽の力を利用してメッセージを効果的に潜在意識に伝達し刻印するという、最年の研究によって生まれた独自のノウハウにより可能にしてしまったのです。

「この種の耳に聴こえない言葉をうたい文句にしたテープが米国内で他にも何種類か出回っているが、そのほとんどは技術的にも幼稚で、効果の点で問題のあるものが多く、中にはほとんど"雑音"にすぎないテープもある。私の調査・研究によれば、効果の点で信頼が置けるのは、私の製作したテープそれに、私の友人が製作・販売している同種の音楽同調方式のサブリミナルテープ等、数えるほどにすぎない。」という博士の自信に満ちた口調を裏づけるかのように、ニューヨークに本社を置く大手レコード会社から発売されている博士のテープは昨年一年間だけでも五十数万本の販売実績を誇り、数多くの熱狂的ファンを作り、その効果の確かさが証明されています



●スティーヴン・ハルパーン博士のプロフィール●

音楽・音・言葉の潜在意識への作用の研究で世界的にその名を知られる心理学博士 学者であると同時に"瞑想音楽の神様"としても米国はもちろんヨーロッパ各国にその名を知られ、世界中に熱狂的なファンを数多く持っている 博士の音楽は鑑賞用の音楽としても高く評価されているが、博士の長年の研究のエッセンスが凝縮した"音の薬"としての効能も医学・心理・教育関係者の間で高い評価を受け、いろいろな分野で博士の音楽を取り入れている カイザー・パーマネント病院をはじめ全米の一流の医療機関では、博士の音楽を薬品の代わりとして患者に与え、著しい効果を上げている

あなたの知性・潜在能力が一気に全開!!

今回ご紹介する"S・ハルパーン・サブリミナルテープ"スーパー・インテリジェンス・セット」は、あなたの大脳・潜在脳を限りない弛緩状態、あるいは覚醒状態に誘導することによって、あなたの持つ最高の知性を引き出し、秘められた潜在能力を一気に全開させる驚くべき効果を持ったサブリミナルテープのセットです。

もう多くを語る必要もない、ハルパーン博士の作曲になる大脳に一万ボルトの電流を流すほどのインパクトを与える音楽の力と、それに同調した、独自の高度技術で耳に聴こえない波長に変換された、潜在脳を刺激するメッセージ（もちろん日本語）の作用によって、確実にあなたをカミソリのような鋭い切れ味の頭脳の持ち主に変えてゆきます。

●セットの各テープの内容

この"スーパー・インテリジェンス・セット"は次の4本のサブリミナルテープから成り立っています。

〈テープ1〉"ウェイク・アップ"

ぼんやりした頭をクリアにし、大脳を覚醒状態に誘導するテープ。朝、目を覚ました時、会社へ行く前等に聴くと、その日一日の仕事のはかどり方が違ってきます。

〈テープ2〉"リラクセイション"

大脳の緊張をときほぐし、心の奥底にたまったストレスを完全に洗い流し、頭脳を最高のコンディションにもってゆくテープ。イライラした時、勉強の前などに聴くと心が落ちつき、勉強の能率が倍加します。

〈テープ3〉"マッサージ"

頭脳の活発な働きを邪魔する心身の緊張、頭の疲れをやさしくもみほぐし、頭の血のめぐりをよくし、最高の知性と集中力を発揮できるようにしてくれるテープ。会社から帰った時、風呂上がり等に聴くと、一日の疲れがふっとび、頭脳・身体がともにリフレッシュされます。

〈テープ4〉"スリープ"

大脳を完全な弛緩の状態、シーター波優位の完全な休息の状態に誘導するテープ。夜、眠る前に聴くと心地よく眠りにつくことができ、大脳の活性化に欠かせないデルタ波の脳波が出る熟睡状態に容易に到達することができます。不眠症ぎみの方、熟睡できない・朝の寝覚めの悪いという方にも最適のテープです。（この"スリープ"のテープは、車の運転中、危険な作業をしている時等には絶対に聴かないようにくれぐれもご注意下さい）

お申込みは今すぐハガキ・電話で

今ならS・ハルパーン・サブリミナルテープ4本セット"スーパーインテリジェンス・セット"を7日間無料試聴できます。ご希望の方は今すぐ電話・ハガキで左記宛にお申込み下さい。

代金（一括払＝18,000円・分割払＝(月)4,800円×4回送料はともに500円）は商品到着後7日以内にお支払下されば結構です。（7日以内の返品は自由）

お電話のお申込みは
東京03(479)5864
受付時間AM8～PM24
(日・祭日も受付中)

●「スーパーインテリジェンス・セット」試聴希望
●一括・分割の別
●住　所
●氏　名
●電話番号
●年　令
●職　業

郵便はがき
40
〒107
東京都港区南青山1－26－4
アメリカンライブラリー社
UFC④係

〒107　東京都港区南青山1－26－4
アメリカンライブラリー社
電話　東京03(479)5864

〈毎日、読売、朝日各紙に掲載された六十二年十二月以降の科学記事を抜粋紹介。各記事末尾の数字は掲載月日を、Mは毎日、Yは読売、Aは朝日を示す〉

世界初、超電導のモーター開発

米国立アーゴン研究所は一月一日、超電導物質を使った電導モーターの開発に世界で初めて成功したと発表した。「マイスナー・モーター」と名付けられたこのモーターは、毎分五十回転の小型なもので実用にはほど遠いが、研究スタッフは「超電導物質によるモーターが実現可能であることが初めて実証された」と語っている。

研究がさらに進めば、発電コストの減少などのほか、リニアモーターカーに使用する強力電磁石の開発に大いに役立つとされている（1・3M）。

ゴキブリ退治にホウ酸が威力を発揮

ゴキブリ退治に、テレビで見たホウ酸入りダンゴを作ったところ、すごい効果がありました。悩まされている人は試してみませんか。

中くらいのタマネギ三個を刻んでミキサーで砕きます。小麦粉百四十㌘と砂糖小さじ二杯、牛乳少々を混ぜ、ホウ酸五百㍉㌘を加え、耳たぶの固さに練ります。小さくちぎって丸め、二個ずつアルミホイルに乗せ、ゴキブリの出そうな所に置きます。何日かすると、片隅でひからびたようになって死んでいます。

ゴキブリは、わが家の台所、ふろ場などに出没。ジャガイモをかじったりしていました。接着捕獲器を仕掛けてもあまり効果はありませんでした。昨年四月に作ったのですが、その後本当に姿を消しました。一緒に作った人はみなそのように言います。ただ、子供の手が届かないよう注意して下さい（東京葛飾区・吉田与志　62歳。1・19M）。

新タイプの高温超電導物質を発見

科学技術庁・金属材料技術研究所は一月二十一日、新しいタイプの高温超電導物質を発見したと発表した。組成元素がこれまでの物質と違ううえ、電気抵抗がゼロになる臨界温度も一〇五K（氷点下一六八度C）と高く、今後の高温超電導研究上の素材として有望という。

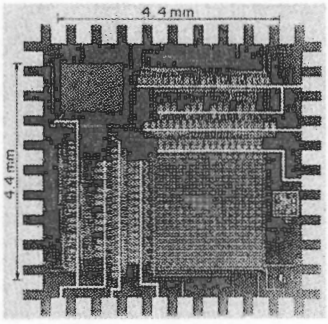
同研究所筑波支所の前田弘総合研究官らのグループが発見した。組成元素はビスマス、ストロンチウム、カルシウム、銅、酸素で、その比を一対一対一対二対X（Xは不明）にして高温で焼き固めたセラミックス。一二〇K（氷点下一五三度C）ぐらいから電気抵抗が急激に小さくなり始め、一〇五Kで抵抗がゼロになる。再現性がよく、超電導特有の現象である磁場を排除する「マイスナー効果」も確認したという。今回の物質には希土類元素が含まれていないという点が注目される（1・22M）。

データ記憶「十億分の一秒」突破

日本電気は十六日、十億分の一秒以下でデータの記憶や読み出しをする超高速ジョセフソンメモリー（記憶素子）の開発に世界で初めて成功した、と発表した。絶対零度（氷点下二七三度C）近くで電気抵抗がゼロになる超電導物質の間に絶縁体をはさむと、両端に電位差がなくても電流が流れるジョセフソン効果を利用したメモリーで、この開発が次世代の超高速コンピューターであるジョセフソンコンピューターを実現するうえでのカギとされていた。

ジョセフソンメモリーは超電導現象を利用しているため、回路に電流を流すと、その電流が永久に流れるという特徴がある。つまり、電流が流れている状態と、流れない状態を、コンピューターの二進法のもととなる「0」と「1」にあてはめることでデータの蓄積ができ、さらに信号の出し入れを低電力消費、高速で行なえるので将来の超高速コンピューター用のメモリーとして有望視されていた。

同社が開発したのは、超電導物質にニオブを使った1㌔ビット（0、1の信号を蓄える個所が千二十四個ある）メモリーで、六㍉四方（実効面積四・四㍉四方）のチップの上に約一万個のジョセフソン接合を集積している。



▲1キロビットジョセフソンRAMチップの顕微鏡写真

種類はRAM（随時書き込み読み出しメモリー）で、信号の記憶や読み出しにかかるアクセス時間は五七〇ピコ秒（一ピコ秒は一兆分の一秒）と、世界で初めて一ナノ秒（十億分の一秒）の壁を突破した。日本電気は二、三年後をめどに、簡単な計算のできるジョセフソンコンピューターを試作したいという（2・17M）。

リンパ球移入と血しょう交換併用が末期がんに効果

末期がん治療法の一つとして知られるリンパ球移入（LAK）療法に加え、血液の血しょう交換療法を同時に施すと、四人に一人の割合でがんの進行が停止または後退することが、広島大原爆放射能医学研究所外科（服部孝雄教授）の峠哲哉講師（四五）＝血液しゅよう学＝の臨床研究で明らかになった。LAK療法も血しょう交換療法も単独ではがん治療に十分な効果がなかったが、新治療法はこの二つをドッキングさせたもので、がん研究者も「末期がん患者の延命療法として画期的」と評価している。

LAK療法は患者から採取したリンパ球の免疫効果を高めるたんぱくの一種「インターロイキン（IL）―2」を加えて培養、活性化させたリンパ球を再び体内に戻し、人が持っている抵抗力を利用して、がん細胞を減らす療法。

しかし、せっかく活性化したリンパ球を注入しても、血液中の血しょうの中にはリンパ球の働きを抑制するたんぱくが数種類あり、特に、末期がん患者にはこれらのたんぱくが増える傾向がある。

そこで峠講師は、患者の血しょう成分を正常な人のものと交換し、リンパ球が働きやすい状態にした後LAK療法を施せば効果が高まるとみて、二年前から十六人の末期患者にこのドッキング療法をした。

その結果、胃がん患者二人のがん進行が止まり、胃がんによる腹膜炎の腹水がなくなった▽肝がん患者のしゅようの表面積が当初より八六％縮小し、がんが後退した▽既にじん臓を摘出したじんがん患者の肺転移が消失した――など、四人に著しい効果があった。このうちの一人

は手術前は寝たきりで呼吸も困難だったが、手術後一年経た現在は日常生活に支障がないまで回復し、元気で暮らしている。

峠講師は「七年前から血しょう交換に取り組んできたが大きな効果がなかった。LAK療法とのドッキングのきっかけは、血しょう交換で使う機器がリンパ球移入にも使える利点もあったためで、コロンブスの卵のようなものだった。今後もこの療法に手を加え、とかく医師たちがさじを投げがちな末期がん克服に挑みたい」と話している（2・21M）。

米、木星探査へGO

米国にとってボイジャー2号以来の大型惑星探査プロジェクト「ガリレオ計画」の詳細な飛行計画が二日、米航空宇宙局（NASA）から公表された。

ガリレオ計画は、太陽系最大の惑星である木星に向け重さ二・五五トンの大型探査機を飛ばし、木星の大気と「ガリレオ衛星」と呼ばれる木星の衛星群の詳細な観測を目的とする。

スペースシャトル「チャレンジャー」の爆発事故で当初予定された一九八六年五月の打ち上げが不可能になったため、地球から木星に直行する予定だった飛行経路も太陽の周囲を二度ぐるぐる回るという苦心の軌道に大幅変更された。

発表によると、探査機は八九年十月ないし十一月に地球周回軌道上のシャトルに積んだロケットによって発射される。

最初は地球の外側に位置する木星とは逆方向の太陽系の内側に向けて飛行、金星の重力を利用して加速される。太陽をほぼ一年かけて一回りしたところで地球と再会、今度は地球の重力で再加速され、二年で太陽の周りを回って再び地球に接近、もう一度加速されて一路、木星へまい進する。

探査機本体が木星に最接近、途中で本体から分離された惑星探査機が高温高圧の大気が渦巻く木星表面に突入するのは九五年十二月七日の予定。六年ちょっとの道のりだ（12・3Y）。

エイズ効果、続々発表―京都で学会

ガンマグロブリン（免疫抗体）や漢方薬の「甘草（かんぞう）」から抽出したグリチルリチンの大量投与がエイズに効果――。二十一日、京都市で始まったエイズ研究会第一回学術集会で、臨床的に有効なエイズの新治療、発症予防法が相次いで発表された。

ガンマグロブリンの大量投与法を発表したのは、久留米大医学部第一内科、名取英世講師。健康人から採取したガンマグロブリンを、エイズの前段階のエイズ関連症候群患者と無症状のウイルス感染者（キャリア）に一日約二十グラム、五日間点滴注射したところ、二、三週間後には免疫力を高めるヘルパーT細胞の数が一・四―二・八倍に増加。

グリチルリチンについては、東北大医学部第三内科が発表。キャリア九人に一日二百―四百ミリ・トルを十一週間続けて点滴したところ、八人にT細胞数の大幅な増加がみられた。一方、九州大医学部第一内科は、カリニ肺炎を合併した患者に、従来の治療薬に副ジン皮質ホルモン大量投与療法を併用、二週間後には肺の機能がほぼ回復したと報告した（12・22Y）。

ソ連、「ソユーズ」打ち上げ

ソ連は十二月二十一日午後二時十八分（日本時間同八時十八分）、有人宇宙船「ソユーズTM―4」を、カザフ共和国のバイコヌール宇宙基地から打ち上げた。「ソユーズ」は二十三日午後、軌道ステーション「ミール」とドッキング、搭乗員のウラジミール・チトフ船長らは、現在三百日を超える宇宙滞在記録を更新中のユーリ・ロマネンコ船長、アレクサンダー・アレクサンドロフ飛行技師と合流、約一週間の引き継ぎ作業の後、前任のロマネンコ船長ら二人は地球へ帰還する。これは「ミール」打ち上げ後、初の完全乗員交代（12・22Y夕）。

性決定の遺伝子発見。男性染色体から

長い間、世界中の学者が発見を争っていた人間の〝性〟を決定する遺伝子を、米ホワイトヘッド研究所のデイビッド・ペイジ博士らのグループが初めて確認、二十三日発行の専門誌「セル」に発表する。同研究所長でノーベル賞受賞者のデイビッド・ボルチモア博士は「明らかに歴史的発見だ」と評価している。同研究所はマサチューセッツ工科大学に付属するバイオ、医学の総合研究所。

人間の性を決定する性染色体は四十六本ある染色体（遺伝子の集合体）のうち二種類で、XY染色体と呼ばれ、XXの組み合わせならば女性、XYの組み合わせならば男性となる。今回、発見された遺伝子はY染色体の中にあり、TDFと名付けられた。この遺伝子があると、ホルモンの複雑な一連の反応で受精卵は男性へと育っていき、ないと、胎児は別の過程を経て女性に育っていく。

ペイジ博士らは、この遺伝子を発見するために、性染色体の規則の例外であるXXの組み合わせを持つ女性に着目し、これら例外的な六十人の遺伝子を詳しく調べた。XXを持つ男性は発育不全だが、ほかは全く健康な男性と変わりがない。またXYを持つ女性は生まれた時、女性にしか見えないが、性的な発達はしない。

その結果、XXを持つ男性も、そのX染色体上にY染色体の一部（〇・五％にあたる）を持っていることが分かった。ところが、XYを持つ女性でも、彼女たちのY染色体にはこの一部（〇・二％）が欠けていることを発見した。この結果、ペイジ博士らは、このY染色体の一部が男、女の違いを分ける〝カギ〟であると目星をつけ、さらに詳しく分析した結果、男性を決定する遺伝子を確認した。この遺伝子は他の遺伝子と同様に、タンパク質の生産を決定するが、ペイジ博士らは、この作られたタンパク質も一部突き止めている。ペイジ博士によると、このタンパク質はカエルの中で他の遺伝子の活動を制御するタンパク質に似ているという。

この遺伝子が真に性を決定するものかどうか、ペイジ博士らは、XXの組み合わせを持つネズミの受精卵に植え込み、オスになるかどうか確認することにしている。なおペイジ博士は、この発見は人間の男女の産み分けには応用できないだろうと言っている（12・24Y）。

異星人を探せ。電波メッセージを傍受、分析

宇宙にはわれわれのほかに知的生物がいるのか――人間がずっと抱き続けてきたこの疑問に答えるため、米航空宇宙局（NASA）は、今年度から予算を一挙に五倍の約一千万ドル（十三億円）に増やして必要な装置をそろえ、早ければ一九九二年から本格的なET（地球外生物＝異星人）探しに乗り出すことになった。

ET探しは米国のライフサイエンス

（生命科学）計画の一環として、さる八五年から開始され、正式には「地球外知性生物探査計画」（SETI）と呼ばれる。NASAのエイムズ研究センターとジェット推進研究所（JPL）が担当する。同計画では、もし本当に宇宙にある程度発達した文明を持つETがいれば、人類と同じように電波を利用し、外に向かって何らかのメッセージを送り出しているはずなので、宇宙に広く目を向けて、そのメッセージを地上でキャッチしようというもの。

ETからの電波メッセージを受け取るアンテナとしては、JPLの既存の電波望遠鏡や、プエルトリコにある直径三百五㍍の世界最大の電波望遠鏡を使う。これらから得られた膨大な量のデータを、一度に一千万チャンネルもの周波数に分けて分析し、電波が、宇宙で生まれた自然のものか、ETが出した人工的なものかを最新鋭コンピューターで直ちにえり分ける。使用する分析装置は「全く新しい強力なタイプ」（フレッチャーNASA長官）という（2・26Y）。

火星探査に米ソ協力

モスクワで十二月十一日、米ソの宇宙開発協力協定を一歩進めた実務議定書が調印されたが、この際にソ連側が火星探査で提案した両国の協力計画の内容が二十日までに分かった。

今月のワシントンでの米ソ首脳会談にゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の宇宙問題顧問として出席したサグデーエフ・ソ連宇宙研究所長は十三日付のワシントン・ポスト紙への寄稿の中で①一九九二年に米国が打ち上げる火星探査船と、九四年にソ連が打ち上げる探査船で得られたデータの交換を行なう②次の段階として火星の土を地球に持ち帰る③二十一世紀に米ソ各一人の宇宙飛行士を国際クルーとして火星に送り込むーとの計画を明らかにした（12・21北国新聞夕）。

がんの原子炉治療応用拡大に期待高まる

がんの原子炉治療は正しくは「選択的熱中性子捕促療法」といい、三島豊・神戸大医学部教授（皮膚科）らのグループが、死亡率が高い皮膚がん「悪性黒色しゅ」への応用に成功して以来、利用幅を広げる研究にも熱がこもってきた。

この療法では、まず原子炉の炉心から発生している放射線のうち、熱中性子線（速度の遅い中性子の流れ）をえり分ける。不要なガンマ線などを除く「ふるい」となるのはビスマスの壁だ。

一方、原子量一〇のホウ素（B）は、他の物質に比べ、極めてよく熱中性子を捕らえる。熱中性子の当たったホウ素原子は、超微小の「爆発」を起こして、リチウム（Li）とアルファ粒子に分裂する。その飛ぶ距離、言い換えれば「爆発」による破壊の範囲は直径で約一四㌮と小さい。これは悪性黒色しゅ細胞の直径に等しい。つまり患部にだけホウ素を送り込んでおけば、人体にさして害のない残度の熱中性子線で周囲の組織を損なわずにがんだけを選んで壊せる。第一号の患者はこの方法で悪性黒色しゅの治療を受けた。約二十四立方㌢もあった患部は二カ月で約二立方㌢にまで縮み、今も再増殖のきざしはない（12・15A夕）。

カリニ肺炎の切り札

エイズ患者が死ぬ最大の原因となる重症肺炎に、副腎皮質ホルモンを短期間に大量に使うステロイドパルス療法がよく効くことが、九州大医学部の仁保喜之教授、石丸敏之医員らのグループの研究で分かった。

エイズで体の免疫力が落ちると、体の中にもともといるウイルスやバクテリア、原虫などが悪さを始める。特にカリニ原虫の起こす肺炎は呼吸不全を起こし、最大の死因の一つとなっている。

石丸さんらが治療したのは二十二歳の同性愛のエイズ患者。せきと発熱で入院。肺炎がひどくなる一方なので、炎症を消す働きのある副腎皮質ホルモンのメチルプレドニゾロンを一日一㌘、三日間使ったところ、翌日から症状は改善、一カ月後には退院。現在も元気に働いている（12・23A）。

世界最大の望遠鏡を日本が建設計画

百五十億光年かなたの宇宙の果てまで見ようと、世界最大級の光学赤外線望遠鏡をハワイ島マウナケア山頂に建設する日本の計画が着々と進んでいる。順調にゆけば一九九五年ごろには完成する予定。

この大プロジェクトは「国立大型望遠鏡計画」と呼ばれ、現在、主に東大東京天文台が進めている。建設するのは反射望遠鏡で、宇宙からの光を集める主鏡の口径は七・五㍍。一枚の主鏡を使ったものとしては世界最大。建設場所のマウナケア山頂は標高四、二〇〇㍍。空気が澄んで乾燥しているうえ、気候も温和。年間三百日以上、晴天に恵まれるという天体観測には絶好の場所。稜線にはすでに米国、英国、カナダなどの望遠鏡ドームがずらりと立ち並んでいる。東京から富士山頂の五㌢の物体を識別できるという解像力を誇る赤外線観測では、太陽系以外の惑星系の誕生過程などについて貴重なデータが得られそうだ。（1・19A）。

キリストの聖衣の年代測定結果を近くイタリアで発表

イタリア・トリノのサン・ジョバンニ大聖堂にある長さ四・三㍍、幅一・〇九㍍の亜麻布は「処刑された後のキリストの遺体を包んだ布」といわれ、「キリストの全身像」がかすかに浮き上がって見えるという不思議なしろものだ。このため「サンタ・シンドネ（聖骸布）」の名で知られ、奇跡肯定派にとっては「キリスト最後の奇跡を残す貴重な遺物」となっている。一方、中世の画家が作ったニセモノ説が根強くある。一昨年、この布の所有者ローマ法王が炭素14法による年代測定を許可して、ナゾの科学的解明に乗り出すと発表せざるをえなかったのはこのためだ。

年代測定を依頼された欧米の専門家七人はすでに結論を出したといわれる。測定誤差が「百五十年」といわれる炭素14年代測定法だけに少なくとも「キリストの時代の布」か「中世のもの、つまりニセモノ」かはハッキリする。が「ローマ時代のもの」とされても、即キリストの遺体を包んだものとの証明にはならないので騒ぎとなっているわけだ（2・4A）。

▲トリノの聖骸布のネガ写真に浮かぶ〝イエス〟の顔。

GAP短信 GAP NEWS

■**海外研修旅行、計画を一部変更**

今年度日本GAP企画第十回海外研修旅行はかねてから「エジプト、イスラエル、イタリアの旅」と予告されていたが、近来イスラエル国内におけるパレスチナ人の抵抗事件頻発に伴い、外国人旅行者に直接の影響はないと思われるものの、慎重を期してイスラエルのみを除外し、「エジプト、イタリアの旅」として両国の視察に重点をおく旅に変更した。詳細は本号43頁。

■**各地UFO写真展**

①去る三月二十五日より二十九日まで茨城支部主催のUFO写真展が茨城県勝田市の「伊勢甚デパート」で開催されて大盛況を呈した。

▲茨城支部主催UFO写真展

②五月は栃木支部が三日より八日までの六日間、宇都宮市「栃木会館」二階ギャラリーでUFO写真展を開催する。

③三月から七月にかけて静岡・名古屋両支部主催で次の日程により各地でUFO写真展を開催する。

3月31日→4月11日（12日間）愛知県一宮市「アピタ一宮」、4月21日→25日（5日間）静岡市「ライブアピタ静岡」、5月12日→23日（12日間）岐阜県多治見市「ギャラリエ・アピタ多治見」、6月2日→13日（12日間）愛知県江南市「ピア・アピタ江南」、6月23日→7月4日（12日間）名古屋市緑区「アピタ緑」

■**神奈川支部代表・副代表交代**

神奈川支部代表・大崎孝典氏と副代表・内藤重雄氏は三月より代表を清水正氏（元山形支部代表）、副代表を元井武士氏として交代した。同支部月例会の日時と会場は従来どおり。

■**松山支部を廃止**

昨年末、松山支部伊藤達夫代表が起こした刑法に抵触する不祥事件のため、今年一月末をもって同代表を日本GAPより除名、同支部を廃止した。

■**ESPカードを制作頒布**

日本GAPは従来テレパシー練習用として紙製ゼナーカードを頒布してきたが、これをプラスチック製の堅牢なカードにし、ゼナーカード二十五枚、五色の色カード二十五枚、計五十枚を一セットにして、「ESPカード」と改称、プラスチックケース入り説明書付き本格的な超能力開発練習用具として三月より頒布を開始した。詳細は本号48頁。

■**今年度支部大会開催予定地**

今年度上半期は次の三箇所が開催。

①五月三日（祝）仙台市にて仙台・山形合同支部大会

②六月五日（日）秋田市にて秋田・青森合同支部大会

③六月二十六日（日）北海道旭川市にて旭川・札幌合同支部大会

右の秋田・青森合同支部大会の会場は先号の予告で「秋田県社会福祉会館」となっていたが、パークホテルの会議室に変更。詳細は本号45頁。福岡支部も今秋大会を開催の予定。詳細は次号。

■**今年度日本GAP総会**

本年度の総会は九月二十五日（日）に東京銀座七丁目の「銀座ガスホール」で、アメリカよりアダムスキーの高弟であったアリス・ポマロイ女史を招待して「ジョージ・アダムスキーの思い出」と題する大講演と質疑応答を行なう。特に講演は日本語で行なうつもりで日本語学校に通学、特訓中という。

夜は銀座八丁目の「金鶏会館」にて歓迎大晩餐会を開催。本誌100号発行記念として昼夜とも大盛況が予想される。詳細は七月発行予定の次号に掲載。

■**東京月例会テキストを五月から変更**

昨年より東京月例会における久保田会長の解説講義テキストは「テレパシー開発法」であったが、今年四月の月例会で終了するので、五月の月例会よりアダムスキー全集第四巻「宇宙哲学」を使用する。出席者はこの書と第七巻「アダムスキー論説集」を持参のこと。

■**日本GAP特別維持会員制を強化**

かねてから日本GAPは特別維持会員制度を設けていたが、会運営の安定と発展を期して今後これを強化することになった。創立以来二十七年間、久保田会長は一円も借金をせず会員の会費のみで賄いながら超堅実な手腕を発揮してきたが、昨今の物価高には抗しがたく、スポンサーなしの徒手空拳では運営が困難なため会員による援助体制を強化しようという趣旨。会員には本号発送時に趣意書が同封された。多数の参加が望まれる。

■**GAP会員同士の華燭の典**

①会員・枝川文好氏（東京）と佐藤和枝さん（同）は四月十日、都内中央区のホテル浦島で結婚式を挙行、立食形式による盛大な祝賀会が行なわれた。

②齋藤庄一氏（埼玉県）と小島原竹子さん（同）も五月一日、都内千代田区の聖イグナチオ教会で挙式後、二番町の番町グリーンパレスで披露宴を開催の予定。

③今西行雄氏（神戸市）と坪井マリさん（岡山県）は五月二十四日にハワイで結婚式を挙行の予定。

④青木雅孝氏（神奈川県）と越崎裕子さん（東京）も今秋を予定している。

■**プラネタリウムでUFO写真投影**

栃木支部代表・渡辺克明氏は鹿沼市市民文化センター科学館プラネタリウムの主任だったが、四月より六月までアダムスキー関係UFO写真その他を投影解説する。一般投影は土曜日午後一時半より、日曜祝日は午前十一時からと午後一時半よりの二回投影。

UFO——宇宙からの完全な証拠

UFOs and the Complet Evidence from Space
By Daniel Ross

金星、火星、月に関する真相

●ダニエル・ロス／久保田八郎訳

連載第4回

スキアパレリ、ローウェルら偉大な天文学者が火星上に発見した〝運河、植物地帯〟を惑星探査機が否定したというのは米政府とNASAの歪曲と隠蔽によるというロス氏独特の緻密な分析と科学的調査研究が展開。UFOと密接な関連のある謎の惑星に偉大な文明を持つ進化した人類が住むことを解明した佳篇。

防備を固めた営利追求の地位にある人々のために活動しているサイレンス・グループ（訳注＝宇宙の真相を大衆に知らせないように暗躍する団体）は、UFOが別な惑星から来るという確証が官憲筋や政府から絶対に出ないようにしようとして、政府の秘密部門や情報機関などに潜入していた。科学問題で大体に保守的な公共または私的な団体は、UFO存在の証拠を推測しそうにもなかったが、とにかくこれらの団体は地球へ来る宇宙船（UFO）の発進地を確証する手段を持たないだろう。

完全な、反論の余地のない確証は、政府のある宇宙開発機関の領域内に厳重に属していた。そしていずれの宇宙探索の成果の公式結果も国家安全保障局の単独の統制下にあった。別な惑星の環境に関する公式発表は、旧来のオーソドックスな見解、既成科学により頑迷固陋になっていた諸学説などと一致するように慎重にゆがめられたのである。

発表をゆがめている情報機関

金星や火星が地球のような環境を持つ惑星として発表されなかったのは、アメリカの宇宙探査機による探査の技術の欠陥によるのではなく、陰から糸を引いている情報機関がひそかに削除したからだ。こうして宇宙に関する非常に多くの誤った考え方が政府筋から促進されてきた。さらにこれが科学ジャーナリズムの世界で固定化されるので、読者は現代の世の中でいったい解決がつくのかどうかと、かなり迷うかもしれない。

科学ジャーナリストが世界を欺こうとして大それた陰謀をたくらむことはないし、宇宙の状態に関して自分たちの推測をしている科学スポークスマンたちが陰謀をめぐらすこともない。彼らは実際には自分たちが書いたり言ったりしている事柄を信じているのだ。これは彼らの言説が一般人の認識するところとなって広くゆき渡り、固く保たれて長いあいだ教えられてきたからである。

また科学ジャーナリストたちの考え方は、過去の宇宙開発を管理している人々がマスコミを通じて流したインチキな発見事によって強化されてきた。

本書における論説のなかには、専門家群の宇宙に関する疑問を再評価することで役立つのもあると思う。

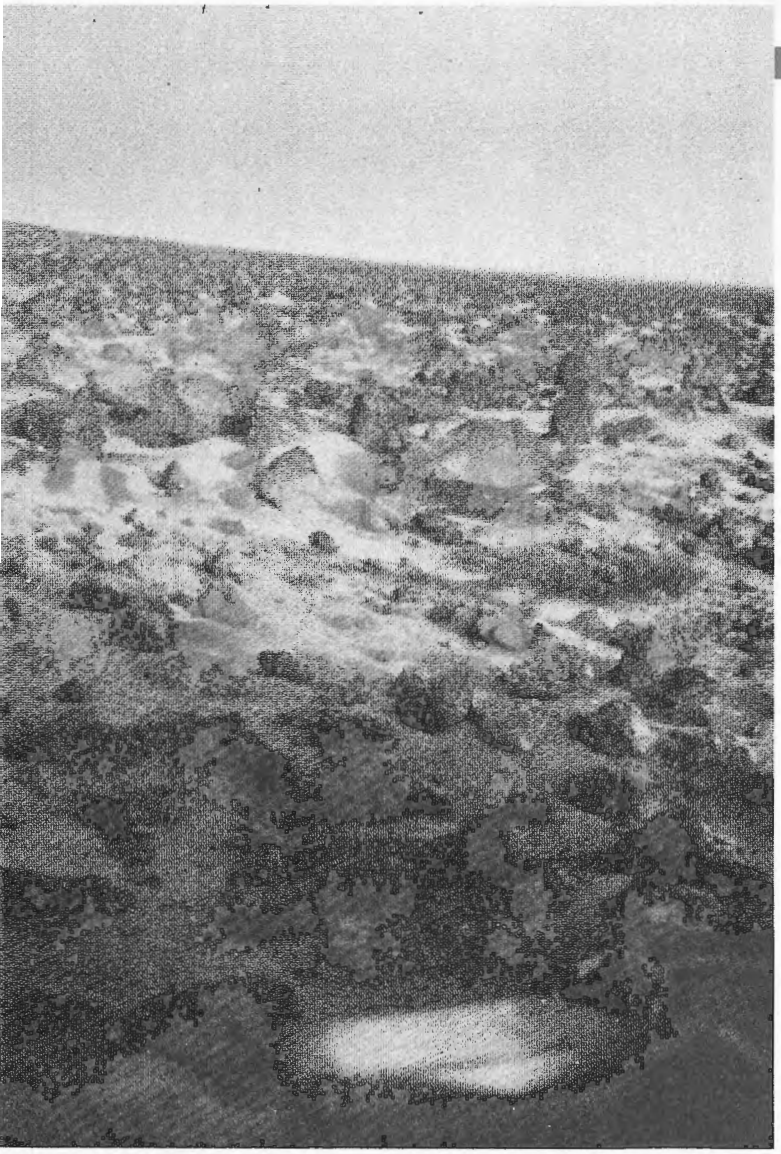
同様に、本書は一般天文学に面とむかって反対するものではない。実際には本書中の多くの知識情報は、一流天文学者の観測と終生の仕事にもとづいている。しかしわが太陽系に関する真相の立証において、天文学界のオーソドックスな考え方にほとんど同意していないことが読者にわかるだろう。人間はいかなる分野にせよ一つだけの分野に自分を縛りつけるならば、きわめ

て限定された知識しか持てないだろう。UFOの背後にひそむ真相を特定するには、宇宙科学の全範囲を含む完全な調査を必要とするのである。

今日までのあらゆる惑星調査と一般人の推測を伴う難問をまずここで定義する必要がある。それは次のとおりだ。「惑星の諸状態に関する政府発表は、真実のUFO存在の証拠が政府によって長いあいだ隠蔽され削除されてきた事柄に一致するように仕向けられてきた」

だからこそ火星に関する真相が現在まで絶対に知られないし、公開もされず、認められもしないのである。しかも数千にのぼる目撃報告のある十八年間のUFO目撃は、一九六五年七月に火星へ接近した最初のアメリカの宇宙探査機に先行しているのだ。これは重要な相関関係である。

もちろんUFOがわれわれの惑星調査の大きな刺激剤になったことは、おおやけには認められなかった。今こそ本書において火星の環境が地球の状態にきわめてよく似ていることを立証するつもりであるが、これは昔の望遠鏡観測の記録の検討と、近年の宇宙探査機の開発の論理的な分析によるものである。



▲1979年5月18日にバイキング2号が火星のユートピア・プラニシアに着陸して撮影した写真。空が黄色なのはNASAが発表前に黄色フィルターをかけて焼き直したからで、実際は青空なのだと本記事の原著者ダニエル・ロス氏は言う。

スキアパレリの水路の発見

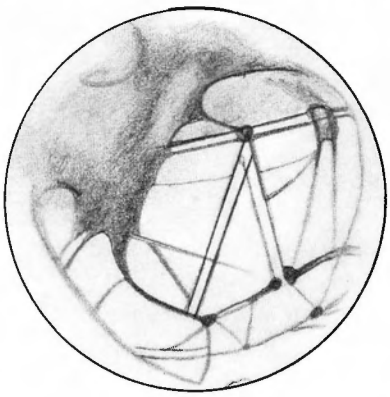
火星の望遠鏡による観測の初期の歴史は、多数の書物に説明されてきた。始まりは一八七七年、ジョバンニ・スキアパレリが自分の八・七五インチ反射望遠鏡を用いて、火星地表の多数の長い線が大きな暗い地帯へつながっているのを観測したときである。

（訳注＝スキアパレリ《一八三五―一九一〇》はイタリアの名高い天文学者。トリノ大学を出てベルリンに留学後、ミラノ天文台長となった。惑星観測の第一人者で、火星表面に微細なスジ模様を発見し、これを水路（カナリ）と呼んだので、火星人存在説をめぐって大論争を引き起こした）

彼はその線群を自国語で『カナリ』と述べたが、これは英語の水路（チャネル）を意味する。しかしこの訳語はただちに『運河（カナル）』となったので、彼の発見は火星上の知的生物が人工的な水路を建設したにちがいないという考え方を引き起こしたのである。

スキアパレリは自分で知的生物がいることをおおやけに言明しなかったけれども、実際にはその考え方を推進していた人たちを失望させなかった。なぜなら彼は百十三本の異なる水路（カナリ）が長く直線状にきれいな輪郭を示しているのを発見したからだ。

彼の火星地図は多年標準となったが、彼はさらに火星の大きな表面地帯群と明瞭な斑点群にたいして、聖書や古典的な神話に出てくる古い名前をとってつけた。そして中東の昔の土地の名もつけた。火星の地勢につけられたその名前（複数）は今もなお火星地図に残っている。



◀スキアパレリが望遠鏡で観測して描いた火星の表面。直線のスジが運河を示す。

的に運河が交差している。この地域は季節によって暗くなることがわかったが、それをローウェルはオアシスと名づけた。これは植物や作物の生長が豊かであることを示している。当然のことながら彼はそのオアシス地帯（複数）に火星人たちの都市（複数）があるものと結論づけた。

ローウェルは、両側をスジで囲まれた、季節によって濃くなってくる広い地域がもし存在しなかったら、実際の水路は地球から見えないことがわかっていた。火星面に幾何学的な線による明瞭な網目模様が見えるのは、両方の要素の組み合わせであった。

水路によっては長さ約四千八百キロ、幅二十四キロから四十キロにおよぶものもあった。

一九一五年、ローウェルは科学界に対して次のように声明した。

「火星には人間が住んでいる。われわれは絶対的な証拠を持っている」

彼は、火星の文明は複雑で高度に進歩した灌漑システムを持っており、それは地球の望遠鏡で見られるし写真に撮ることもできたと公言している。数枚の写真が早くも一九〇七年に撮影されている。

ローウェルの態度は既成科学のオーソドックスな見解に対してあまりにも革命的だったので、多数の人からひどく侮辱され、事実上無視されたのである。

ローウェルも運河を発見した

有名なアメリカ人天文学者・パーシバル・ローウェルは、火星を研究するために自分の生涯を捧げる決心をした。一八九四年、彼はアリゾナ州にフラッグスタッフ天文台を建設し、ここに二十四インチ屈折望遠鏡を備えた。

一九一五年までに彼とスタッフは七百近い運河を地図に残した。これは火星表面の正確な網目模様の大規模な構築物であり、これが極冠の氷から水を引いているというのだ。それらは直線状の狭いスジで、ところどころ平行になっており、多くの場所では幾何学

スライファー博士も運河を見た

二十六カ月ごとに一度、地球と火星は太陽をまわる軌道上にあって互いの距離が最も近くなる。天文学ではこれを「衝になる」と呼んでいる。しかし両方の軌道が楕円であるために、最も好ましい衝は十五年ないし十七年ごとに一度だけ発生する。そしてこのとき二つの惑星は約五千六百万キロの距離で最接近するのである。

広く展開する運河と斑点を観測するために天文学者は限りない忍耐力と決意を持つ必要があった。もっと重要なのは寛容の精神である。今日の既成科学者と同様、ローウェルの同時代の人々もしばしばこのような特性に欠けていた。

望遠鏡をのぞきながら遠い火星面の特徴を調べるのは困難な手の込む仕事だった。しかもこの観測は地元の大気条件とその他のシーイング要素が特別にうまく合致するような大きな天文台においてやれるだけである。しかし短期間の好ましい状態のあいだですら円板状の火星像はほとんどいつも細部のぼやけを見せていた。これは地球と火星間に常に存在している大気の乱れのためである。

われわれの大気は熱のために絶えず分子運動を続けている。肉眼で見れば空は非常に澄んで静かに見えるので、人は大気中に完全なシーイング状態があると思うだろう。星々や星雲を見るにはそうかもしれないが、大きな望遠鏡で近隣の惑星を見るときは同じ状態ではない。高倍率の望遠鏡を用いると、ほとんど知覚できないほどの大気中の熱（または風）の運動のために、かすかなチラツキが起こり、惑星上の大きな特徴は容易に認められるだろうが、微小な細部は、ほとんど絶えまなく起こるかすかなぼやけの中に失われるのだ。

ほんの一瞬間だけ大気の不安定が一、二秒間とまることがある。まさにその瞬間、機敏な望遠鏡観測者は完全なシーイング状態を得て、五千六百万キロ彼方の惑星像の細部をとらえるのだ。しかもこの観測はほんの数秒間続くだけで、明瞭な写真を撮るのは極端に困難となる。

しかも運河の写真による証拠が得られる唯一の方法は、火星が近日点（太陽に近い位置）にあるのを直接頭上に見るときである。この観測は南半球の最適の位置で行なう必要がある。

ローウェルは一九〇七年にチリーへ特別な観測旅行に出かけて、火星運河の最初の写真を撮影した。彼の後継者であるE・C・スライファー博士は、後年南アフリカにおける観測により良好な結果を得たが、このときはカメラがかなり改良されていた。火星の運河はスライファーの書『火星の写真によ

る物語』の中に掲載されている。私が入手した書物は一九六二年にアリゾナ州フラッグスタッフのノースランド出版社から出たものである。

写真の質というものはいつも既成科学者の議論の的になる。彼らは自分の目で見たことのない物ならすべて否定するのだ。だが実際には、五千六百万キロの距離にある惑星の望遠鏡写真を撮ったときに出てくる結果と比較して、肉眼というものは望遠鏡の像を見るのに大変すぐれているのである。

スライファー博士は一九六二年に次のように述べている。

「火星の運河問題は、自分の観測のために最適の場所へ行く熟練した観測者ならだれでも、運河の存在を見たり、自分で納得するのに、さほどの困難はなかった。これのただ一つの例外も私は知らない」

仲間の天文学者、プチ博士はこの眼視観測の証言を確証して、一九五三年に次のように報告している。

「全運河模様が火星面に見られる瞬間（複数）はある」

ところが現在の文献類が必ず言及するのは、一九六〇年代のマリナー探査機が火星の運河が存在しないことを立証したとか、スキアパレリやローウェルの証言に関する議論は葬埋されてしまったという点だ。

望遠鏡を持たなかったマリナー探査機

運河の実際の証拠がNASA（米航空宇宙局）によって出されなかったのは事実だが、注意しなければならないのは、たとえこれら初期の探査機に積んであるカメラが、かなり明瞭に運河を示す地域を写したとしても、いずれにせよその証拠写真は公開されなかっただろうという点である。実際には、マリナー9号までは、火星表面の非常に小さな非代表的な部分だけが撮影されたにすぎず、しかもそのほとんどはきわめて貧弱な写真だった。マリナー4、6、7号は火星上の自然の地形である長さ三千六百八十キロもあるヴァレス・マリネウス大渓谷さえ発見していない。一般に公開された、ぼやけた白黒写真は全然鮮明さに欠けていた。

われわれは三十八万四千キロ彼方の月の望遠鏡写真でもっと良いものを撮ることができる。これは火星からわずか数千キロの位置で探査機が撮った火星写真よりも良いのだ。

注目すべき重要な点は、探査機はカメラを運んだのであって望遠鏡を運んだのではないということだ。NASAでさえも、マリナーに積載されたカメラは撮影位置から火星の文明の証拠をつかむことはできなかったことを認めている。しかし公開された火星の写真類はただちに運河存在論議の誤りを証明するものと解釈されてしまった。

コンピューター画像処理のごまかし

こうした探査機による宇宙写真とは実際は何なのか？　この〝写真〟というのは電波信号の中に含まれている無数の点（ドット）のかたちで地球へ送り返されるものなのである。

写真はこの電子工学的メッセージから再生されるのだが、これはコンピューターが各点（ドット）をグレーの明暗写真にする。最初の画像処理は生写真とみなされるが、これは基本的には色のない、ぼやけたグレーの濃淡を帯びたものだ。

次に画像処理班がコンピューターでグレーの生写真を再度処理し、生写真の中の確認し得る地点や特徴などを明瞭にする。こうして少し改良された画像が一般に公開されるのである。

アメリカの宇宙飛行士は、地球を回る高空の軌道から見ることのできる地球上の唯一の人工建造物は、中国の万里の長城だと言っている。もし火星上に万里の長城があったとして、それが写真に現れたとすれば、NASAはそれを一応発表するだろうが、長城の影も形もないようにして公開するだろう。コンピューター画像処理法を用いれば、地上の特徴やコントラストを、確認できないグレーのシミにしてしまうほどに消すことは容易である。この元の色のない生写真から処理し始めることによって、長城が処理中に全く現れないようにグレーの段階を修正しているにすぎないのだ。

一方、もし別な写真が自然の目じるしになるような物か特徴を示すならば、その写真は電子工学的に鮮明にし、集中的に非常な細部を示すようにされるのである。われわれは新しい技術の段階に到達しているのだ。つまり、微妙な電子工学的ブラッシングによって写真の質をどのようにでも変え得るのである。

さて、ここで望遠鏡観測によってスキアパレリとローウェルにより最初に発見された運河存在証拠に関する状況を明確にしよう。この問題は権威者たちが公式の確証を撤回したために〝葬り去られた〟にすぎない。マリナー4号は直線状の運河（複数）をいくつか撮影したのであって、このことは最後的にジェット推進研究所（NASAのためのあらゆる宇宙開発企画をやっている機関）の所長、ウィリアム・ピカリング博士によって後日承認されたのである。

冥王星を発見した科学者のクライド・トンボー博士も、一九六五年の探査機によって火星運河が撮影されたことを確証している。しかし公式にはこの種の証拠はまだ全然公開されていない。大衆はコンピューター処理の写真を見せられたのだが、細部を示すオリジナルの写真は権威者の手中にある。そし

て、もし運河が最初の探査機によって撮影されたとすれば、後のマリナーとバイキング探査機も撮影したことは確かである。しかしそのような情報は常に隠されてきた。私は後期の宇宙探査機に関する検閲状況を徹底的に論じるつもりだが、まず望遠鏡観測の記録を続けることにしよう。

火星に見られた不思議な現象と電波信号

今世紀の初めに一流の天文学者たちは、火星を観測中に二、三の例外的な現象を記録した。あるとき、長く継続した明滅する光が七十分間も続くのが観測されたのである。この出来事はある天文台長に「全く説明のつかない事」と言わしめた。

一九三七年と四九年には日本の専門家たちが火星の表面に一つの強い輝きを観測したが、これは六等星ほどに輝いていた。地球から見えるのだから、これらの〝発光信号〟はすごいものであったに違いない。いかなるタイプの火山活動でも地球ほど離れた距離から見えるようなことはあり得ないだろう。したがってこの輝きの原因は謎となった。別な機会（複数）には他の奇妙な光（複数）も見られている。

一九五四年には雲のような一個の物体が観測され写真に撮られたが、これはWという文字の完全な形をしていた。望遠鏡が像を逆さにしていると考えれば、それはMという字になる。その物体は幅が千七百六十キロもあり、火星のある一定の上空に一カ月以上も停止していた（大気中の自然の雲ならば形が変わり、数日以内に散ってしまうだろう）。

Wという字の三個所の交差点には強烈に輝く斑点または〝コブ〟があった。ワシントンのカーネギー研究所でさえも推測は高まった。それはあまりにも動かない異様な形なので、人工的な物ではないかという強い憶測が起こったのである。

一九二〇年代から三〇年代にかけて、繰り返して発生する電波信号が火星の方向から来るのがキャッチされた。この電波の断続性やパターンを考えると、この謎めいた信号が宇宙空間のランダムな電波ノイズまたは電気的な妨害である可能性はなくなった。なぜなら、この電波には知的なコードシステムがあったからだ。これがいつまでもわれわれに解読できないままに残ったとしても、知的な信号であったことだけは確かである。

有名な科学者のマルコーニは〝無線電信〟を発明した人だが、この人でさえも一九二一年に自分の進歩した実験装置を用いて、この惑星から来る電波をキャッチした。そして後に彼は火星からのメッセージを傍受したと信ずると述べたのである。

彼はコード信号の送信波長が百五十キロメートルあったと強調した。一方その当時の送信局で用いられた最大波長は約十四キロメートルだった。

この信号を受信していた続く数年間、多数の人が同じ結論に達したが、特に火星が地球に接近していたときはそうだった。一九三一年にイギリス科学促進協会への講演で、故バーンズ主教は他にも多くの人間の住む惑星が存在すること、多くの惑星は惑星間の電波通信を広めることが間違いなくできるかもしれないという自分の信念を披瀝したのである。今キャッチされているのはこのようなメッセージなのだと彼は言った。そしてこれらの惑星間信号が地球によって認められるとき、人道主義の新しい時代の夜明けとなるだろう。彼はさらに言う。この新しい始まりにおいて、別な惑星に関する新しい知識を歓迎する人々と、その知識情報が知られて受け入れられるのを危険と考える人たちとのあいだに対立が生じるだろうと。

このことはUFOが他の惑星の生命の存在を示した二十年後にも起こったことではないか。それは宇宙に関する新しい知識を心を開いて受け入れている人たちと、真実が流れるのを妨げようとしている人々のあいだの対立の時代の始まりではなかったか。

謎の火星の雲と光のその後の観測とともに謎めいた電波信号は、地球以外の生命に関するわれわれの考え方に異議をとなえるための火星からの原初的な信号を与えられていたのだと、あるフリーの天文学者たちは結論づけたのである。

火星には豊富な大気もある！

人間存在の可能性については、他の望遠鏡観測でもっと科学的な確実性があった。一九二六年（大正十五年）のむかし、火星の多量の大気を鮮明に示す写真が紫外線で撮影されたのである。同時に撮影された赤外線写真と比較すると、紫外線の写真（複数）は六十四キロの厚みを持つと思われる濃密な大気があることを立証したのだ。この高度の上にはもっと希薄な層がたしかにある。それは地球をとりまく上層部の薄い大気によく似ており、希薄すぎて写真では記録できないだろう。イギリスの科学者で作家のアール・ネルソンは『火星には生命がある』（一九五六年刊）の著者だが、彼によって火星大気の最上層部は六百四十キロの高度に達するかもしれないと示唆されてきた。

火星大気を示す初期の写真類はパロマー山天文台のG・E・ヘールによって撮影されたが、これはネルソンの本にも掲載されている。この写真観測から二つの即時の重要な結論を引き出すことができる。

第一に、火星の表面引力は今まで教えられてきたよりもかなり高いにちが

いないという点だ。というのは低い引力はこんな大きな大気を保つのに充分でないからだ。

第二に、こんなに濃密な大気があれば太陽エネルギーはオーソドックスの学説が示唆するよりももっと異なって互いに作用しあうだろう。そして火星の温度はかなり暖かく、もっと快適で、もっと地球に似ているだろう。

火星年の長さは地球の三百六十五日の一年のほぼ倍であり、火星の季節は地球と同じように変化する。北半球が夏のサイクルにあるとき、南半球は冬である。火星の一日の長さは二十四時間三十七分で、自転軸の傾きは二十五度。これは地球の二十三度にたいへん近い。

▲1976年7月22日，バイキング1号が1,843kmの位置から撮影した火星の大クレーター「アランダス」。直径24kmある。（サンテレフォート）

水も植物もある

北と南の極冠はそれぞれの冬のあいだ火星の赤道の方へほぼ半分近く伸びる。いずれの半球の春の始まりとともに極冠は縮小し、広い地域にわたる暗いうねりの部分は赤道の方へゆっくりと伸びてゆく。

この周期的な表面の暗い部分の変化は、両極冠から水が流れ出るための季節的な植物の成長であると広く考えられていた。各極冠はそれぞれの夏のあいだにかなり縮小する。ときには南の極冠が完全に溶けることもある。

セレペンティスの海、シレニウムの海、シリティス・メイジャーのような赤道付近の広い地域は、冬の茶褐色から明るい緑に変化し、続いて暗緑色になる。この後者の段階はしばしば暗青緑色と言われてきた。

また天文学者は季節が秋に変わるにつれて地表の各色が黄色と黄金色に変化し、最後は冬に茶褐色になることに気づいている。火星の表面の色は私があとで立証するように暗赤色ではないのだ。

カラフルな各季節のパレードは、心の広い天文学者連によって季節の展開であり植物の繁茂であると解釈されていた。周期的な展開は火星上の自然の気候の変化と規則的に一致していた。これは地球と同様である。

私はここで運河と作物用の灌漑（かんがい）のことを論じているのではない。周期的な植物の生活を示すこうした季節の変化は、人間が火星にいなかったとしても起こっているのだ。

酸素も存在する

火星の植物の存在は、ある方面では確実であると考えられていたが、別な方面では熱い議論がたたかわされた。しかしあらゆる議論を終結させる方法は、火星の環境の中に二酸化炭素、酸素、水などの存在を立証することにあった。そうすれば植物の光合成（こうごうせい）（生命過程）が実際に起こっていることになるのだ。

二酸化炭素は豊富にあった。保守的な科学者でさえもそれを認めている。というのは火星の大気の主な成分は二酸化炭素であると一般に考えられていたからだ。酸素も地球からの観測では火星大気中に検出されなかったけれども、ありそうに思われた。

酸素が存在する証拠は火星のある地域の土の色で示された。これが、ある地域（複数）は多量の酸化第一鉄、すなわち褐鉄鉱を含んでいることを示したのである。

地球には熱帯地方があるが、そこでは土が赤褐色の褐色鉱である所もある。この形式には二つの物が必要である。空気中の豊富な酸素と極端な湿気の二

つだ。明らかに酸素は植物の光合成の自然の産物として火星の大気中にあったのだ。

光合成を手短かに説明すると、これは生物学的な手順であって、これにより葉緑素を含む緑色植物は太陽エネルギーを用い、二酸化炭素と水から炭水化物を合成するのである。

水の六分子と二酸化炭素の六分子は、太陽エネルギーの助けによって、ブドウ糖一分子と酸素六分子に変えられる。すると酸素は大気中に流れ出るのだ。

われわれは酸素を吸って二酸化炭素（炭酸ガス）を吐き出すが、かわって今度は緑色植物が光合成を応用し、酸素を大気に返す。これは大自然界の完全なサイクルである。したがってもしあらゆる緑色植物が突然に地球上からなくなったならば、人間と動物のすべては死ぬだろう。われわれが吸い込んでいる酸素が補給されなくなるからだ。

火星の季節によって変わる植物の存在を立証するために確証される必要のある最後の現象は、水の存在であった。この証拠を求めるには、一九七六年のアメリカによるバイキング計画へ一足飛びするのが最も容易である。

（訳注＝ＮＡＳＡは一九七五年八月二十日に火星探査機バイキング1号を打ち上げ、翌年六月十九日に火星を回る軌道へ乗せて、七月二十日に着陸体をクリス・プラニシア〈北緯二二・五度、西経四八・〇度〉へ軟着陸させた上、画像を送信させ、土を検査し、気象データを得た。七五年九月九日にはバイキング2号を打ち上げ、翌七六年九月三日に火星のユートピア・プラニシアへ軟着陸させた）

バイキング1号は展開する地上の霧、もや、雲などを北半球で写真に撮影した。そして軌道を回る探査機に積んだ装置が読み取った結果、極冠（複数）は凍った水であることをはっきりと証明したのである。それは氷なのだ！

したがってもしこの極冠が完全に溶けたならば、それでできる水は六メートルの深さでもって火星全体を覆うことになると計算されたのである。

こうして、かなりの大気を示す初期の紫外線写真とともに生命に必要な大気成分が火星にも存在することが示されてきたのだ。三つの基本的な要因は二酸化炭素、水、酸素であるが、褐鉄鉱も酸素存在の間接的な証拠としてあげられる。

酸素存在のこの間接的な証拠を指摘することは必要である。というのはＮＡＳＡは火星の大気中の酸素の存在を確証することを拒んでいるからだ。このことはＮＡＳＡの手中に残してある唯一の切り札なのである。しかもＮＡＳＡはそれをしまい込んでいる。なぜなら生きている植物による光合成の手順だけが惑星の大気中の酸素の存在を説明し得ることを彼らは知っているからだ。

バイキングの探査中、ＮＡＳＡは窒素、アルゴン、二酸化炭素、水蒸気などを認めたが、ただしＮＡＳＡは相対的な比率や全体的な濃度を実際の状況とは不釣合にしていた。

しかしＮＡＳＡは酸素の存在を否定しているし、バイキング探査機で酸素を発見したことを認めようとはしないだろう。なぜなら〝大気中の酸素〟を認めるならば、それは火星に生命が存在するという明確な証拠として科学者たちに認められるようになるからだ。しかしまだあげねばならぬ証拠があるので、それがこのケースを立証するだろう。

一九五八年十月一日にＮＡＳＡ（米航空宇宙局）が設立される前に、大きな天文台にいた天文学者たちは依然として惑星に関する専門家であり権威者であった。この自由な思索家たちが隣の惑星の謎を探査するのに最後のチャンスを迎えるかもしれないことは、あたかも天の配剤であったかのように思われる。というのは一九五四年と五六年に火星は好ましい位置へやってきたからだ。

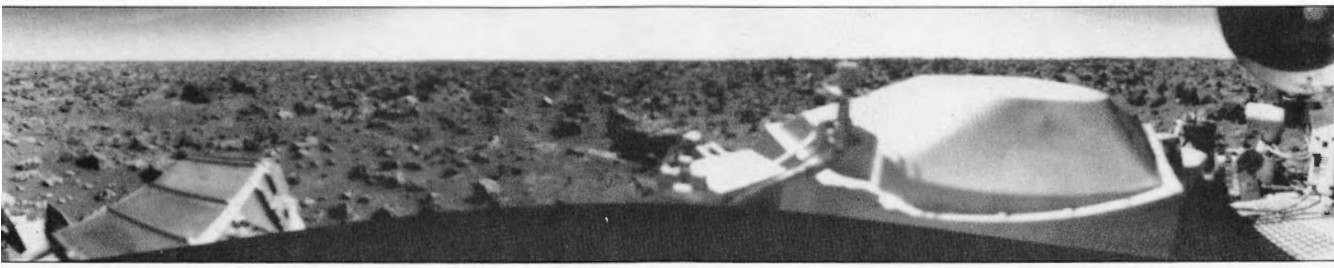
〝火星パトロール〟チームの偉業

最初の接近時に火星は六千三百六十八万キロメートルの距離内にやってきた。次に一九五六年、その惑星はわずか五千六百万キロメートルの所へきた。次回にそれほど接近するのは一九七一年となるが、そのときはＮＡＳＡが惑星の探査と判断を手中にしてしまう。

だが一九五四年に天文学界では興奮が高まった。世界的な〝火星パトロール〟を計画するために国際的な火星委員会が結成されたからである。十七国の一流科学者が世界最大級の天文台から望遠鏡観測を行なうことになった。火星は七月に最接近したからである。関係した国の中にはアメリカ、フランス、イタリア、トルコ、インド、日本、オーストラリア、南アフリカ、ジャワ、エジプト、アルゼンチンなどが含まれている。

この国際的な科学者チームは世界最高の火星専門家、Ｅ・Ｃ・スライファー博士が率いた。当時のローウェル天文台の台長である。彼と委員会のメンバーのほとんどは、それまでの火星に関する天文学上の記録をすべてよく知っていた。謎の雲、光斑、目立つ物、電波信号、運河と植物の存在の証拠などである。

火星に知的文明があることを個人的に信じている人もいた。というのは、一九三八年にローウェル天文台が運河システムに変化が生じる証拠を発見したし、その変化は設計によって変えられるように思われたからである。委員たちのなかには一九四七年以来広く報告されてきた多数の空飛ぶ円盤目撃を、火星にたいしてまたも起こってきた強



▲1976年9月3日，バイキング2号着陸体が火星北側のユートピア・プラニシア平原に着陸して撮影した2枚目の写真。これは30度回転して写したパノラマの光景を示している。

い関心熱と結びつけた人もいたことはまず間違いない。

政府はUFOの存在証拠を厳重に警戒していたので、国家安全保障局（訳注＝ホワイトハウスに直属する部門）は、〝火星パトロール〟の発展状況を追跡するため、UFO問題の影響を利用することに最重点をおいたのである。火星に関する推測と新聞の声明は完全に不明瞭な状態にしておくことが絶対に必要であった。検閲官たちは、そのパトロール計画に関係のある心の広い人たちの能力にかんがみて、〝火星パトロール〟に関しては特に関心があった。

彼らはUFOを目撃したことで記録文書に載っている気象学の専門家、セイモアー・ヘス博士、別な惑星群の生命について本物の関心をもっている一流の天体物理学者、ハロルド・C・ユーリー博士、先駆者パーシバル・ローウェルの志を継いでいたスライファー博士などを加えた。

スライファー博士はできる限り最良の場所から観測できるように自分で決めた。それは南アフリカのレイモント・ハッセイ天文台である。そこには南半球最大の屈折望遠鏡があったし、火星は衝（しょう）のあいだ毎夜頭上にくるのだ。スライファーは、もし自分が火星に生命の証拠を見つけたら世界中に公表するつもりだと公言した。

この火星探査では二万枚の写真が撮られて、運河と植物の存在が確証されたのである。運河（複数）は川のように全く曲がりくねっていなかった。それらは大きな円をなすコースをなしているが、これは球体上の二点間の最短距離である。多くの惑星天文学者は、かねてから次のように推測していた。つまり、運河群が大きな円状となっていることを写真類が示すならば、それらは知的生物の仕事であることを結論づけるだろうというのだ。

科学者連は例外的な写真類も撮っていた。なぜならローウェル天文台は新式の電子カメラを使用していたからで、これはかすかな物を拡大し、大気の乱流により細部がぼやけるのを防ぐために十分の一秒で撮影できたからである。ある運河は二千四百キロメートルに渡って矢のようにまっすぐに伸びているのが発見された。

スライファー博士は南アフリカから充分な写真類を持ち帰り、運河（複数）は実在し、人工的なものだと証明した。運河群のコースにそって豊富な植物の繁茂を示す一方、運河はさらに緑のオアシス同士のあいだのつなぎの役目をしていることも示した。

関連する距離を考えるならば、これは一つの複雑な注排水システムだとみなすのが唯一の説明になると思われた。最初の一週間で四十本以上の運河と十五個所のオアシスが撮影されている。

火星委員会の報告も妨害された

しかし火星委員会の報告は全く公表されず、そのため委員会のごく一部の人以外には知られなくなった。新しい発見事は各天文台で個人的に記録されただけで、限られた細目がわずかに二、三種類の天文誌にかろうじて掲載されたにすぎない。しかしこの報告に関するあらゆる事は新聞からしめ出されてしまった。

米政府の情報機関は、火星委員会が報告を公開することと新聞社に流そうとして当初計画していたことを妨げるのに成功した。続いて情報機関は火星に関する真実の知識情報（インフォメーション）を抹殺しようという計画を強力に遂行したのである。政府は世間に広まった意見を抑圧し続けることによって、それ自体をうまく管理している。民衆が感じやすい劇的な問題に対しては特にそうだ。火星に人間がいると言う国際的な科学者のチームによる声明を許せば、UFOが地球を訪れていることを政府が確証するのに等しいことになるだろう。したがって検閲官たちは自分らが何をやる必要があるかを心得ていた。

新聞社へ報告を提供させないために、火星観測プロジェクトを率いていた人たちに圧力がかけられた。天文学者連は五カ月間火星を調査したけれども、ただ一つの短い声明が最初に大衆へ伝

えられたにすぎない。スライファー博士は写真撮影によって火星表面にある新しい興味深い変化（複数）が観測されたと声明したのだが、そのあとは何も言わなかった。

これ以上の公開計画のすべては妨げられ、価値ある〝火星パトロール〟の報告書類は全く公開されなかったのである。出された釈明は次の分野に属するものだった。

「コミュニケーションと調整の困難。観測され写真に撮影された物に関する意見の不一致。数カ月の研究と再調査には適当な分析が必要、など」

政府の抑圧の手口

いったい米政府の秘密機関がこの種の、または他の種類の、劇的な知識情報のこのような抑圧を、どのようにして達成できるのだろうか？　どんな方法が用いられるかを各ケースごとに判断するのは困難だが、彼らの強力な説得工作が、協力が得られるまでエスカレートするのである。

たぶん秘密機関は、このような（火星に関する）知識情報は国の安全にかかわるとか、政府は確証された声明の社会的意義を最もうまく扱う信用のできる機関である、という立場で始めるのである。彼らは、大衆はこの知識情報に対して全く準備ができていないとか、世界もそれに対して準備できていないとほのめかす。経済もこの種の知識情報に対して準備ができていないと、ほのめかしたりする。彼らは大衆の考え方に激変が起こるのを恐れているのだ。ただし私はそれが考え方の〝向上〟になるだろうと確信しているのだが――。

彼らは大衆がパニックを起こすかもしれないと言うだろうし、火星から襲撃があるかもしれないからと弁明できるだろう。説得力ある反論の可能性は無限にあるけれども、唯一の最後的な必要条件は、惑星に関する証拠が決定的でなく、不明瞭で、議論の余地があるものとされることにある。

常におおやけに断言されてきたのは、銀河系の部分の、われわれから数光年も彼方なら別として、地球以外の惑星に知られているような生命は存在しないということである。その場合、距離は非常に大であるので、われわれの文明は決して接触しないだろう。

火星運河の大円形状コースの発見を含む重要な発見事を保留せよと説得された後、火星委員会は簡単な新聞発表を出したにすぎない。スライファー博士は火星は生きているという趣旨の声明を出した。これは確かに物事を曖昧に保つことを強要する検閲官たちを満足させた。しかし生きているとは、どのようにして生きているのだろう？　地質学的な火山活動や砂嵐、そして極冠の縮小などを意味するのか？　それとも知的な構造物という意味で生きているというのか？

スライファー博士は、火星の地形には色の変化があり、それは多年に渡る彼の以前の観測よりも興味深いものであることに気づいた。

しかしその短かい報告は基本的には無意味であり、明らかに大衆や科学界の意見に影響を与えなかった。火星に関する疑問はいまだにそのままになっているかもしれないが、人間は存在しないというオーソドックスの学説は、全然おびやかされなかったのである。

一九五四年の火星観測の注目すべき文書が公開されたのは、それから八年後である。それは『火星の写真による物語』と題する書物に掲載された。最近私はこの書を一冊入手した。その書はかなり少部数で、主として科学図書館向けの参考書として出されたのである。たしかにこんな高価な本を買う一般人はほとんどいないだろうし、買った人も関連する科学的なテーマを調べるために自分で利用するだけだろう。

しかし複雑な分析と慎重に表現された議論を徹底的に読むならば、解答類はそこにあるのだ。その書は一九六二年にスライファー博士によって書かれたもので、全文は五十年におよぶ望遠鏡観測と、世界最大クラスの天文台で撮影された数千枚の写真にもとづいている。結論もまた火星の環境に関して天文学による最大の大発見に言及している。

シントン博士も植物の存在を立証

一九五八年十一月の衝のあいだに、ウィリアム・シントン博士がスミソニアン天文台で研究を指導してきた。この科学者兼天文学者は火星の明るい砂漠地帯と暗緑色のオアシスの注意深い赤外線走査を行ない、太陽エネルギーが暗緑色地域で、ある周波数でもって吸収されるけれども、砂漠地帯ではそうでないことを発見したのである。

その吸収波長は三・四三、三・五六、三・六七ミクロンであった。これらはまさしく炭化水素化合物によって吸収されるのと同じ波長である。彼の研究は火星の広いオアシス地域に緑色植物が存在することを立証した。しかもそれが組織的に炭化水素化合物から成っていることも立証したのだ。これは地球の植物と同じである。

言い替えれば、彼の科学的根拠は火星の植物が地球で見られるのと同じ炭素サイクルにもとづいていることを示したのだ。

しかし新しい実験的な証拠はそう急速には受け入れられない。それは常にチャレンジされているし、うんと議論されるべき問題でもある。古い既成学説が変化するのは非常にむつかしいからだ。

古い学説は火星に感知し得るほどの水または空気は存在しないと予言して

いた。そして植物の生育にとって表面温度は極端すぎるとも言っていた。

運河存在の証拠もあまりに多くの含みを帯びていたので受け入れられず、既成学説と一致しないとしてきっぱりと拒絶されていた。

赤外線走査によるシントン博士の実験は決定的でないものとみなされたし、このような結果は何であれ、保守的な科学が立場を変える前に何度も確証される必要があった。科学界はむしろ未来の宇宙探査機が火星に関する疑問を解決するまで待つことを望んだのだ。科学的議論は、宇宙問題のあらゆる議論を先取りできるNASAと呼ばれる宇宙時代の官僚組織を政府が設立するまではお蔵入りの状態だった。

力を持たぬ哀れなNASA

惑星の状態に関して推測する自由な天文学の時代はまもなく終わった。権威的な役割をになって政府を代表する一方、NASAの立場はほとんど対抗しがたいものになった。

まずNASAは次の三つの機能を持った。

(1)地球を回る軌道に人工衛星を打ち上げること。

(2)人間を宇宙空間に送り出すこと。

(3)遠隔操作の宇宙探査機でもって月を含むわが太陽系の他の惑星群を探険すること。

右の(1)と(2)は見事に遂行され、人類は宇宙文明になるための入口に立った。しかし(3)はNASAが啓蒙の時代の方へわれわれの知識を促進しなかったのである。実際にはわれわれの宇宙時代の発達に苦々しい皮肉があるのだ。わが権威者たちは、実際の宇宙の発見事の歪曲と隠蔽によって、人間の考え方を〝暗黒時代〟にもどしたのである。

ずっと昔、地球は無知と迷信的な考え方のために太陽系の他の惑星群から孤立していた。二十世紀までに人間の知性は、進歩した文明世界は宇宙を旅し、地球に似たホーム惑星を持っていることを、理性的に理解し受け入れるほどに進歩してきた。

われわれがUFOと名づけている宇宙船で旅している宇宙の訪問者たちは、われわれが科学で技術的な十字路に達しつつあった同じ時期に、彼らの存在を知らせようとしていた。しかし軍人たちや軍人の機関のすべてはそれを否定し、検査官たちは宇宙船（UFO）だろうが惑星だろうが地球以外の生命存在の確証を許そうとはしなかった。ドアーはサイレンスグループによって閉ざされ、既得権は真実に対抗した。そしてNASAは明かりを消してしまった。

NASAは宇宙を、生命のない、何らの目的もない、面白くない荒地だと主張した。その最後的結果は、地球人類は極端に尊大な考え方に逆もどりし、自分自身の利己的な世界に孤立したのである。

もし権威者たちがバランスのとれた推測に対して二、三の疑問を開放してくれたら、危機を少なくすることは容易だろう。しかしそのかわりに彼らは断固として火星の完全に否定的な見解を打ち出すことを始めたのである。

火星の生きた環境は、UFO存在の証拠の隠蔽を補うために無制限に否定された。明白なのは、われわれの宇宙探査は最初から何かの目的をもって行なわれたのではないという点だ。政府の官僚組織であるNASAは、現代世界の最も強力な経済的勢力の手に役立つ以外、選択力を持たなかったのだ。NASAの検閲官たちはUFOとその発進地に関する絶えまなき隠蔽工作を要求した法人組織に協力したので、そのために惑星群の非現実的な概念をおおやけに提供したのである。

火星への最初の接近は一九六五年七月にマリナー4号によって達成された。この探査機は火星表面の二十二枚の写真を電波で送り返したが、NASAは当初そこに運河はないと主張した。何人かが終生をかけた望遠鏡観測による研究成果は、この一言で簡単に消されてしまった。レーダーによる掩蔽探査の結果、火星の大気の濃度は地球大気の一パーセント以下とNASAが宣言するための根拠を与えた。そして別な種類の信号は火星に磁場がないと専門家たちに言わせたのである。最接近時にマリナー4号は火星から九千六百キロ離れていたが、しかしNASAのスポークスマンは、探査の結果、火星の平均表面温度がマイナス華氏百七十度であることを示していると主張したのである。

検閲官たちは推測を押さえていたあの〝火星パトロール〟の時代のつらい時をすごしていたのかもしれないが、これは全くの新しい球技であった。NASAというのは地球以外の生命のない絵画を描くための完全な乗物だったのだ。アメリカの宇宙開発計画から出てくる声明類にだれが挑戦し得るだろう？　望遠鏡観測であろうとなかろうと、UFO問題であろうとなかろうと、だれも挑戦はできないのだ。

いまだに火星に知的生命が存在することを主張したい人はだれでも気違いだとみなされるだろう。

マリナー4号による接近は人間存在を現実に確証する能力を持たなかったのである。それだけは認めることができる。しかし同様にその宇宙探査機はまた、権威者たちによる単調な声明として出された火星の状態を実際に確証することもできなかったのだ。未来の惑星探査機によって、検閲がだれかによっていかに組織化されていたかが明らかになったのである。

本書が直面する本当の問題は、特にNASAではない。この宇宙開発機関

▶講演中の原著者ダニエル・ロス氏。昭和六十二年九月二十日、日本GAP総会にて（東京有楽町朝日ホール）。（撮影　松村芳之）

は、政府やその従属機関をコントロールしている強力な経済勢力の指令に従う以外、選択力を実際には持たなかったのだ。惑星に関するあらゆる検閲の背後にあったのは、こうした国際的な企業連合なのである。NASAは宇宙問題の公式発表に関する公式確認のできる歪め屋にすぎなかったのだ。

したがってNASAは宇宙探査機による調査を客観的に遂行する立場にいないのだと、ある程度は弁解できるのである。しかし偽りの価値は真実以外の何かによって替えられることはできない。われわれはつらい時代の十字路にいる。宇宙文明になるか、それとも核による絶滅かのどちらかだ。

だからNASAはその過去の行動に対してもっと責任を持たねばならない。実際の証拠を提供しなかったことの責任もだ。

しかしわれわれはNASAに対して少しは信用できる。というのは偶然か企みか、彼らは隣の惑星の環境の真相に関するわずかばかりの手がかりを洩らしたからだ。そしてわれわれの社会のある強力なメンバーたちが宇宙開発に創造的なアイデアと努力をついやし、いくらかの真相が現れたことに感謝してよい。

したがって次章はマリナーとバイキング宇宙探査機による火星の探査中に、NASAによって公表された火星の証拠を客観的に見ることにしよう。いかにしてNASAが天文学者連によって行なわれた初期の望遠鏡観測研究を確証しようとしたかについて、いくつかのパターンが見られるかもしれない。

広まっている不信にもかかわらず、一九七六年のバイキング計画は、火星の環境が実際地球に似ていることを示す確実な証拠を洩らしたのである。

（第四章完。以下次号）

訳者付記

今号の記事は火星観測の歴史における中期のスキアパレリ、ローウェルらの望遠鏡を主体にした眼視観測及び写真撮影の成果と、後期の惑星探査機の台頭に至る経緯に言及し、探査機がすべてを解決したかのように思い込んでいる大衆の覚醒を促すために米政府、特にNASAの実体や隠蔽工作に関して詳述してある。

マリナーとバイキングによる実際の探査状況、公表された写真類のトリックによる欺瞞などについては次号の第5章で詳細に興味深く解説してあるから期待されたい。

今回は時間の都合により連載第四回分を二日間で翻訳したため、拙速になって恐縮千万、実力不足を痛感する次第である。次回は余裕をもって挽回したい。

ロス氏からの連絡によると、この記事の原書は欧米のUFO研究界で大反響を起こしているという。

投稿欄 ユーコン広場

本誌100号発行を祝福

静岡市　野口敏治

UFOコンタクティー100号発行、おめでとうございます。

数十年間アダムスキー一筋に活躍してこられた先生の活動は、アダムスキー師同様、地球の歴史上でも大変価値ある奉仕活動であると思います。

日本でアダムスキー問題を紹介してくれる人がいなかったら、今の自分はどうなっていただろうと考えると背筋が寒くなってきます。本当にありがとうございました。これからもますますのご活躍をお祈り申し上げます。

（静岡支部代表）

薩摩会からの御挨拶

鹿児島市　曽我部勇人

毎日の気象報道からは日本列島を白銀色で覆うかのように寒気の流れが伝えられています。やがてこの寒気も去りゆき、山河のむこうより心躍る春の訪れの歌声が聞こえてきそうです。

今や各国のGAP活動はもちろん、日本にあっては久保田先生、そして各都道府県の珠玉のごとき諸先輩の方々に真に厚く衷心より敬意を表するものです。

今回東京本部にて現在のGAPの状況、経過等を把握させて頂きました。「泣いて馬謖を斬る」という故事がありますが、今の久保田先生の御心境は私達の計り知れぬ痛恨の極み以上のものと察するところです。このような流れの中に新しくGAP準支部の活動発足の御挨拶をさせて頂きますのは、いささかとも複雑な心境でもありますが、G・アダムスキー大師の偉大なる徳達がやっと私達の郷土に一条の光として届き、輝き、連なった喜びを満身に浴びる気持にも似て、連絡いたしたく、拙いペンを執るに至った次第です。

鹿児島という郷土は昨年の暮れに全国へテレビで放映されました歴史ドラマ「田原坂」の主舞台となった所です。きびしく平和人道的倫理性から考察しますと、血の通っている人間同士が武力を交える等の行ないは非宇宙的とも言えましょう。しかし幾分角度を変えますと、あらゆる理屈を超えて戦わざるを得なかった、いまだ宇宙的にも機の熟していなかった互いの壮烈なカルマの清算であったという歴史観にも通じてくるのです。当時の人々が郷土の繁栄と日本の将来を真剣に考え、毎日を真に誠実の中に生きていたという点から見ますと、現在の郷土の人々は何やら恥ずかしい思いです。

今世に縁あり、結集し、GAP活動に関与し、薩摩会の誕生に至るまで幾分の遅れはとりましたものの、火の国薩摩より私達は郷土の大先輩の真摯さを受け継ぎ、隼人達の心意気を見せてゆきたいと思っています。十三名の会員達です。

私達一人一人が高貴深遠なるG・アダムスキー大師の哲学を知らせる運動という宇宙大使級の大責任を認識しているものと自負しています。千里の道も一歩からとありますように、あせらず足もとを一歩一歩確実に踏み固め、全身全霊でもって目標に向かって前進する志を持つものです。今日に至るまで大師アダムスキーの御遺徳を受け継がれ、全国の真摯純粋なる会員の憧憬の的としてたくましく啓蒙活動を続けておられる久保田八郎先生、ほんとうに有難うございます。薩摩会会員一同改めてここにGAPの栄光ある高貴なる前途を祈念して薩摩会発足の御挨拶とさせて頂きます。（薩摩会副代表）

世界一のアダムスキー哲学

鹿児島市　今林英明

もう三月、春もすぐそこまでせまり、生命の新しい息吹きで万物が光り輝く季節です。南国の鹿児島でも連日氷が張るほどの寒い日もありましたが、ようやく春の気配が感じられ、心も体も新鮮になっていくような感じがします。

昨年の暮、準支部として薩摩会が発足し、メンバーはいまだ多くありませんが、素晴らしい方ばかりで、「やっぱりGAP会員はすごかなあ。アダムスキー哲学は世界一じゃっどなあ」と感嘆してしまうほどでした。やはりレベルの高い人同士が集まる所には高貴な波動が流れているのだということがよくわかりました。

さて、なぜこの手紙を書いたのかといいますと、久保田先生をはじめ多くのアダムスキー哲学に貢献している方々に感謝するためなのです。なんのことはない、ただそれだけのことですが、神の愛に対して最も近い想念にはやはり感謝の念があると思います。心が暖まり万物を理解することができる素晴らしい想念だと思います。より以上に神すなわち大宇宙の意識と一体化するために忘れてはならないことであると思います。わずか二枚ばかりの文章ですが、久保田先生の少しでも精神的な助けになることを願います。薩摩の私から東京の私へ。（ラサール高校生）

頑張れ、Uコン！

東京　小島岩男

ぼくは都内立川の駅ビルの本屋さんにUコンを卸させてもらっているのですが、ほとんどいつも売り切れてしまうので内心とても喜んでいます。やってみてよかったなと最近思い始めました。

このあいだ雑誌担当の店員さんが、Uコンがいまこの手の雑誌のなかでピカイチなこと、表紙の絵がとても明るいことなど、とてもほめてくれました。本物のマイナーはにせものメイジャーよりも強いというところでしょうか。

それと同時に、人間ってやっぱりにせものなんかでは一時的にはいいかもしれないけど、本物でしか幸福にはなれないんだな、などと哲学してしまいました。それに、それが本物であるかないかは、それ自身が証明してくれるということです。

ぼくもむなしい流行の世界で生きるより、自分も他人も幸せな気持にしてくれるようなむなしくない世界でこれからも生きたいと思っています。地球が幸せになりますように。

私の心の調整法

東京　岡田　基

毎月東京月例会に出席させて頂きましてありがとうございます。素晴らしいお話をお聞きすることができまして大変うれしいです。幸せです。

心が高揚しているときにふっと湧いてきた心の調整法について書こうと思います。

目、耳、鼻、口の感覚器官を人間にたとえて、それぞれイメージします。それからその四人の人々が向かい合って円を作ります。みんなで右手を出してまん中で組みます。ファイト、オウ、ファイト、オウと言って掛け声をかけ合います。「互いに尊敬し合おう、外界の人々に対して非難攻撃をするのはやめよう、宇宙的な方向に向かって努力しよう」などと彼らは話し合っています。最後に彼らは持ち場に帰って解散します。

このようにイメージしますと、心はむやみに騒がなくなります。ちょっと面白いことだなと思い報告したしだいです。

私はまだ宇宙的になりきっていない人間です。進歩向上をめざしましてこれからも努力していきますのでよろしくお願いします。

希望と楽しさに満ちたこの頃

千葉市　中里信彦

昨年十二月にアダムスキー師のアーリントン墓地の素晴らしい写真を先生より送って頂き心から感謝しています。以前に送って頂いたアダムスキー師の左手を挙げて笑顔で立っている写真も私の机の前に立てて毎日見ています。私がこうやって毎日

◀「坊やも元気です」神奈川県の会員・青木(旧姓・穴原)美智子さんより。

やっていられるのは久保田先生はじめ、友星人と親しくして頂いているGAP会員の方々のおかげです。先生のおかげで素晴らしい全集を手に入れることができましたし、家族で毎月GAPの東京月例会で勉強もできます。

以前はただの憧(あこが)れや夢にすぎなかった物事が少しずつですが実現していますし、失望が希望に、苦悩が楽しさに変わってゆくのを体験させて頂いています。GAPの会員になったからといって十数年間すべてスムーズにやってこられたわけではありませんが、それでもこの頃は何か前向きに取り組む姿勢というものが以前とは大分違ってきていると感じられるようになっています。

私のすべてが宇宙的な人間になるにはまだまだ相当な年数がかかるでしょうけれども、いつかは他の進歩した惑星にも進級できるでしょう。そのためにも勉強を続けるつもりでいます。これからもますます元気で御活躍されることを願っています。Uコンの100号達成もおめでとうございます。今年の総会も非常に楽しみにしています。それに毎月の月例会もとても楽しみです。お体大切に頑張って下さい。

素晴らしかった長野支部大会

東京　伊東芳和

第二回長野支部大会に出席させて頂き有難うございます。初めての長野行きなので上野を出発したときよりどのような所か楽しみにしておりました。そして前日の睡眠不足も忘れ、車窓に流れる景色に絶対この支部大会は成功するということと、UFOが現れるというイメージを思い浮かべました。

支部大会は清水南氏の体験講演で始まりましたが、「職場で家庭で起こるさまざまな問題は、自分にとって必要な事ということで解決しなくてはならない。そして自分とか他人とか分け隔てることなく処し、小言を言われたときはまだ自分が未熟なのだ」という人生哲学は、私の心に痛く突き刺さるようで身につまされました。まだまだ自分は努力不足だということを実感致しました。

続いて行なわれた久保田先生の直感力の重要さを説いた講演は迫力を持って私の方に迫ってまいりました。「現在の地球人は、知力のみで生きることしか考えていない。大切なのは直感力つまりテレパシーを身につけることで、それによってのみ発展することができる。アダムスキー氏は『地球人のこれまでの生き方を変え、テレパシックな感知力を持つようにしなさい』とオーソン氏から教えられた」との話は、あらためて私たち一人一人にとって最重要課題を語りかけるものでした。知力でしか生きることのできない地球人は十字架を背負っているようなものです。テレパシーで表現できることはすべての道に通じる純粋の道です。

先生の話はいつも純粋で琴線に触れるものばかりです。そのたびに停滞どころか後退しがちな私は、これではいけないと弱気になりがちな自分にハッパをかけております。

翌日の名所旧跡見学は終日晴れわたり、下り坂になるとの天気予報は見事に外れました。善光寺めぐりから観光はスタートしましたが、その善光寺からバスが次の目的地に移動し、まもなく左側に座っていた私の左のビルの上空に光る金属性の物体を見つけました。ゆっくりした動きだったので遠くを飛んでいる飛行機かなと思い、双眼鏡を覗くと、それには翼がなく、卵を立てた形の物体が見えました。

卵形の物体の中央部が輝いており、ときおり点滅していました。当初長野市上空に現れたと思っていましたが、今考えますと市を外れた所に現れたようです。肉眼では二、三秒、その後双眼鏡を目にあてて十秒ぐらい見ていましたが、降下する形で手前の電線（双眼鏡ではかなり太く見える）の二本の間に入り消えてしまいました。

しかし初めて外観のわかるUFOを見たという印象でした。この光る物体は長野支部代表の博田さんとバスの後方で見ていたのですが、他の方も目撃されたようです。私はどういうわけかUFOらしい動きのある物はあまり見ることはなく、今回のようなゆったりした動きや止まっている物体を見たので、すぐにはUFOだというフィーリングが湧いてこないのです。しかし後に状況を考え合わせると、UFO以外には考えられないのです。このようにGAP活動はスペース・ブラザーズから注目されていることは間違いなく、私自身ももっと自覚を持たねばと痛感した次第です。

最後に、素晴らしい講演を拝聴させて下さった久保田先生、清水さん、本当に有難うございました。またこの支部大会のために尽くして頂いた謙虚な長野支部代表の博田さん、名アシスタントで副代表の中村さんをはじめ支部会員の皆様には心から感謝申し上げます。楽しい二日間でした。

考えさせられたUコン100号

神奈川県　富岡設子

このたびはUコン100号達成、おめでとうございます。100号にふさわしく内容も濃くて大変興味深く読ませて頂きました。特にダニエル・ロス氏による連載記事は説得力があり素晴らしいものでした。その中にセドリック・アリンガムについて書かれてありましたが、最近書店で目を通した雑誌に、彼の著書「火星から来た空飛ぶ円盤」はイギリスの天文学者パトリック・ムーアが偽名を使って出したものだというようなことが載っていましたが、これは事実なのでしょうか。折を見てご教示頂ければ幸いに存じます（編注＝これはデマです）。

それから遠藤氏の書かれたUFO観測のお話はワクワクしながら読ませて頂きました。観測には想念のコントロールがとても重要であるというお話は大変参考になりました。また安藤氏の海外研修旅行の感想文にはとても考えさせられるものがあり、感動さえ覚えた次第です。私も視覚に振りまわされるばかりでなく、感じることのできる旅をしたいとつくづく思いました。また、余計なことに振りまわされず高貴な波動を感じることで、どれだけ救われた気持になったか、そして自分を成長させることにつながったかなど、本当に感心してしまいました。

今回のUコン100号は全体を通して実に考えさせられるものが多く、先生をはじめ記事を書かれた方々に心より感謝を申し上げる次第です。

鹿児島にもア哲学の輪を

鹿児島市　曽我部くみ子

先日十二月六日に月例研究会としての薩摩会が無事に行なわれました。鶴田さん、兄（曽我部勇人氏）、私を含めて十人集まることができました。遠く種子島から参加された方もいらして感激致しました。御挨拶が後先になりまして申し訳ありませんが、今回は本当に有難うございました。鶴田さんに頼りっぱなしだったのですが、第一回の会合ということで全員自己紹介から始まり、いろんな体験を話されたり、なんとか無事に終了することが出来ました。

鹿児島にもアダムスキー哲学の輪を広げる場が出来たというのは信じられぬ思いですが、毎回参加して学んでいこうと思います。毎月の第四日曜日が待ちどおしいところです。

今年前半は私にとってレッスンの期間でしたけれど、過ぎ去ってしまえばまるで夢のようです。常に明るい気持とプラスの想念をもって進んでいこうと思います。これからもよろしくご指導下さいませ。

計画変更！

日本GAP海外研修旅行10周年記念
――企画第10回――

エジプト・イタリアの旅

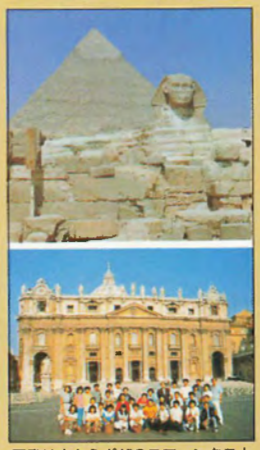
――地上最大の謎の遺跡と，偉大な先覚者の足跡を訪ねて――

■旅行期間　昭和63年8月3日より14日まで12日間
■参加費用　**¥598,000**（24回分割払い可。変動があるかもしれませんのでお含みおき下さい）
■定　　員　30名

先号までの予告では「エジプト・イスラエル・イタリアの旅」と発表しましたが，近来イスラエル国内のパレスチナ人による抵抗事件頻発を考慮し，慎重を期してイスラエルを除外し，その分2カ国をたっぷり視察することにしました。ご了承ください。

日本ＧＡＰは，昭和54年８月に第１回海外研修旅行を実施して以来，世界各地の謎に包まれた古代の遺跡を主体に異国の風物を視察してきましたが，これは宇宙的視野を拡大するにはまず私たちのホーム惑星地球の再発見が必要であるという見地にもとづくもので，すでにエジプトをはじめ中近東，ヨーロッパ各国，インド，北米，中南米各国にわたる壮大なスケールの旅行を毎年敢行し，多大の成果をあげてまいりました。参加人員は延べ500名に達していますが，毎年の旅行で全くトラブルが発生することなく全員無事に帰国しています。63年度は海外研修10周年記念として，下記のようなスケジュールで豪華な旅を企画しました。見学地はすでに何度も現地を訪れたベテランの田中正（ワールドセブントラベル社役員・日本ＧＡＰ東京本部役員）と久保田八郎（日本ＧＡＰ会長・毎年旅行団長）の２人が練りに練って立案した最高の手作りのコースです。未経験の方，すでに見学済の方も，家族的雰囲気に満ちた素晴らしいＧＡＰの海外旅行を満喫して下さい。非会員の方も参加できます。

	年月日	曜日	場所	時間	交通機関	摘要
1	1988年 8月3日	水	成田発 ローマ着	11:00 17:45	アリタリア航空 1785便（予定）	モスクワ経由一路ローマへ。 （ローマ泊）
2	8月4日	木	ローマ発 カイロ着	17:10 20:20	アリタリア航空 898便	（または892便で12:30発/15:40カイロ着） 898便の場合はローマ市内見学。 （カイロ泊）
3	8月5日	金	カイロ滞在		専用バス	午前中，国立博物館を見学。午後は夕方までギザの千古の謎を秘めた３大ピラミッド，スフィンクス等を見学。夜はピラミッドの光と音のショーを見学。 （カイロ泊）
4	8月6日	土	カイロ発 アスワン アブシンベル アスワン着	午前 夕方	航空機	アブシンベルの大神殿と小神殿を見学し，空路アスワン着後，アスワンハイダム，古代の石切り場などを見学。 （アスワン泊）
5	8月7日	日	アスワン発 ルクソール着	午前 午前	航空機	ルクソール着後，メムノンの巨像，ハトシェプスト女王葬祭殿，王家の谷のツタンカーメン王墳墓，その他を見学。 （ルクソール泊）
6	8月8日	月	ルクソール発 カイロ着	夕方 夜	航空機	カルナック神殿，ルクソール神殿などを見学。 （カイロ泊）
7	8月9日	火	カイロ滞在			終日自由行動（カイロ市内またはギザのピラミッド等を各自自由に見学） （カイロ泊）
8	8月10日	水	カイロ発 ローマ着 〃　発 アッシジ着	08:00 11:30 午後 夕方	アリタリア航空 899便	ローマ着後，専用バスにてアッシジへ。 （アッシジ泊）
9	8月11日	木	アッシジ発 ローマ着	夕方 夜	専用バス	アッシジ着後，小鳥と語り合ったという聖フランチェスコをまつる大寺院その他を見学。 （ローマ泊）
10	8月12日	金	ローマ滞在		専用バス	雄大なサン・ピエトロ大寺院，スペイン広場，トレビの泉，コロセウム，フォロロマーノ，その他の遺跡を見学。 （ローマ泊）
11	8月13日	土	ローマ発	12:25	アリタリア航空 1786便（予定）	一路帰国の途に。 （機内泊）
12	8月14日	日	成田着	09:30		着後解散。



写真は上からギザのスフィンクスとピラミッド，サンピエトロ大寺院。

■今回は２カ国を回る旅行になります。イタリアのアリタリア航空ジャンボ機でまずローマへ入り，次にエジプト，最後はイタリアという順序になります。特にイタリアはローマ以外に聖フランチェスコのゆかりの美しい町アッシジを訪れます。いずれの国も現地在住の日本人ガイドつき。
■毎日３食付き。24回払いのローンでも行けます（毎月約¥27,000払い）。非GAP会員でも参加可。
■詳細については下記へハガキで案内書をお申し込み下さい。

〒150 東京都渋谷区東3-24-9
サンイーストビル２Ｆ
ワールドセブントラベル株式会社　田中正（宛）
☎(03)499-2461
日・祝・夜間は（0474)77-4728（田中自宅）へ。

企画：日本GAP／主催：株式会社日本旅行（運輸大臣登録一般旅行業第2号）／販売：旅行代理店 ワールドセブントラベル株式会社（運輸大臣登録旅行業代理店業1957号）

★EGYPT & ITALY★

本誌バックナンバー掲載記事目録

※印は絶版。在庫なし。お申し込みの際は郵便振替にて日本GAP宛ご送金下さい。バックナンバーに限り送料は不要です。No.83以前の古い号も若干あります。お問い合わせ下さい。

No.100　昭和63年1月25日発行　¥900

UFO問題とアダムスキー――久保田八郎
富士山二合目から目撃したUFO――遠藤昭則
私はこうして超能力を開発した――坂本正廣
アメリカの不思議な土地――水野和彦
UFO-宇宙からの完全な証拠③――ダニエル・ロス

No.99　昭和62年10月25日発行　¥700

UFO-宇宙からの完全な証拠②――ダニエル・ロス
山中湖畔で空中を飛んだ自動車！――清水　南
富士山にUFOが大挙出現――清水敏恵
〈写真〉大分市上空のUFO――
アダムスキーの大地とマヤの国へ――久保田八郎

No.98　昭和62年7月20日発行　¥700

木星の衛星イオに古代都市跡を発見！――
UFO-宇宙からの完全な証拠①――ダニエル・ロス
静岡市上空にUFO頻繁に出現――遠藤昭則
太陽系惑星にまだ仲間がいる？――
連夜のテレパシー送信に応じて出現した円盤――片岡　豊
万物の実体と想念の重要性――知念清邦
私は別な惑星へ行ってきた！（最終回）――春川正一

No.97　昭和62年4月20日発行　¥700

驚異の「生命の科学」と円盤大接近――伊藤達夫
八王子市でUFOを撮影――降籏和彦
別な惑星の偉大な人類と文明――G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた！④――春川正一

No.96　昭和62年1月20日発行　¥700

私のオーラ透視とテレパシー現象――清水　南
京都市上空にUFO５回出現――久保田八郎
想念放射、透視、UFO目撃――遠藤昭則
UFOと心霊は無関係――G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた！③――春川正一

※No.95　昭和61年10月20日発行　¥700

茨城県千代田村のUFO――日本GAP茨城支部
アダムスキー問題に対する考察――内田格男
私のUFO目撃と不思議な体験――中嶋順子
ジャンボジェットに並行して飛んだ円盤――久保田八郎
私の別惑星訪問体験とアダムスキーの真実性――春川正一

※No.94　昭和61年7月20日発行　¥700

テレパシーで飛来した真っ黒い円盤――堀江健一
八丈富士山麓でUFOを撮影――谷口美雄
地球を救う愛の想念放射運動――山崎清美
母船の周囲には人工大気層がある――G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた！②――春川正一

※No.93　昭和61年4月20日発行　¥700

月面にいた２機のUFO！――
超低空に出現した大型円盤と黒い人影！――笠原弘可
私も光体を見た――伊藤達夫
多くの館――G.アダムスキー
質疑応答――G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた！①――春川正一

No.92　昭和61年1月20日発行　¥700

偉大な惑星から来た兄弟たち――野口敏治
サン・ピエトロ大寺院の異星人――久保田八郎
米トップ科学者、UFO墜落の事実を認める――ゴードン・クレイトン
質疑応答――G.アダムスキー
地球の哲学と宇宙哲学の相違（完）――松原眞弓

※No.91　昭和60年10月20日発行　¥700

円盤に乗った日本人少年――伊藤達夫
ブラジル人教授の円盤搭乗事件――
質疑応答――G.アダムスキー
太陽系の惑星に知的生物が存在!?――
地球の哲学と宇宙哲学の相違②――松原眞弓

No.90　昭和60年7月20日発行　¥700

朝霧高原の不思議な"月"――伊藤達夫
旭川にも月擬装UFO出現――石川晴道
尾道市に出現したアダムスキー型円盤と母船――
ムーンゲート第14章（完）――ウィリアム・L・ブライアン
アダムスキー問題の真実性と宇宙哲学実践法――久保田八郎

※No.89　昭和60年4月20日発行　¥700

八ヶ岳に出現した円盤――秋山京子
富士山麓にUFO頻出――高梨和明
金星文字解読研究――遠藤昭則
ノアの箱舟とアブラハム――久保田八郎
アステロイド帯と月のクレーター――ウィリアム・L・ブライアン

※No.88　昭和60年1月20日発行　¥700

驚異の高松市円盤降下事件！――伊藤達夫
人工衛星による写真と地球上の異様な発見物――ウィリアム・L・ブライアン
米政府はUFO問題の真相を公開せよ――ダニエル・ロス
太田市上空に頻出するUFO――久保寺信一
不思議な予知夢の実現――内藤重雄
テレパシー開発基礎トレーニング――久保田八郎

No.87　昭和59年10月20日発行　¥700

月と地球は空洞のコアをもつ天体か――ウィリアム・L・ブライアン
宇宙から来る訪問者たちは地球人を指導しようとする――ジェニー・アベ
絶対に真実であったアダムスキーの体験――遠藤昭則
丸窓の並んだ母船が出現！――後藤澄子
二十一世紀の地球――松原眞弓
異星人イエスの足跡を訪ねて――久保田八郎

※No.86　昭和59年7月20日発行　¥700

月には濃密な大気と強い引力がある――ウィリアム・L・ブライアン
超低空で接近したアダムスキー型円盤！――遠藤昭則
山腹に着陸した巨大な円盤!?――清水　南
アダムスキー型円盤、超低空で出現！――清水　正
テレパシーと透視②――久保田八郎

No.85　昭和59年4月20日発行　¥700

宇宙飛行士の月面の演技!?――ウィリアム・L・ブライアン
沖縄のUFO事件――新里義雄
テレパシー送信と奇跡的治癒――鈴木謙次郎
ある不思議な一夜――十菱　麟
テレパシーと透視――久保田八郎

※No.84　昭和59年1月20日発行　¥700

月の引力は1/6ではない！――ウイリアム．L．ブライアン
私のUFO目撃とGAP活動――石川公一
スペース・ブラザーズは注目している――伊藤達夫
UFO問題とサイレンス・グループ――イブ・ラウルント
奇跡を起こす驚異のイメージ法――久保田八郎

※No.83　昭和58年10月20日発行　¥700

NASAは真相を隠していた！――ウィリアム．L．ブライアン
人体オーラと人間の発達度――遠藤昭則
転生とカルマ②――久保田八郎
〈UFO目撃報告〉UFO CONTACT――
異星人イエスの大地へ――久保田八郎

宇宙の広場へ集まろう！

〈予告〉昭和63年度地方支部大会〈その1〉

	第9回 仙台・山形合同支部大会	第2回 秋田・青森合同支部大会	第7回 旭川・札幌合同支部大会
日時	5月3日（祝） 午後1:00→5:00	6月5日（日） 午後1:→5:00	6月26日（日） 午後1:00→5:00
会場と交通	「仙台市農協会館」2F会議室 ☎022-297-5311 仙台市東7番丁122 ※仙台駅東口から徒歩3分。	「アキタパークホテル」2Fシルバー B ☎0188-62-1515 秋田市山王4-5-10 ※秋田駅前から中央交通バスまたは市営交通バスで県庁，市役所径由，約10分。バス停「市立体育館前」下車，徒歩約3分。	「旭川ターミナルホテル」6F ☎0166-24-0111 北海道旭川市宮下通り7丁目 ※旭川駅直結。
会費	¥2,000(希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。カラーグランドキャビネ判。送料共)	左に同じ。	左に同じ。
プログラム	司会　柴田文子 1:00 支部代表挨拶　笠原弘可 柴田光明 1:15 講演「ＵＦＯ問題と偉大なアダムスキー哲学」日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生 2:30 全員記念撮影・休憩 3:00 全員自己紹介・意見発表・質疑応答 5:00 閉会 ※今年は杜の都仙台の新緑に包まれた清新な雰囲気の中で高次元な大会を開催致します。久保田先生を囲んで話し合いに徹する予定です。珍しい話も出そうですから，多数ご来場下さい。	司会　菅原正人 1:00 支部代表挨拶　伊藤正治 田村嘉彦 1:15 会員体験講演「ＵＦＯとの出会い」坂本茂子 1:35 休憩 1:40 講演「アダムスキー哲学の生かし方」日本GAP会長・久保田八郎先生 3:00 全員記念撮影・休憩 3:30 全員自己紹介・質疑応答 5:00 閉会 ※会員一同大変張り切っております。青森支部との合同ですのでパワーもアップ！全員でイメージしております。どうかよろしくお願いします。**(本誌先号予告の会場を上記パークホテルに変更しました)**	司会　氏家(旧姓山内)裕里子 1:00 支部代表挨拶　川上三秀 高野省志 1:15 支部会員体験講演 伊藤重信 1:45 講演「アダムスキーが今世紀最大の偉人である理由」日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生 3:00 全員自己紹介・質疑応答 5:00 閉会 ※初夏の旭川の光り輝く太陽の生命の息吹き溢れる中で久保田先生より大宇宙の真理を学びとろうではありませんか。シンプルなセミナーを目指します。両支部一同心からお待ち致しております。
夕食会	大会終了後6:00より8:00まで下記の場所で開催します。 会費¥5,500 会場＝「仙台第2ワシントンホテル」 2F「オリーブの間」 仙台市大町2丁目3-1 ☎022-222-2111 ※仙台駅前青葉通りをまっすぐ下って徒歩15分，車で5分。仙台市農協会館からは徒歩20分，車で5分。 ※2次会＝ワシントンホテル内の「三十三間堂」という居酒屋で¥2,000程度の会費で開きます。	大会終了後6:00より希望者による夕食会を下記の場所で開催します。 会費¥5,000程度 会場＝「アキタパーグホテル」 秋田市山王4-5-10 ☎0188-62-1515	大会終了後6:00より希望者による夕食会を同じホテルの別の間で開催します。 会費¥5,000
宿舎	「仙台第1ワシントンホテル」(夕食会場の隣のホテル)を斡旋します。 仙台市大町2丁目3-1 ☎022-222-2111 シングル ¥ 5,750（税サ込） ツイン ¥11,500（ 〃 ）	「アキタパークホテル」を斡旋します。 シングル ¥5,200（税サ込）20室 ツイン ¥9,500（ 〃 ） 5室	「ワシントンホテル」を斡旋します。 ※会場より3分。 シングル ¥5,000（税サ込） ツイン ¥8,200（ 〃 ）
申込	大会，夕食会，宿舎，観光の申込はハガキにいずれかを記して5月2日までに下記へお申込下さい(電話でも可)。 ただし宿舎申込は4月25日まで。 〒983仙台市五輪1丁目16-14-306 笠原弘可 ☎022-295-0725	大会，夕食会，宿舎，観光の申込は電話かハガキで5月末日までに下記へ。 〒010秋田市山王新町15-4 伊藤正治 ☎0188-62-2831	大会，夕食会，宿舎，観光の申込はハガキにいずれかを記して6月25日までに下記へお申込下さい(電話でも可)。 〒070北海道旭川市神楽6条8丁目432-22 川上三秀 ☎0166-61-0044
観光	大会翌日は中型観光バスをチャーターして「青葉の蔵王エコーライン周遊」を実施し，蔵王山へ登り，有名なおカマを見ます。 参加費¥2,000程度（昼食代別）	大会翌日は希望者で「涙を流すマリア様」を見学して，仁別国民の森で名物キリタンポを食べながら森林浴を行ないます（午前9:00→午後3:00)。 参加費¥500	大会翌日は希望者で上川アイヌ記念館，嵐山北方野草園，わが国最北の旭山動物園の見学を予定しています。出発9:00→解散2:00（旭川駅)。 参加費¥3,000（昼食代共）
備考	5月は支部大会のため両支部共月例会を中止。	6月の月例会は両支部共予定通り実施。	6月は支部大会のため，旭川支部月例会は中止。札幌支部は月例会を開催。

ジョージ・アダムスキー全集

久保田八郎訳　全8巻　B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必読の名著です。

1 宇宙からの訪問者

三三八頁　二五〇〇円

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。一九五二年十一月二十日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会見した体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第I部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実録を第II部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

2 UFO問題の真相

二六二頁　二五〇〇円

第1巻の補遺的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係を述べた箇所は重要である。第II部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの妨害が克明に描写されている。

3 UFOとアダムスキー

三五〇頁　二五〇〇円

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第I部「死と空間を超えて」が圧巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたほう大な情報と書簡類を収録して第II部とした。

4 宇宙哲学

一四八頁　一三〇〇円

人間のセンス・マインド(肉体の心)と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理路整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

5 テレパシー開発法

一九〇頁　一八〇〇円

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の四官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシックな印象を感受する方法を詳しく解説し、他人と無言の会話を行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

6 生命の科学

二〇五頁　一八〇〇円

アダムスキーが他界する数年前に出したLife Science of Life と題する十二分冊の講座を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

7 アダムスキー論説集

三七〇頁　二五〇〇円

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が圧巻。第II部にはアダムスキー研究家として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

8 質疑応答集

二一六頁　二〇〇〇円

アダムスキーは一九五八年に質疑応答集を自費出版で頒布した。五分冊から成る小冊子で、全部で百問の質問と回答が収録してある。内容は現在の混迷した世界のUFO研究界に的確な解答と示唆を与えるものとして驚くほど新鮮である。これで本全集はア氏の重要な文献すべてを網羅した。

発行所宛直接注文の場合に限り、左記のように定価・送料をサービスいたします。(郵便振替または現金書留でご注文下さい。)

☆一冊注文――↓送料無料。書籍代のみご送金下さい。
☆第一巻より第四巻まで一括注文(正価八八〇〇円)　↓特別セット価格八〇〇〇円(送料共)
☆第五巻より第八巻まで一括注文(正価八一〇〇円)　↓特別セット価格七三〇〇円(送料共)
☆第一巻より第八巻まで一括注文(正価一六九〇〇〇円)　↓全巻セット価格一四七〇〇〇円(送料共)

■申込先▶文久書林　〒113 東京都文京区西方1-19-10 西方ハウス2F　☎(03)813-9561　振替/東京4-2521　日本GAPでは取り扱いません

英文版「UFOcontactee」第4号刊行中

■わが国最大のUFO研究団体「日本GAP」はかねてから英文版Uコンを発行しているが，今年1月に第4号が出た。日本語版Uコン第93号に撮載した春川正一氏の「私は別な惑星へ行ってきた！」の英訳連載第1回分は英文版第3号に掲載されたが，これは海外のUFO研究界で大反響を起こし，特に西ドイツUFO研究会（カール・ファイト氏主宰）は機関誌「UFOナハリヒテン」307号(昨年11月発行)に，Uコンの英文版第3号の記事を全文独訳して掲載，ヨーロッパUFO研究界で大旋風をまき起こしている。

■第4号も「私は別な惑星へ行ってきた！」の日本語版94号に掲載した記事を久保田会長が英訳し，教養の高い米人インフォーマントが監修した格調高い英文。会長みずからプロ用大型電子英文タイプライターを駆使して版下を作成。1字1句に至るまで会長が情熱を傾けて作った国際的文献。他に有益な記事も掲載。英語学習用にも好適。発行部数が少ないため少々割高なるも稀少価値の高い資料。

B5版　12頁　上質紙使用　¥400（送料¥170，3冊まで¥240，10冊まで¥350）注文は郵便振替で日本GAP宛にどうぞ（振替・東京4—35912)。切手代用も歓迎。その場合は¥200以下の切手をご使用下さい。

GAP-JAPAN NEWSLETTER International Edition

UFO contactee

UFOs & Cosmic Philosophy Services　No.4 JANUARY 1988

A Young Japanese Man Visits Other Planets [Part 2]　By Hachiro Kubota

[Continued from No.3 issue]

Kubota: To become a regular contactee, do we have to be a psychic such as a telepathist or clairvoyant or a man who has a power of healing, sure?

Hanakawa: Well, it is said that the fate of an ascetic devotee is defined to be schizoid. So a telepathist has to take care because his telepathy sometimes goes wrong and he becomes insane. When I contacted living on a planet with such low frequencies have no strong a power of telepathy, they are unable to bear the burden. I met some Japanese contactees who complained that they could not live their daily lives easily.

Generally speaking, you have to train hard in order to become an excellent telepathist. Some unfortunate psychics are sometimes killed in automobile accidents or by medicinal poisoning. They are from malignant diseases, and even kill themselves. Therefore, in order to develop telepathy, I thought these might be a method to acquire the ability without all the hardship.

I have been trying to find a good method by studying the ancient Japanese Shinto, Taoism, primitive Christianity, Zoroastrianism, Taoism, and so on. Space people have helped me with it, too. I finally found a basic method to develop the power of mental telepathy to a certain extent. But there is an important point. Although it is easy for you to develop the ability of telepathy, it is important for you to have a high performance switch in your mind. If your power of telepathy becomes too strong, the switch will not work. Then you will eventually be mad.

To Contact Space People is Hard Work

There are two types of UFO researchers. The first type is a man who contacts space People, and the other is man who does not contact them. To contact them requires hard work. What is more, the contactee will begin to have some trouble mentally. Because the planets have a tremendous civilization beyond description, he will have a very strong sense of emptiness after he has returned to Earth. Space People know the situation well and encourage the contactee by saying "Go to it! You must live on Earth!" Few of the contactees seem aboard their mother ship become good for nothing after such an extreme experience.

Now, I will return to the story of man's inner-natural power. A man who can see pain or possess the memories of his own past lives has a kind of strong ability. In addition, so, if he goes in the wrong direction he is liable to lose his senses. Therefore, the man needs to be guided by others. This could also be said for a contactee, and one who contactees sometimes work together in order to protect themselves against failing. I think a contactee is a person of skeptical disposition at heart. Space People emphasized it and said, "If you did not see our ships to such an extent, you would not have believed them. That is why we had to show you our space ships and mother ships."

But first a man must develop the power of mental telepathy. Anyone should be able to have enough power of telepathy or clairvoyance by having a good feeling or emotion. You should always have a positive way of thinking as much as possible and ignore the negative ones. The positive way of thinking means that "I am sure everything is going well with me", and the negative one

昭和63年度

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第2土曜日　午後1:30→6:00 ※8月のみは第4土曜日の27日に開催し、会場も皇居北の丸公園内科学技術館に変更します。	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。ＪＲ「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。 連絡先＝日本GAP本部　☎03-651-0958	会場費 ¥500 セミナー受講料 ¥1000 計¥1500	1:30→2:10 会員による体験講演。 2:15→3:30 久保田会長による「宇宙哲学」「アダムスキー論説集」講義。 テレパシー練習、近況報告、自己紹介、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。ＪＲまたは阪急電車「吹田駅」下車。 連絡先＝平塚和義　☎06-436-3478	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	長岡市今朝白1丁目「けさじろ荘」 ☎0258-33-7400。長岡駅東口より徒歩5分。無料駐車場あり。 連絡先＝星 富治夫　☎02579-2-5562	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	福岡市天神町5丁目1-23「福岡市民会館」3Ｆ国際会議控室 連絡先＝喜多正宣　☎092-863-5438	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日　午後1:00→4:30	名古屋市中区金山1丁目5番1号「名古屋市民会館」特別会議室。☎052-331-2141㈹。 ＪＲ東海・名鉄・地下鉄の金山橋より徒歩5分。 連絡先＝林　国宜　☎0586-45-6468	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・テレパシー練習・座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日　午後1:10→4:20	仙台市1番町4丁目「141(イチヨンイチ)ビル内5Ｆエル・パーク仙台セミナー室」 ☎022-268-8300。仙台駅よりバスで県庁市役所前下車、三越デパート隣。 連絡先＝笠原弘可　☎022-295-0725	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
山形支部	毎月第1日曜日　午後1:00→5:00 ※6月の月例会のみ第1日曜から第3日曜に変更。	山形市小白川町「社会福祉センター」 ☎0236-42-5181。山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。 連絡先＝柴田光明　☎0233-25-3261	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日　午後1:00→4:30	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。 ☎011-271-5821 連絡先＝高野省志　☎011-822-8260	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
静岡支部	毎月第1日曜日 午前10:30→5:00 ※午前中は「生命の科学」の研究会。テキスト持参。	静岡市黒金町「静岡労政会館」5階会議室。 ☎0542-21-6280。静岡駅北口より徒歩5分。 連絡先＝野口敏治　☎0542-86-7729	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」2Ｆ小会議室。 ☎0166-26-1304。 連絡先＝川上三秀　☎0166-61-0044	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・質疑応答・テレパシー練習。
群馬支部	毎月第2日曜日　午後1:00→5:00	群馬県太田市「社会教育総合センター」3Ｆ。 連絡先＝久保寺信一　店：☎0276-25-5958 自宅：☎0276-45-3544	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。座談会。
青森支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室。 ☎0177-34-0163。 連絡先＝田村嘉彦　☎0177-38-0416	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表等。
沖縄支部	毎月第4土曜日 午後6:00→10:00	那覇市寄宮1-2-1「那覇市民会館」1Ｆ　A会議室。 ☎0988-55-5081。与儀公園の隣。 連絡先＝新里義雄　☎0988-54-1623	¥1000 (積立金共)	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。質疑応答・想念観察とテレパシーの研究報告・自己紹介・座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日　午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。 ☎0188-24-5377。 連絡先＝伊藤正治　☎0188-62-2831	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
神奈川支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	川崎市川崎区富士見2-5-2「川崎市立労働会館」4階4号室。☎044-222-4416。ＪＲ京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前。 連絡先＝大崎孝典　☎0492-65-0389	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・座談会等。
茨城支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	水戸市梅香1-2「三の丸公民館」小集会室。 ☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一　☎0292-73-1903	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長野支部	毎月第4日曜日　午後1:00→4:30	塩尻市大門7番町「塩尻総合文化センター」第1会議室。 ☎0263-54-1253。 連絡先＝博田文喜　☎0263-58-8510	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
紀南会	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	和歌山県新宮市新宮6682-1「新宮市福祉センター」1Ｆ相談室。☎0735-21-2760。ＪＲ西日本新宮駅下車、徒歩5分。 連絡先＝松口幸之助　☎0735-34-0605(呼・田中)	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」と「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
栃木支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	鹿沼市(市役所裏)「御殿山会館」1Ｆ小会議室。 ☎0289-64-4334。JR鹿沼駅から西へ1.5km。東武新鹿沼駅から北へ1.5km,市内行きのバスに乗り天神町下車,徒歩5分。 連絡先＝渡辺克明　☎0289-62-3319	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長崎支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	長崎市魚の町5番1号「長崎市民会館」 ☎0958-25-1400。公会堂電停前。 連絡先＝元木和雄　☎0958-22-5521	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
薩摩会	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	鹿児島市与次郎2丁目3-1「鹿児島市民文化ホール」 ☎0992-57-8111 連絡先＝鶴田清則　☎09932-5-4398	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。

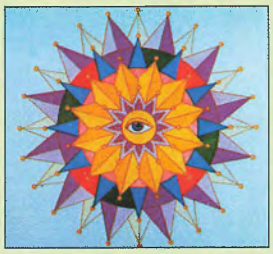
ESPカード

（イーエスピー）

従来テレパシー練習用として紙製のゼナーカードを頒布していましたが、これをプラスチック製の堅牢なカードにし、ゼナーカード25枚、５色の色カード25枚、計50枚を１セットにして「ESPカード」と改称し、プラスチックケース入り美麗製品にしました。色カードは目を閉じたまま各カードの上に手をかざして異なる波動を感知しながら色を言いあてる練習に使用するものです。銀行のキャッシュカードと同じ大きさと厚さのプラスチック製ですから折れずキズがつかず、半永久的に使用できます。ご注文は郵便振替で日本ＧＡＰ宛にどうぞ。

50枚１セットケース入り　　使用説明書付き

¥4,800 送料¥350　2～5個¥700



①オーソン肖像写真　②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。（キャビネ判・カラー写真）上半身写真もあり。定価¥600

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。（サービス判・カラー写真）

上記２点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本ＧＡＰ宛直接に振替でどうぞ。

①¥600 送料¥120 ②¥300 送料¥60 一括注文の場合送料¥120

「宇宙哲学」「アダムスキー論説集」解説講義録音テープ

昭和63年５月より毎月開催東京月例研究会で日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生が新鮮雄大な構想のもとにアダムスキーの名著を解説する録音テープ。テレパシーを主体に人間を救う能力開発法を説いた名講義。ＧＡＰ会員必聴の重要資料。月例会における近況報告も録音。

テープ１本（120分）　¥1300　送料¥200

※このテープは日本ＧＡＰでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい（２月分より在庫）。

〒430 静岡県浜松市三島町577-1　小島国弘
☎0534-42-3507　振替＝名古屋7-51065

会員募集

日本ＧＡＰはＵＦＯ研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のＵＦＯと宇宙哲学の研究大集団！多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう！入会案内書をハガキで日本ＧＡＰへ申し込もう！

――日本ＧＡＰ――

GAPテレホンカード

GAP独特の優美なデザインによるテレホンカードです。50度数。少部数につき早目に振替でご注文下さい。

１枚¥1500　送料10枚まで¥60

会員バッジ

実物大

ジョージ・アダムスキーが金星人から与えられた唯一のバッジと形、色共全く同様に複製した径18mmの丸い優美なバッジです。薄青色地に金色のシンボルマークが浮彫りされており、縁も金色です。表面には透明樹脂がかけてありますからキズがつかず、光を反射してキラキラ輝きます。男性用は裏側が心棒ネジどめ式、女性用は裏側が安全ピン式です。ぜひお求め下さい。ご注文のさいは男性用・女性用の別を明記して郵便振替で日本GAPへご送金下さい。（無断複製を禁じます）

１個¥2000　送料４個まで¥120

編集後記

★本号より記事中写真をカラー化し体裁を一新しました。これでわが国唯一の本格的ＵＦＯ専門誌の風格がそなわります。末長くご愛読下さい。本号はＧＡＰ会員によるＵＦＯ目撃報告を主体にしました。

★「宇宙的家族のＵＦＯ目撃の日々」は、こんな素晴らしい家族もあるのかと読む人に羨望と賛嘆の念を起こさせる感動の手記です。この記事中の目撃はほんの一部のようです。

★「円盤の窓から手を振る“異星人”」は少々古いことですが、今なお語り継がれている重大な事件ですからあらためて掲載しました。筆者の特殊なカルマがうかがわれます。

★「長野県に出現したＵＦＯの大群」も不思議な事件です。ビデオで見ますと迫力ある画面が次々と展開します。

★「頻繁なＵＦＯ目撃と超能力体験」はＵＦＯ目撃と超能力的なものとの関連、ひいては宇宙的カルマというものを考えさせる意義深い内容です。前記二名の筆者と共通点があることに気づかれるでしょう。

★「ＵＦＯ―宇宙からの完全な証拠」はいよいよ火星の望遠鏡観測の歴史を掘り起こし、火星に偉大な文明が存在する証拠を提示し始めました。火星の項は次号にも続きます。ご期待下さい。

★ＵＦＯ目撃報告、ＵＦＯ写真、超能力開発体験、宇宙哲学、宇宙科学研究等の原稿を募集します。心霊的なものはご遠慮下さい。採用分には薄謝を呈します。

★本誌は約百名のボランティアにより全国の主要書店に卸されています。この奉仕活動に参加を希望される方はハガキでお申込下さい。説明書をお送りします。

（K）

日本ＧＡＰ機関誌・季刊　夏季号
UFO contactee　101号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本ＧＡＰ
〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511
☎03-6651-0958
振替　東京4-35912
昭和六十三年四月二十五日発行
定価九〇〇円・送料２００円

※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

★ちょっと異次元体験してみませんか？★

あなたを「宇宙人」にする宇宙波動音楽

宇宙波動を生み出す音の魔術師IASOSがあなたを大宇宙へご招待します！

今、アメリカで最も注目されている新時代音楽のクリエーターのひとりIASOS。――彼の〝異次元宇宙音楽〟の宇宙波動が、悩みや不幸の誘因である地球の低い波動の呪縛から、あなたを解放します。「ヤソス」の宇宙波動に乗って、あなたも「意識の宇宙遊泳」「宇宙人気分」を楽しんでみませんか？

あなたを変える宇宙波動音楽

聴いているだけで、思わず「宇宙船で月面旅行しているような」「UFOに乗せてもらっているような」気分になってしまう、とても不思議でファンタスティックな音楽が、アメリカからやってきました。〝ギリシャ生まれの宇宙人〟こと、アクエリアスサウンド界の異才「ヤソス」の作曲になる宇宙波動音楽がそれ。

人間の意識の波動を高め、ひいては、この地球自体の波動をも高めてしまおうという遠大な意図をもって作られた宇宙波動音楽。非常に宇宙的な響きを持っていると同時に、光速を超えた世界（すなわち異次元世界）の波動を聴く人の意識の中で起こさせるこの音楽は、まるでUFOから発射された光線のような神秘的な力を持っています。

アメリカでも、瞑想愛好家・アクエリアンエイジの若者を始め、〝本物〟を理解できる多くの人々に親しまれています。一般の人々はもとより、NASA（アメリカ航空宇宙局）の教育センター、百科事典でおなじみのブリタニカ社、そして先駆的医療を先取りする全米の医療機関などでも、この音楽の持つ不思議な力が評価され公式採用されています。

あなたの部屋が宇宙波動で満たされる

アポロ宇宙船に乗り込み大気圏外・月面を遊泳した宇宙飛行士が何人もロ々に「神を見た」「本当の自分と出会った」と言い残して、退役後に牧師になったり、平和活動家になってしまった――この話は余りにも有名です。宇宙飛行士達が地球の大気圏を離れたとたん（つまり地磁気の波動の影響下から離れた時）「神を見た」と感じるような高い波動を感じたということは、今の地球大気圏内の波動レベルがいかに低いものであるかを、はからずも証明したということに外なりません。

実は、あなた自身、この地球のきわめて低い波動の影響下にあり、この低い波動に共振する意識の部分しか目醒めていないため、種々の不自由さ・悩み・不幸をかかえてしまっているのです。この地球の低い波動レベルの影響から意識を解放するため、古来からヨガを始めとする色々な行法そして瞑想法が開発されてきました。

ヤソスの宇宙波動音楽も同じように、この地球の低い波動から意識を解放し、「悩み・不安」などとは無縁の、人間本来の自由自在な至福に満ちた意識レベルを実現するために作られたものです。

うっとりとして音楽に心を合わせる、瞑想導入音楽として聴く、夜空をながめながら〝宇宙人気分〟で聴く――自分に合った方法でこの音楽に心を合わせることにより、あなたの部屋は宇宙波動で満たされ、あなたの意識は徐々に今までの束縛から解放され、自由と喜びに満たされたものになってゆきます。

▼ヤソス宇宙波動音楽ライブラリー

アルバム名
①WAVE I
②WAVE #2 ELIXIR
③ANGELIC MUSIC
④JEWELD SPACE

★IASOS（ヤソス）のプロフィール★

1947年ギリシヤ生まれ。4才の時に両親とアメリカに渡る。コーネル大学で文化人類学を専攻するが、大学在学中におけるTM（超越瞑想）体験および各種の神秘体験を経て宇宙意識にめざめ、宇宙意識の波動を持った音楽の創造をライフワークとすることを決意。現在も親交を温めているS.ハルパーンらの知己を得、宇宙波動を想起させる音楽的にも最高度に完成された"INTER-DIMENSIONAL MUSIC"（次元を超えた音楽）を創作し発表。一躍、全米で有名となる。

宇宙波動音楽アルバム（テープ4巻）を特別頒布中!!

今アメリカで話題のヤソス作曲の「宇宙波動音楽ライブラリー」のカセットテープアルバム（テープ4巻）を頒布会方式で特別頒布いたしております。

お申込み後、初回から4ヶ月にわたって毎月カセットテープ一巻が届けられ、お支払いは毎月テープ到着後に、3,500円の送料300円。

初回、二回目以降を問わず、テープ到着後5日間の無料試聴期間を設けていますので、万一、曲が気に入らなければその時点で返品できます。又、途中でご購入を止めるのも自由です。

■一括購入もできます。

テープ4巻を一度に購入したいという場合は、「一括購入希望」と明記の上お申込み下さい。テープ4巻をまとめてお届けし、お支払いは13,500円の送料500円（5日間無料試聴できます。一括購入申込みの場合は、4巻まとめてご購入あるいはご返品願います。）

お申込みは今すぐハガキ・電話で!!

お電話のお申込みは
03（479）6576
受付時間AM10～PM20

●「宇宙波動音楽ライブラリー」試聴申込
●頒布会・一括の別
●住　所
●氏　名
●電話番号
●年　令
●職　業

40 郵便はがき
〒107
東京都港区赤坂9－6－27
日本ニューエイジセンター
UF④係

〒107 東京都港区赤坂9－6－27
日本ニューエイジセンター
電話 東京03（479）6576

当センターは「ヤソス」の音楽の日本における独占販売権を取得し、現在国内普及に努めております。「卸売り」「販売代理店」をご希望の方は右記までご一報下さい。

UFO contactee 101号
昭和63年4月25日発行　発行所　日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色1-12-1-511　振替　東京4-35912
定価九〇〇円・送料二〇〇円

試聴用テープを無料で差し上げます!!

全く努力なしに、ただ聴いているだけで

潜在脳刺激法（サブリミナルテープ）であなたの人生が変わる!

先着500名様限り
今すぐお申込み下さい!!

「記憶力・集中力強化」「女性にもてる魅力的性格」「性エネルギーの強化」「恋愛・仕事の成功」「最高の頭脳」等々を全く努力なしに現実のものにしてくれる奇跡のテープ「サブリミナルテープ」がアメリカからやってきました。

発売を記念して先着500名の方に試聴用テープを無料で差し上げます。今すぐおハガキ・お電話でお申し込み下さい。

あのハルパーン博士があなたのために制作!!

「魅力的性格」「潜在能力開発」「理想的恋愛の実現」「仕事・勉強の能力向上」「最高の頭脳……これらを努力なしに現実の物にしたい――これは、どんな人でも多かれ少なかれ持っている共通の願望でしょう。ところが、この夢をいとも簡単に実現してしまうテープがアメリカからやってきたのです。それがアメリカでは知らない人はいないほど有名な心理学博士スティーヴン・ハルパーン氏の開発したサブリミナルテープです。

博士の手になるサブリミナルテープは、米国で昨年一年間だけで五十数万本という驚異的ベストセラーを続け、その確かな効果が実証されています。

BGMとして聴くだけで効果が!!

このサブリミナルテープ、耳に聴こえるのは、うっとりするような美しいメロディーの心がゆったりとくつろいでくる静かな音楽だけです。（日本の曲でいえば"喜多郎"の音楽にイメージが似ている。この音楽だけでもストレスを解消し、気分をさわやかにするすぐれた効果がある）しかし、実はこの音楽に、ハルパーン博士が開発した他に真似のできない高度な音響テクノロジーを駆使して、ある心理学的な言葉のメッセージが耳に聴こえない周波数に変換されて入っているのです。（潜在脳に独特の刺激を与える音楽の波長が、耳に聴こえないメッセージの波長を潜在脳へ運び、植えつけてしまう。）

この音楽に交って入っている"耳に聴こえない心理学的メッセージ"が、ただテープの音楽を聴いているだけで、"記憶力・集中力等が自然に高まる"、"自然に理想の恋人ができてしまう"、"仕事・勉強の能率が驚くほど上がる"、"知らず知らずのうちにまわりの人から好かれるようになってしまう"という現象を引き起こす秘密なのです。

「本を読んだり趣味に熱中している時に、BGM音楽として聴き流しているだけで、夢がかなってしまう」――このアメリカの苦労いらずの科学的プログラムが、ついに日本の皆様にもご利用いただけるようになったのです。

◆数多くの目的別テープを販売中◆

■現在、左のテープをはじめとして、「能力開発」「恋愛成功」「ビジネス能力向上」「魅力的性格づくり」「速読・学習能力向上」等々をテーマにしたシリーズを販売いたしております。

- ●大脳を活性化する
- ●心身の緊張をとる
- ●女性を魅了する
- ●集中力の強化
- ●創造力の強化
- ●個性的魅力を出す
- ●自信をつける
- ●勉強の習慣をつける
- ●学習能率を上げる
- ●速読能力をつける
- ●禁煙の実行
- ●ストレスコントロール
- ●積極的思考の習慣づけ
- ●コミュニケーション能力の強化
- ●減量の実現
- ●性エネルギーの強化
- ●スポーツ・運動の習慣づけ
- ●さわやかな毎日を送る
- ●他人を無条件でひきつける

●スティーヴン・ハルパーン博士のプロフィール●

音楽・音・言葉の潜在意識への作用の研究で世界的にその名を知られる心理学博士。学者であると同時に"瞑想音楽の神様"としても米国はもちろんヨーロッパ各国にその名を知られ、世界的なファンを数多く持っている。博士の音楽は鑑賞用の音楽としても高く評価されているが、博士の長年の研究のエッセンスが凝縮した"音楽の薬"としての効能も医学・心理・教育関係者の間で高い評価を受け、いろいろな分野で博士の音楽を取り入れている。カイザー・パーマネント病院をはじめ全米の一流の医療機関では、博士の音楽を薬品の代わりとして患者に与え著しい効果を上げている。

先着500名の方に試聴用テープを無料進呈中!!

■サブリミナルテープは、アメリカでも「ウォールストリートジャーナル」「タイム」「オムニ」等に記事として取り上げられ話題になっています。

■当社のサブリミナルテープは、朝日新聞で写真入りで紹介されたのをはじめ、文化放送「やる気まんまん」、TBSラジオ「日本全国8時です」等でも"アメリカからやってきた驚くべきテープ"として大々的に紹介されました。

■試聴用テープをご希望の方は、「無料サンプルテープ1希望」と明記の上、ハガキ・電話でお申込み下さい。試聴用サンプルテープと詳しい案内書を無料でお送りします。（サンプルテープの返品の義務や商品購入の義務は全くありませんので安心してお申込み下さい。）

●今回お届けする「無料サンプルテープ1」はS・ハルパーン博士の自らの作曲になる、7つの波動レベルからなる心と体そして頭脳を最高のくつろぎの状態に導く音楽に、耳に聴こえない言葉を同調させたアメリカで最も人気のあるテープのひとつです。

●当社では「恋愛成功」「ビジネス成功」「魅力的性格づくり」「潜在能力の開発」等々の数多くのシリーズを販売しています。これらのシリーズを詳しく紹介した案内書も無料サンプルテープと同時にお送りいたします。

〈申込方法〉住所・氏名・年令・職業・電話番号を明記の上「無料サンプルテープ1希望」と下記まで、おハガキ・お電話で今すぐお申込み下さい。（サンプルテープのお申込みは16才以上の方に限らせていただきます。）

〒107　東京都港区南青山1-26-4
アメリカンライブラリー社UFO④係
電話　東京03(479)5864（受付AM8～PM24　日・祭日も受付中）